

一般国道18号妙高野尻バイパス関係発掘調査報告書 I

おお ほり
大 堀 遺 跡

1996

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道18号妙高野尻バイパス関係発掘調査報告書Ⅰ

大 堀 遺 跡

1996

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道18号妙高野尻バイパスは長野県上水内郡信濃町野尻と新潟県中頸城郡妙高高原町毛祝坂を結ぶ全長4kmの2車線道路です。新潟と長野県境は全長902mの信越大橋が池尻川・関川・清瀬川の3本の河川をまたいで結びます。この道路の完成によって、交通量の緩和や急カーブが連続する県境付近での事故防止と安全確保が図られることが期待されます。

本バイパスについては、新潟県教育委員会が平成3年度に分布調査と一次調査を行い、平成4年度から7年度にかけて二次調査を行いました。発掘調査を終了した現在、完成にむけて着々と工事が進められております。

本書は、この道路の建設に先立って調査された「大堀遺跡」の発掘調査報告書です。大堀遺跡は県境近くの清瀬川左岸に立地しています。調査の結果、旧石器時代・縄文時代草創期?~前期・平安時代・中世・近世の遺物が出土しました。中心となるのは縄文時代早期ですが、各時代の遺物とも信州地方からの強い影響を受けているのがわかります。また、検出された遺構では縄文時代早期前半の陥穴状土坑列が注目されます。これは全国的にみても古い部類に含まれることから、妙高山麓で早くから人々が活発に活動していた様子がうかがわれます。

今回の調査結果が、今後の本県の縄文時代のみならず、歴史を解明するための資料として広く活用され、広い意味での文化財に対する理解と認識を深める契機にしていただければ幸いります。

最後に、本書の刊行までの間、多大なご協力とご援助を賜った地元の人々、ならびに妙高高原町教育委員会をはじめ、建設省高田工事事務所に対して厚く御礼申し上げます。

平成8年3月

新潟県教育委員会

教育長 平野清明

例　　言

1. 本報告書は新潟県中頸城郡妙高高原町大字間川字大堀1276ほかに所在する大堀遺跡の発掘調査記録である。
2. 発掘調査は国道18号線妙高野尻バイパスの建設に伴い、新潟県が建設省から受託して実施したものである。
3. 発掘調査は新潟県教育委員会（以下、県教委と略す）が調査主体となり、財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団と略す）が平成3年度～7年度に実施した。
4. 整理および報告にかかる作業は平成5年度～7年度に実施し、埋文事業団職員がこれにあたった。
5. 出土遺物と調査にかかる資料は、すべて県教委が保管・管理している。遺物の註記記号は「大ホリ」として出土地点・層位などを併記した。
6. 本書で示す方位はすべて真北である。作製した図面のうち既成の地図を使用したものについては、それぞれにその出典を示した。
7. 遺物番号は繩文土器、石器、平安時代以降の遺物でそれぞれ通し番号を付し、挿図と写真図版の番号は一致している。
8. 文中の注釈は頁ごとに脚注を付した。また、引用文献は著者および発行年を文中に（ ）で示し、巻末に一括して掲載した。
9. 本書の記述は寺崎裕助（埋文事業団調査課第二係長）、三浦泰介（同主任調査員、平成6年3月転出）、和田壽久（同主任調査員）、大滝正人（同主任調査員）、立木（土鶴）由理子（同文化財調査員）、佐藤執二（同嘱託員）が担当した。分担は第Ⅰ章1が三浦・和田、第Ⅰ章2が立木・三浦・和田、第Ⅰ章3が和田・佐藤、第Ⅱ章・第Ⅲ章3が立木・大滝、第Ⅲ章4A・第V章2Aが寺崎、ほかは立木である。編集は立木が担当した。
10. 本遺跡については、1994・1995・1996年刊行の『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』に概要報告があるが、本書の記述をもって正式な報告とする。よって、上記『年報』と本書に齟齬のある点は、本書の記述をとるものとする。
11. 年代測定は平成6年度調査時に、古環境研究所にお願いした。
12. 遺跡内の地質については早津賢二氏、近藤洋一氏にご教示を賜った。
13. 周辺の遺跡分布図の作成に当たっては長野県信濃町教育委員会から多くの資料を提供して頂いた。
14. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大なご教示とご協力を賜った。厚く御礼申し上げる。（五十音順、敬称略）

石原正敏 伊藤秀雄 大竹憲昭 小熊博史 可児通宏 金子拓男 小島正巳 小林達雄 近藤洋一
齊藤基生 佐藤雅一 白石典之 菅沼直 関雅之 高橋勉 滝川重徳 田中耕作 田辺早苗
谷和隆 谷藤保彦 鶴田典昭 寺島俊郎 中村由克 野村宗作 林直樹 早津賢二 藤田邦雄
前山精明 宮下健司 宮田明 繪田弘実 渡辺哲也

目 次

第 I 章 序 説	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 遺跡周辺の地理的環境	2
3. 周辺の遺跡	4
第 II 章 調査の概要	6
1. 発掘調査	6
A. 一次調査	6
B. 二次調査	7
(1) 調査地の範囲と現況	7
(2) グリッドの設定	7
(3) 調査方法	7
(4) 調査経過	8
C. 調査体制	10
(1) 一次調査	10
(2) 二次調査	10
2. 整理作業	11
A. 整理方法	11
(1) 遺 物	11
(2) 遺 構	11
B. 整理経過	11
C. 整理体制	11
第 III 章 遺 跡	12
1. 概 要	12
2. 層 序	12
3. 縄文時代の遺構	13
A. 概 要	13
B. VI層で検出された遺構	13
(1) 陥穴状土坑	13
(2) 燃土遺構	14
(3) その他の遺構	14
C. IV層で検出された遺構	15
4. 旧石器時代と縄文時代の遺物	16
A. 土 器	16
(1) 概 要	16

(2) 遺構出土の土器	17
(3) グリッド出土の土器	17
a. 表裏縄文土器	17
b. 押型文土器	18
c. 絡条体压痕文土器	18
d. 条痕文土器	19
e. 縄文土器	19
f. その他の土器	20
B. 石器	21
(1) 概要	21
(2) 旧石器時代の石器	21
(3) 縄文時代の石器	22
a. 石器集中地点1	22
b. 石器集中地点2	24
c. 石器集中地点3	24
d. 集中地点外の石器	24
5. 平安時代以降の遺構	24
A. 概要	24
B. 遺構各説	24
(1) 土壙墓	24
(2) その他の遺構	25
6. 平安時代以降の遺物	25
A. 平安時代の遺物	25
(1) 須恵器	25
(2) 土師器	25
B. 中世の遺物	26
C. 近世以降の遺物	26
(1) 陶磁器	26
(2) 金属製品	26
(3) 土製品	27
(4) 石製品	27
第IV章 年代測定	28
第V章 まとめ	29
1. 旧石器時代のナイフ形石器について	29
2. 縄文時代の遺物・遺構	30
A. 縄文土器について	30
B. 石器について	32
C. 陥穴状土坑の構築時期について	32

要 約	34
引用・参考文献	40

挿 図 目 次

第1図 大田切川火砕流堆積物・赤倉火砕流堆積物・田口岩屑なだれ堆積物の分布	3
第2図 周辺の遺跡分布（旧石器時代～縄文時代前期・平安時代の遺跡）	5
第3図 遺跡の位置	6
第4図 調査範囲とグリッドの設定	7
第5図 年度別調査範囲	8
第6図 基本層序	12

表 目 次

第1表 大堀遺跡の放射性炭素年代測定結果（学習院大学年代測定室）	28
第2表 大堀遺跡の縄文土器編年対比表	31
第3表 遺構観察表	35
第4表 旧石器時代・縄文時代の石器観察表	36
第5表 平安時代以降の遺物観察表	38

図 版 目 次

図面

図版1 大堀遺跡遺構配置図	図版10 縄文土器（II群）
図版2 陥穴状土坑(1)	図版11 縄文土器（II群・III群・IV群）
図版3 陥穴状土坑(2)	図版12 縄文土器（IV群）
図版4 陥穴状土坑(3)	図版13 縄文土器（III群・IV群）
図版5 焼土遺構・その他の遺構(1)	図版14 縄文土器（III群・IV群・V群）
図版6 その他の遺構(2)	図版15 縄文土器（V群）
図版7 その他の遺構(3)・縄文土器出土状況図	図版16 縄文土器（V群）
図版8 近世の遺構	図版17 縄文土器（V群・VI群）
図版9 縄文土器（遺構出土分・I群）	図版18 旧石器時代の石器・ 縄文時代の石器（集中地点1）

- 図版19 縄文時代の石器（集中地点1）
図版20 縄文時代の石器（集中地点1）
図版21 縄文時代の石器（集中地点2・3）
図版22 縄文時代の石器（集中地点外）・
石器出土状況概観図
図版23 平安時代の遺物
図版24 中世以降の遺物

写真

- 図版25 2C土層 9H土層 5F土層 9J土層 3L土層 9K土層 3M土層 8O土層
2Q土層 調査区南東側切り通し断面
- 図版26 Q列陥穴状土坑列検出 Q列陥穴状土坑列完掘 SK22半截・完掘 SK23半截・完掘
SK24半截・完掘 SK25半截・完掘
- 図版27 SK26半截・完掘 SK27半截・完掘 SK28半截・完掘 SK29半截・完掘 SK30
半截・完掘
- 図版28 SK31半截・完掘 SK32半截・完掘 SK33半截・完掘 SK34半截・完掘 SK35
完掘 J列陥穴状土坑列完掘
- 図版29 焼土造構1半截 焼土造構2半截 SX55検出（北東から） SX55検出（北から） S
X55表裏縄文土器出土状況 g区SX群完掘 SX1半截 SX2半截 SX3半截
SX4完掘
- 図版30 SX5完掘 SX6完掘 SX54疊出土状況 Pit5完掘 SX57半截 SX56半截
SK11半截・完掘 SX8遺物出土状況 SX9完掘
- 図版31 4E25縄文土器出土状況 30・P疊出土状況 Q列旧石器時代文化層確認調査 10M・N
旧石器時代文化層確認調査 SK15半截・完掘 SD30土層・完掘 SX32土層・完掘
- 図版32 縄文土器(1)
- 図版33 縄文土器(2)
- 図版34 縄文土器(3)
- 図版35 縄文土器(4)
- 図版36 縄文土器(5)
- 図版37 縄文土器(6)
- 図版38 縄文土器(7)
- 図版39 縄文土器(8)
- 図版40 縄文土器(9)
- 図版41 旧石器時代・縄文時代の石器(1)
- 図版42 縄文時代の石器(2)
- 図版43 縄文時代の石器(3)
- 図版44 縄文時代の石器(4)
- 図版45 平安時代以降の遺物

第Ⅰ章 序 説

1. 調査に至る経緯

一般国道18号妙高野尻バイパスは、新潟県中頸城郡妙高高原町と長野県上水内郡信濃町を結ぶ、全長4kmのバイパスである。本国道の沿線には、妙高山麓を中心として、新潟・長野両県に観光地、レジャー施設等が点在している。そのため、沿線市町村のみならず広域からの利用者が多い国道である。

本国道は県境付近で急カーブが連続し、その上全国有数の豪雪地帯に位置することから、冬期間は特に事故が多発する。そのような中、上信越自動車道の建設計画と相まって、交通量の緩和と安全確保をはかるためのバイパス道路工事の計画が、建設省北陸地方建設局（以下、「北陸地建」とする。）で立案されたに至った。

平成3年1月4日に県教委へ北陸地建から、妙高野尻バイパス法線内の分布調査依頼があった。これに對し県教委は、融雪後に実施することとし、実施時期に關しては、後日改めて連絡する旨北陸地建へ通知した。その後、同年4月16日に、北陸地建から実施時期についての問い合わせがあった。その時点で県教委は、すでに各発掘現場の調査が開始されている現状から、分布調査は現場が軌道に乗る5月の連休明け以降になると回答をした。そして同年5月に、分布調査を6月13日から実施する旨を北陸地建に通知した。

分布調査の結果、新遺跡2か所を発見し、周知の遺跡5か所について一次調査をする必要があるという結論を得た。県教委は結果を平成3年7月1日に北陸地建に通知し、一次調査実施時期については妙高・野尻バイパスの共用開始が平成8年であること、さらには調査員数確保の問題があること等から、平成4年度の実施が望ましいことを告げた。その後、同年9月27日に一次調査実施時期について協議が持たれた。北陸地建からは平成4年度実施では工事工程に支障を來すとして、平成3年度中の実施希望が出された。県教委では体制等を検討した結果、これを了承することとした。一次調査は同年8月から発掘調査が行われていた郷清水遺跡（上信バイパス除雪ステーションエリア）から職員2名を派遣し、同年11月11日から11月22日まで実施した。未買収地点が2か所あったものの、調査の結果、平安時代の土器器・須恵器や绳文時代前期～晚期の土器片が検出され、3遺跡（東浦遺跡、大堀遺跡、中ノ沢遺跡）については二次調査が必要であるという結論を得た。この結果をもとに県教委と北陸地建との間で再度協議が持たれ、県教委は北陸地建の要請である平成4年度の二次調査実施を了承した。そこで、県教委は埋文事業団に委託をして平成4年7月6日から11月20日まで東浦遺跡の調査を実施した。東浦遺跡の調査終了後、平成5年2月に行われた県教委・埋文事業団と北陸地建の三者協議で、大堀遺跡の二次調査と一次調査未実施の3地点の調査を平成5年度に実施することで合意した。

2. 遺跡周辺の地理的環境 (第1図)

大堀遺跡の所在する妙高高原町は、行政区画としては中頭城郡に属している。北方は妙高村、西方は糸魚川市、そして南方は関川を挟んで長野県上水内郡信濃町と境を接している。妙高高原町は関川本流および支流沿いのごく限られた冲積低地を除くと、ほぼ全域が山地や高原から成っている。

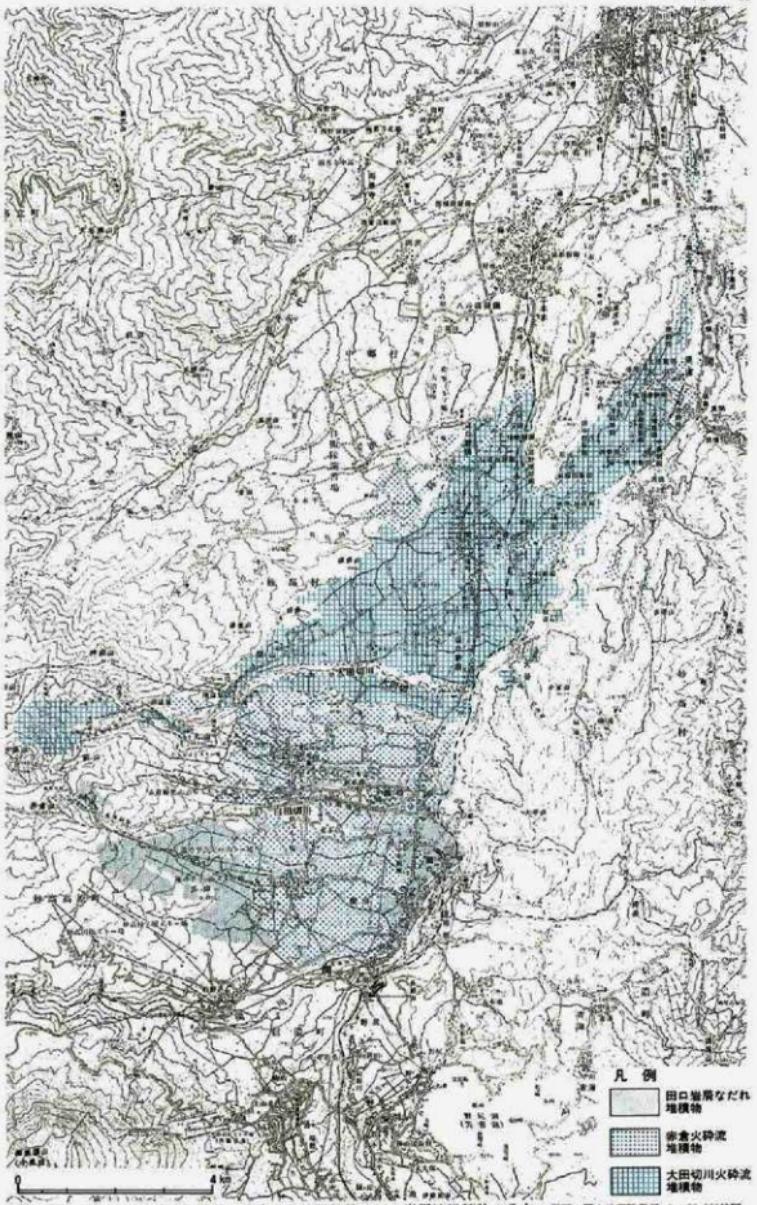
町の基盤をなすのは新生代第三紀中新世の隆起によって生まれた西頭城山地で、標高約1,300mの笠ヶ峰の高原とともに町の西側を占めている。西頭城山地には、隆起によって生まれた火打山(2,462m)などの山と、隆起とともに生じた火成岩の貫入により生まれた金山、天狗山、乙妻山、高妻山などの山がある。これら非火山の山々は町の中のかなりの面積を占めている。その後の火山活動で生まれた妙高火山(2,445.9m)や焼山火山(2,400m)は西頭城山地の上に載る形で町の中部から東部を占めている(山崎1986)。また、関川を挟んで南側には黒姫山、佐渡山、さらに南へ進むと飯縄山、南東側には斑尾山などがそびえている。大堀遺跡は妙高山麓三ツ山の南東山麓に立地し、遺跡の南方約80mのところを関川水系の清瀬川が東流している。

妙高山麓で発掘調査を行うと、遺跡内に妙高火山起源の噴出物が複数枚堆積しているのが認められる。妙高火山は数十万年前から現在に至るまでに4回の活動期と各活動期の間にはさまれる3回の休止期があり、その間噴火と崩壊・侵食を繰り返しながら今見るように複式成層火山となった。このうち遺跡の発掘で認められる噴出物は第4回目の活動期(第IV期)に噴出されたものが主体である。第IV期は約3万年前のシブタミ川火砕流堆積物の噴出に始まり、現在はその終末期に当たる(早津1986b)。大堀遺跡で認められた関川岩屑流堆積物・田口岩屑流堆積物・赤倉火砕流堆積物・大田切川火山灰はこの第IV期の噴出物である。

関川岩屑流堆積物は大田切川流域～関川左岸地域(旧原通村)に分布する。旧原通地域に点在する泥流丘群はかつて“原通古墳群”と呼ばれていたことがある(早津1985)。¹⁴C年代は19,600±600y.B.P.(Gak-409)(妙高研研グループ1969)である。田口岩屑なだれ堆積物(早津1995a)は関川と白田切川に挟まれた妙高山火口付近から中腹部と関川左岸の一部に広がっている。¹⁴C年代値は7,780±160y.B.P.(Gak-7545)である(早津・古川1981)。赤倉火砕流堆積物は、南北二つの地獄谷に沿って流下しながら周辺部に広がり、一部は新井市まで達している。片貝川や白田切川流域から東に向かって厚くなり、数mから数十mに及ぶ所も観察される。¹⁴C年代は5,880±190y.B.P.(Gak-7543)(早津・古川1981)、5,710±140y.B.P.(Gak-11393)(早津1985)が得られていたが、最近の測定では従来の年代値よりかなり若い値が示されているという(早津1994)。考古遺物との層位的関係からみた噴出時期は繩文時代早期末～前期初頭と推定されている(小島1995)。大田切川火山灰は妙高山頂から野尻湖、二本木を結ぶ線の間に分布する。¹⁴C年代は4,550±160y.B.P.(Gak-10572)である。なお、これと密接に伴う大田切川火砕流の¹⁴C年代は測定値にばらつきがあるため、約4,000～4,500年前という幅をもった値が示されている(早津1985)。考古遺物との関係では繩文時代中期末～後期初頭の形成時期が考えられている(早津・小島1985)。

以上のような妙高山起源の噴出物のほか、妙高山東麓地域には姶良一丹沢火山灰(AT)や大山一倉吉軽石(DKP)などの広域テフラの分布も見られる。

妙高山麓には数多くの遺跡が分布し、それらは幾種類もの噴出物に覆われている。そのため、この地域一帯は考古学と地質学がその成果を補いながら研究を進めていく絶好のフィールドとなっている。



第1図 大田切川火砕流堆積物・赤倉火砕流堆積物・田口岩屑流堆積物の分布

原図：国土地理院発行 1:50,000 地図
第48回黒石山の地質図「高田
内部」(昭和6年)
「(平成元年)「妙高山」
「巣山」(平成5年)
「戸隠」(平成7年)「妙高大山群」
(平成1984) 93-94頁を改変

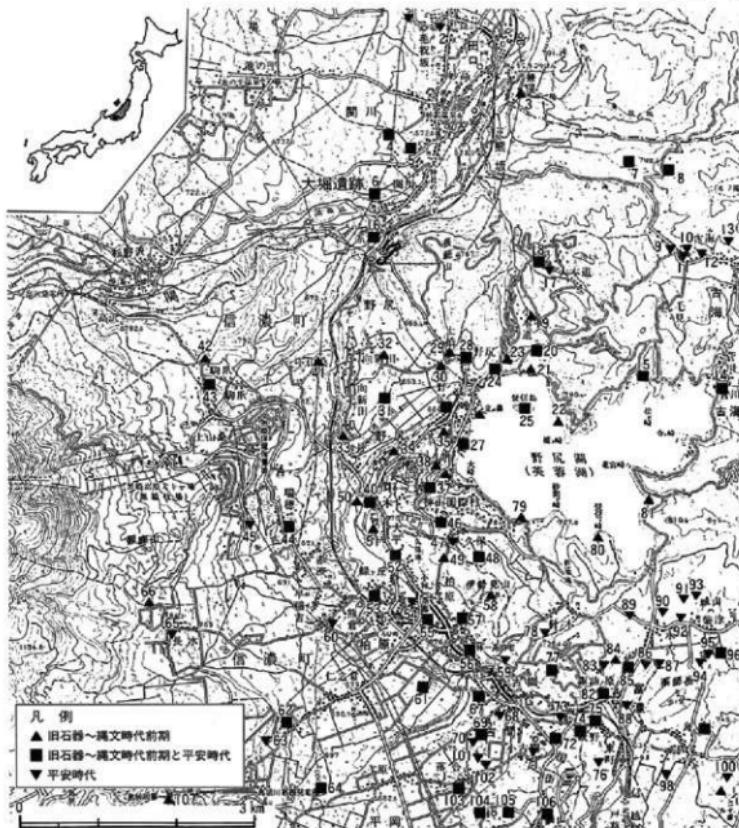
3. 周辺の遺跡（第2図）

県境周辺は、ここ4・5年の一般国道18号妙高野尻バイパスや上信越自動車道建設工事等に係る発掘調査により、旧石器時代や縄文時代草創期～前期、平安時代等の歴史的解明が進行した。ここでは、発掘調査の成果を中心に記述していきたい。

妙高山（標高2,445m）東南麓に立地する大堀遺跡は、関川を隔てて長野県北端の町、上水内郡信濃町と隣り合っている。同町にはナウマン象の発掘で著名な野尻湖が所在し、その周辺は、旧石器時代を中心に縄文時代や平安時代の遺跡が多く、それもほとんどが複合して発見されている。これらの遺跡の内、仲町・貫ノ木・西岡A・日向林B・上ノ原・東裏・裏ノ山・七ツ栗・丸谷地・大道下等の各遺跡は、平成5～7年度に長野県埋蔵文化財センターや信濃町教育委員会で次々と発掘調査が行われ、遺跡の性格や範囲等が明らかにされてきている（中村他1995、渡辺他1994・1995、大竹他1994・1995、長野県埋蔵文化財センター1993・1994）。貫ノ木遺跡と西岡A遺跡は、野尻湖南岸の起状の多い丘陵中腹部から山頂付近を中心位置する。貫ノ木遺跡は、旧石器時代・縄文時代草創期・早中期・平安時代の遺構・遺物が出土している。主な遺構としては旧石器時代の礫群や炭化物集中区、集石遺構があり、遺物は旧石器時代の砥石・ナイフ形石器・局部磨製石斧・石刃等と縄文時代の表裏縄文土器・押型文土器・無文土器等が出土している。西岡A遺跡では旧石器時代の瀬戸内系ナイフ形石器や縄文時代草創期の尖頭器等が発見されている。また、日向林Bや東裏の両遺跡でも旧石器時代の瀬戸内系ナイフ形石器が出土し、同系統のナイフ形石器の信越国境付近での分布が注目されている。日向林B遺跡では旧石器時代の磨製石斧が41本と国内最多の出土数を誇る。その他に、両遺跡から縄文時代草創期の表裏縄文土器、早期の押型文土器・条痕文土器、平安時代の遺構・遺物が出土している。

国道18号線の県境をほとんど真下に見下ろす大堀遺跡は、野尻湖から直線で約4kmである。大堀遺跡の位置する妙高高原町周辺でも発掘調査で該期の遺構・遺物が検出された事により、野尻湖周辺の遺跡とのつながりが濃厚になってきたと言える。大堀遺跡の北方約600mで標高約590mに存在する中ノ沢遺跡（阿部1994、和田1994）は、16基の陥穴状土坑群や多くの押型文土器、平安時代の竪穴住居跡等が検出されている。さらに、中ノ沢遺跡の西方約50mに閑川谷地A・B遺跡（小池1995、滝沢1995、小池1996）があり、集石土坑や相当量の押型文土器、焼失した平安時代の竪穴住居跡等が出土している。また、大堀遺跡の北方約2.4km、標高約530mには東浦遺跡（埋文事業団1993）が存在する。この遺跡は、平安時代の掘立柱建物跡1棟と竪穴住居跡1軒が検出され、大量の須恵器も出土したほか、縄文時代前期の土器や石器も発見された。このほか、閑川左岸の標高約500mの兼俣遺跡A地区（本間1976）では竪穴住居跡や縄文時代前期～晩期の土器・石器が出土している。

以上概観したように、野尻湖周辺においては旧石器時代や縄文時代草創期～前期にかけての遺跡が数多く発見されている。これらの遺跡は縄文時代中期以降減少するが、平安時代に入ると再び増加する。このような傾向は妙高高原町周辺の遺跡においてもおおよそ該当し、妙高高原町田切から妙高村閑山の間は、大田切川火碎流が厚く堆積しているため、縄文時代中期中葉以前の遺跡は希薄になっている。平安時代になると律令制の下に北国街道沿いに東山道の支道が通っていたと考えられ、信越国境周辺にまで開拓の手が及んでいたものと考えられる。



凡 例

▲ 旧石器～満文時代前期

■ 旧石器～绳文時代前期と平安時代

▼ 平安時代

第2図 周辺の遺跡分布(旧石器時代・縄文時代(草創期～前期)・平安時代の遺跡) 単位: 国土地理院 1:50,000地形
妙高山 (平成5年)
羽茂山 (平成2年)

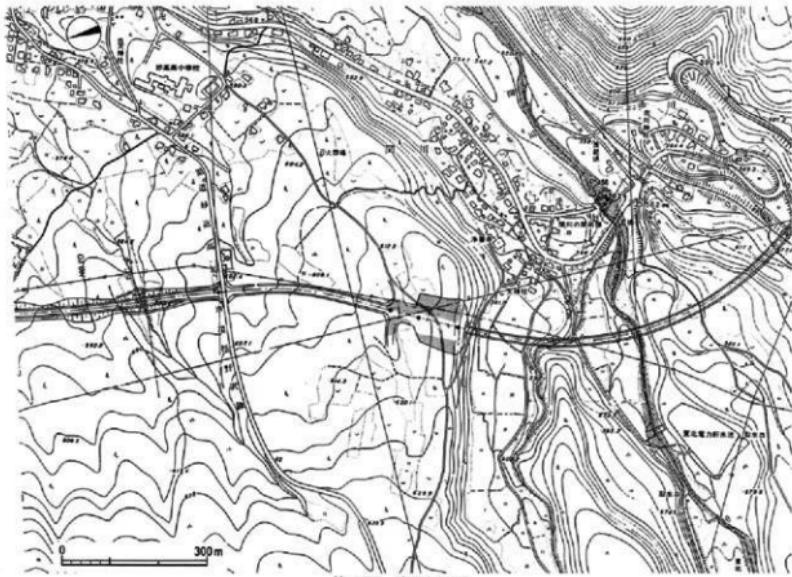
第II章 調査の概要

1. 発掘調査

A. 一次調査（第4図）

一次調査は平成3年11月11日から22日まで実施した。対象面積は24,500m²である。調査は法線内にトレーニングを任意に設定し、バックフォーと人力によって、堆積土を徐々にうすく掘削・精査して、遺構・遺物の有無、土層堆積状況を確認するという方法をとった。トレーニングの数は5本で、実質調査面積は692m²である。

調査の結果、VI層上面に炭化物集中範囲が検出され、縄文時代草創期の遺跡の存在が予測された。遺物は縄文土器と平安時代に属すると思われる土師器が出土した。また、遺物包含層は少なくとも3層あることが確認された。最終的に約21,350m²の範囲にわたって二次調査を実施する必要が生じた。



B. 二次調査

(1) 調査地の範囲と現況（第3図）

大堀遺跡は妙高山麓南東端の標高約620mの緩斜面上に位置する。調査区南側を開川とその支流清淵川が東流しており、調査区と河川との間は比高30mの急崖になっている。

調査対象範囲は道路法線内の南北長約170m、東西幅約120mである。なお、中央部分は工事が先行して遺跡が破壊されたため、調査不可能であった。調査以前は杉林を含む雜木林、または畠地であった。

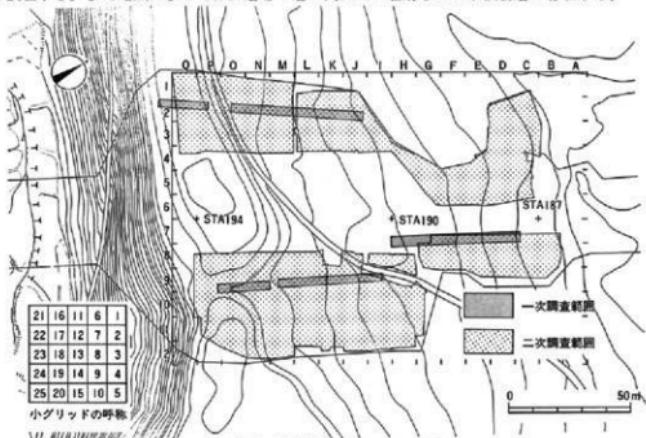
(2) グリッドの設定（第4図）

グリッドは道路法線のセンター杭に基づき設定した。STA No.190（北緯36°51'17"、東経138°11'49"）を起点に、STA No.187（X = 94932.9313, Y = -26981.4328）とSTA No.194（X = 94809.7050, Y = -27047.8801）を結ぶラインをX軸、これに直交するラインをY軸とし、これを基に方眼を組んだ。X軸は真北に対して28°10'42" 東偏する。

10m方眼を大グリッドとし、この中を 2×2 mの小グリッドに区切った。大グリッドの呼称は、調査区北から南にかけて英大文字のA～Q、西から東にかけて算用数字の1～25で区分し、両者の組み合わせにより「1 A」のように表示した。小グリッドは北西隅を「1」、南東隅を「25」とし、1～25の算用数字を用いて「1 A25」などと大グリッド表示の後に付けて呼称した。

(3) 調査方法（第5図）

一次調査の結果を基に、層序を確認しながら調査を進めた。層序の確認には調査区20m毎に設けたセクションベルトや調査区の周囲を巡る壁面を利用した。第III章2で詳述するが、基本層序はI～VII層に分けられ、遺物包含層はII層、IV層、V層、VI層の4層である。II層、IV層の間には赤倉火砕流堆積物を含むIII層が挟在する。また地点によってはIV層とV層の間に田口岩層なだれ堆積物層が存在する。



第4図 調査範囲とグリッドの調査

1. 発掘調査

調査はⅠ層除去後、Ⅱ層の掘削、Ⅲ層での遺構確認・掘削、Ⅳ・V層の掘削、VI層での遺構確認の順で進めた。なお、Ⅰ層と田口岩屑なだれ堆積物の除去は調査員立ち会いのもと、バックフォーによって行った。

包含層の掘削は基本的に、層位・小グリッドごとに人力で行い、排土はベルト・コンベアで調査区域外へ搬出した。出土した遺物は小グリッドごとに取りあげたが、遺物が集中して出土した地点では、下部に遺構が存在する可能性が高いため、遺物の出土地点及び標高を測定した後、各集中地点ごとに1点ずつ番号を付して取りあげた。

遺構はセクションベルトを残して掘るか、半截し、写真撮影、土層断面図・平面図作成等を行い、完掘した。遺構内からの遺物出土状況は、一括性の高いもの、原位置をとどめていると思われるもの、残存度の高いものなどを図面・写真等に適宜記録した。

縄文時代までの調査終了後、旧石器時代の遺物・遺構の検出も予想されたため、f区・c区においては黄褐色テフラ層（VI層）を掘り下げ旧石器時代の確認調査を実施したが、旧石器時代の遺構は検出されなかった。

（4）調査経過（第5図）

調査経過は、調査区を便宜上a～g区に分けて説明する。

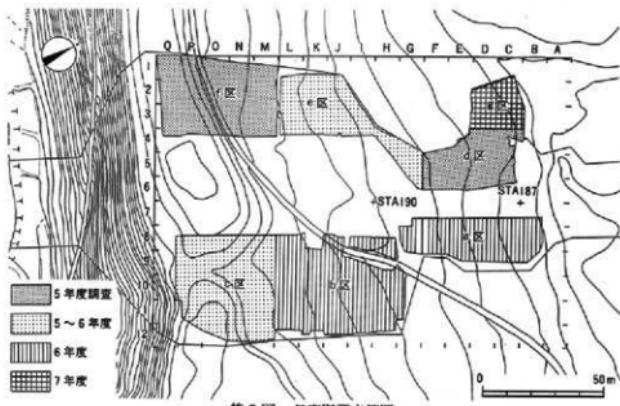
a. 平成5年度

平成5年5月10日～11月12日まで調査を行った。

バックフォー2台によるⅠ層（表土）除去を5月10日から開始した。その後、基本層序を把握し、グリッド杭の打設を行った。

5月31日から作業員を導入し、d区・e区の包含層（II層）発掘を開始した。6月中旬頃からはⅢ層上面での遺構確認、遺構発掘及び実測に取りかかった。その後、STA190以南のf区・c区を優先させてほしいという建設省の要望を受け入れ、Ⅲ層上面での遺構確認終了後、f区・c区の調査に移行した。

6月28日からf区のII層、III層のうち削平されていない部分の包含層（II層）発掘を開始した。その後、



III層上面での遺構確認、III層の掘り下げへと進めた。7月下旬からはIV層の包含層発掘を開始し、条痕文、絡条体圧痕文の施された土器片が出土した。IV層の調査終了後、田口岩層なだれ堆積物をバックフォーで擗削したが、1t近い大岩もあり、難航を極めた。8月下旬にはV層の発掘を開始し、4N付近から表裏繩文土器片が出土した。さらに、1~4Qでは陥穴状土坑列8基が検出された。その後、旧石器時代を対象とする確認調査を実施した。

f区の旧石器時代の調査と並行して、9月下旬からc区の調査も進めた。III層上面までの調査終了後、IV層を掘り下げ、5年度の調査を終了した。縄文時代草創期・旧石器時代の調査は次年度送りとなった。

b. 平成6年度

平成6年度の調査は4月25日から11月30日まで行った。年度当初の建設省との協議で、調査順序をc区・e区・b区(a区にかけて可能な所まで)とすることを決定した。

4月25日から昨年度調査区付近のc区の調査を開始した。残存する田口岩層なだれ堆積物はバックフォーで除去し、V層の縄文時代早期の調査に着手した。焼土様の赤褐色土・暗褐色土が入った浅い落ち込みが幾つか検出されたが、人為的なものとする確証は得られなかった。5月下旬までに遺構の発掘及び実測、出土した遺物の取り上げ・写真撮影を行い、この地区的調査を終了した。

6月1日から、前年度II層まで調査が終了していたe区の調査を開始した。IV層は20~30cmあり、南側と西側には田口岩層なだれ堆積物が広がっていた。IV層を掘り下げ、c区同様、田口岩層なだれ堆積物が存在する地点はバックフォーで除去した。その後、2m間隔にトレーナーを設定し、遺構・遺物が検出された場合はトレーナーを拡張し、全面発掘へ移行する方法で、IV層・V層の調査に着手した。その結果、押型文土器などの出土と、陥穴状土坑の検出をみた。また、V層から早期の表裏繩文土器、VI層から草創期?の無文土器も出土したため、S T A No190~192の間は全面発掘とした。無文土器がV層下のVI層から出土したため、VI層も発掘対象となり、VI層と疊を含むVII層との区別に注意しながら調査を進めた。

7月15日からb区の調査を開始した。包含層(II層)発掘後、III層上面で遺構確認を行い、IV層の発掘へと進めた。11L・12L付近では条痕文、絡条体圧痕文の施された土器片が集中して出土した。また、9J付近でも土器集中出土地点が見られた。また、9J・11J・12Iでは陥穴状土坑が検出されている。9月中旬からは旧石器時代の調査と並行し、a区の調査にも着手した。a区は遺構・遺物が希薄なため、2mおきのトレーナー発掘を行った。

10月27日からは平成7年度の調査予定範囲であるd区に着手した。d区も2m間隔にトレーナーを設定し、遺構・遺物が検出された場合はトレーナーを拡張し、全面発掘に移行する方法を採用した。その結果、土器集中地点が検出されたため、トレーナーを拡張し全面発掘を実施した。5Eでは押型文土器や縄文土器が多数出土した。

11月25日から補足的な測量を行い、11月30日、6年度の調査を終了した。

c. 平成7年度

本線部分の調査は6年度に終了していたが、建設省から7年度にd区の西側にある町道取りつけ部分(g区)を調査してほしいとの連絡があり、調査することになった。

5月18日からバックフォーによる表土除去を開始し、包含層(II層)発掘へと進めた。II層では平安時代の土師器・須恵器が出土した。III層の赤倉火砂流堆積物をバックフォーで除去し、IV層以下の調査に進んだ。出土遺物は縄文時代早期の押型文土器や前期の羽状縄文土器、大形の石斧などがある。遺構は性格不明の落ち込みがほとんどであった。

C. 調査体制

(1) 一次調査

調査主体	新潟県教育委員会（教育長 堀川徹夫）
管 理	大嶋 生己（新潟県教育庁 文化行政課長）
	吉倉 長幸（同 課長補佐）
庶 務	藤田 守彦（同 主事）
指 導	横山 勝栄（同 埋蔵文化財第一係長）
	本間 信昭（同 埋蔵文化財第二係長）
担 当	藤巻 正信（同 埋蔵文化財第二係主任）
調査職員	三浦 泰介（同 文化財専門員） 伊藤 秀和（同 文化財調査員）

(2) 二次調査

a. 平成5年度

調査期間	平成5年5月10日～11月12日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）
調 査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 本間栄三郎）
管 理	藍原 直木（専務理事・事務局長）
	渡辺 耕吉（総務課長） 茂田井信彦（調査課長）
庶 務	藤田 守彦（総務課主事）
調査指導	寺崎 裕助（調査課第二係長）
調査担当	望月 正樹（同 主任）
調査職員	三浦 泰介（同 専門員） 佐藤 執二（同嘱託員）

b. 平成6年度

調査主体、調査、管理、調査指導は平成5年度と同様である。

調査期間	平成6年4月25日～11月30日
庶 務	泉田 誠（総務課主事）
調査担当	和田 寿久（調査課第二係主任調査員）
調査職員	阿部 雄生（同 文化財調査員） 佐藤 執二（同嘱託員）

c. 平成7年度

調査期間	平成7年度5月18日～7月31日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 平野清明）
調 査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 平野清明）
管 理	藍原 直木（専務理事・事務局長）
	山上 利雄（総務課長） 亀井 功（調査課長）
庶 務	泉田 誠（総務課主事）
調査指導	寺崎 裕助（調査課第二係長）
調査担当	和田 寿久（同 主任調査員）
調査職員	大滝 正人（同 文化財調査員） 佐藤 執二（同嘱託員）

2. 整理作業

A. 整理方法

(1) 遺 物

遺物量は浅箱（54cm×34cm×10cm）にして約25箱である。

遺物の洗浄・註記は一部を現場で行ったが、大半は発掘終了後、埋文事業団本部で行った。その後、遺構ごと、グリッド及び層位ごとに分類し、土器は接合、石器は器種分類（大別）・器種内分類（細分類）を行った。次に、報告書掲載遺物を抽出し、実測図の作成を行った。土器の破片については直径が推定できるものについては、なるべく復元実測を試みた。また、拓本も作成した。土器は整理を進めながら時期別・文様別の集中地点の分離を試みた。石器の実測は従来の方法と簡易実測器を用いた方法を併用して行った。石器実測と並行して、発掘調査時には分離することができなかった旧石器時代と縄文時代の石器の分離を試みた。

(2) 遺 構

平面図・断面図の点検を行い、個々の遺構の形状・規模、遺物との関連等の確認を行った。次に遺構相互の関連について検討して報告書掲載遺構の取扱選択を行い、その後トレースを行い遺構図版を作成した。

B. 整理経過

平成5年度の発掘調査が終了した平成5年12月から、出土遺物の洗浄・註記、分類、実測、図面・写真・遺構カードの整理を行った。

平成6年度も発掘調査終了後の12月から平成7年の7月上旬まで、平成6年度調査分の図面・写真・遺構カードの整理と、出土遺物の洗浄・註記・分類・実測等を行った。その後、平成7年12月から本報告書に関わる本格的な整理を行った。

C. 整理体制

各年度毎の整理体制は各年度の調査体制と同様であるが、平成7年度は文化財調査員の立木（土橋）由理子が調査職員として加わった。

第III章 遺跡

1. 概要

大堀遺跡では旧石器時代、縄文時代草創期？～前期、平安時代、中世、近世の遺物が出土し、縄文時代早期、近世の遺構が検出された。遺跡の中心となる時期は縄文時代早期である。

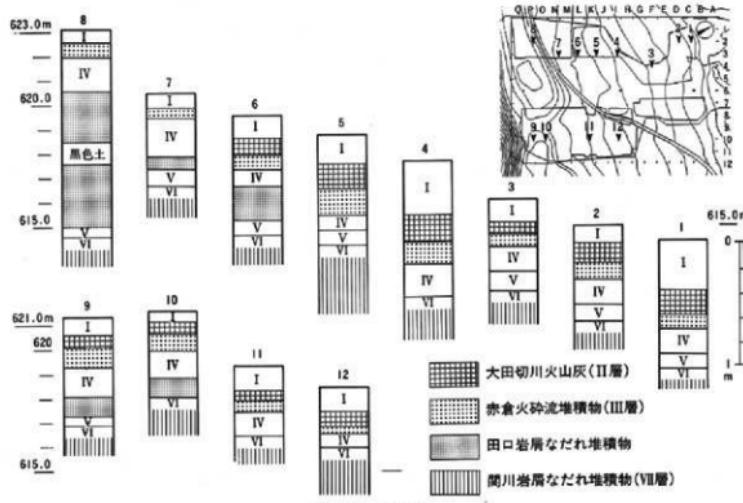
遺物量は浅箱（ $54 \times 34 \times 10\text{cm}$ ）換算で縄文土器15箱、縄文時代の石器5箱、平安時代の土器3箱、近世以降の陶磁器2箱である。旧石器時代・中世の遺物はごく少数出土したにすぎない。遺構は縄文時代では陥穴状土坑3列13基、焼土遺構2基のはか土坑があり、近世では溝状遺構と土壙墓1基がある。

2. 層序（第6図・図版25）

大堀遺跡の調査区は北向きの緩斜面上にあり、調査区内の南北の標高差は約12mある。

基本層序は次に示すとおりである。ただし6年度の調査途中で、VI層の上部10～20cmの「漸移層」としていた部分から無文土器など（草創期？）の遺物が出土し、それより下位では礫が含まれ、遺物も出土しないことが明らかとなった。そのため、それまで漸移層も含めてVI層としていた層のうち、遺物の出土する上部に限りVI層と呼び、以下の礫を含む部分をVII層として分離することにした。

なお、遺跡南東側の切り通し工事部分では、VI層下面から約2.6m下位に層厚約7cmの姶良一丹沢火山灰



第6図 基本層序

(A T) 層の純層、約7m下位に層厚約10cmの大山一倉吉軽石(D K P)層が肉眼で確認されている²⁰⁾。

I層：暗褐色土で締まり・粘性ともややある。現代の耕作土で草木根を多く含む。

II層：黒色腐植土層で締まりがあり粘性は弱い。地点により大田切川火山灰がブロック状に混在する。

III層：赤倉火砕流堆積物。黄褐色・砂質で締まりが強い。

IV層：緻密な黑色土で締まり・粘性ともにある。

V層：暗褐色土で締まり・粘性ともにある。地点によっては橙褐色土が縞状に入る。

VI層：明黄褐色ロームで粘性が強い。

VII層：関川岩層なだれ堆積物(約19,000年前)。明黄褐色土で大小の礫を含む。

上記のほか、およそI層より南にはIV層とV層の間に田口岩層なだれ堆積物が堆積している。田口岩層なだれ堆積物は締まりの強い明黄褐色土で大小の礫が多量に含まれる。場所により黑色土層を挟在するが、その層で遺物・遺構は検出されていない。

遺物包含層はII層、IV層、V層、VI層である。基本的にII層は縄文時代中期以降、IV層は縄文時代早期・前期、V層は縄文時代早期、VI層は縄文時代草創期?の遺物を含む。ただし、平成7年度に調査した3D付近では、III層や田口岩層なだれ堆積物が分布していなかったため、II～V層の区別が困難であった。このため、3D付近で出土した遺物は時期にかかわらずII層として記録・註記した。

3. 縄文時代の遺構

A. 概 要(図版1)

大堀遺跡で検出された縄文時代の遺構は陥穴状土坑14基、土坑1基、性格不明の遺構17基である。遺構確認面は次の4面である。赤倉火砕流堆積物を含むIII層、縄文時代早期・前期の遺物包含層であるIV層、IV層とV層の間に部分的に堆積する田口岩層なだれ堆積物、明黄褐色ロームのVI層である。IV層で検出されたSK11、SX8・9以外はすべてVI層での検出である。なお、明瞭な掘り込み等が認められなかったため、遺構とは認定しなかった3O、2・3Pの条痕文土器の4集中地点は田口岩層なだれ堆積物直上での検出である。

整理・記載にあたっては発掘調査時の遺構番号を用いた。

B. VI層で検出された遺構(図版2～6・26～30)

VI層で検出された遺構は陥穴状土坑14基、焼土遺構2基、土坑14基である。

(1) 陥穴状土坑(図版2～4・26～28)

検出された遺構のうち、開口部付近が広く以下がほぼ垂直に掘り込まれる土坑(北村1990)を陥穴状土坑とした。これに類する遺構は13基検出され、これらは列をなして検出されたSK22～24、SK25～29、SK32～34と、単独で検出されたSK30、SK31に分けられる。単独で検出されたSK35も陥穴状土坑の可能性があるが、上部を発掘調査に先立つ道路工事により削平されているため本来の形態等が不明であり、

註) 早津賢二氏のご教示を得た。

断定できない。

形態 陥穴状土坑構が掘り込まれているVII層は巨礫を多く含んでいる。構築時には礫を可能な限り取り除いていたと推定されるが、壁面や底面に巨礫を残したままのものも多く、形態は礫のあり方に左右されているようである。しかし、基本的な形態は検出面および底面の平面形が椿円～円形、断面形が上部播鉢形で下部円筒形の漏斗形であり、ほぼ一定している。底面にピットはない。底面に窪んだ部分が認められるものもあるが、石抜き穴とみられる。

規模の平均値は検出面での長軸長170.4cm・短軸長156.2cm・底面の長軸長63.3cm・短軸長47.4cm、検出面からの深度153.0cmである。

覆土 覆土の堆積状況は下部が水平堆積、上部がレンズ状堆積をしている。基本的には水平堆積部分に縫まりのない黄褐色系埋土が堆積し、上部に黄褐色土粒が少量混じる黒色系埋土が堆積している。なお、SK28～30・32では底部付近に黒色系埋土の堆積が見られる。

黄褐色系埋土には、VII層の礫が混入している。礫の大きさはビンボン玉大～ソフトボール大まである。黄褐色系埋土は壁面の崩落土と推定される。

出土遺物 SK26の1層から黒曜石製の使用痕のある剝片1点（図版21-58）が出土したのみである。

配列 調査区は妙高山麓赤倉山・三ツ山の南東側山裾の緩斜面上に位置する。南側に関川・清瀬川が東流しており、調査区付近では比高約30mの急崖になっている。この崖地形は陥穴状土坑構築時から大きく変化していないと推定される¹⁰⁾。調査区内の微地形は崖のある南側から北側に向かって緩やかに傾斜している。検出された3列の陥穴状土坑は等高線に沿っておよそ東西方向に伸びている。各列内での陥穴状土坑の間隔は5～8mである。

SK22～24、SK25～29の2列は、崖縁ぎりぎりの所にN-84°W、N-78°Wの方向で近接して並んでおり、列の方向は崖線にはば平行する。標高はおよそ621.0～621.5mである。立地と配列から、対象獸を崖際まで追い込み、陥穴に落とすという狩獵方法がとられていた可能性を考えられよう。

SK32～34は現在の崖縁から80mほど北側へいった所にN-74°Wの方向で並んでいる。単独で検出されたSK30はこの延長線上にある。いずれも標高は618.0mである。中間に調査対象範囲外の部分があるが、形態や走行方向、標高からみてSK30、SK32～34は一連のものの可能性が高い。

(2) 焼土遺構（図版5・29）

90において2基の焼土遺構が検出された。付近には暗褐色土を埋土とするSX37・38・43があるが、相互の関係は不明である。

2基とも覆土は2層に分けられ、1層が焼土層で多くの炭化物が含まれる。ともに明確な火床は検出されなかった。

焼土1 9025に位置する。平面形は椿円形で長軸方向はN-26°Eである。断面形は楕円形である。

焼土2 9015に位置する。東側は明瞭な輪郭を検出することはできなかったが、平面形は椿円形であったと推定される。断面形は直角である。

(3) その他の遺構（図版5・6・29・30）

注) 近藤洋一氏のご教示を得た。

陥穴式造構・焼土造構以外に検出された15基の遺構はいずれも不定形な皿状の落ち込みである。分布には規則性がなく、相互の関係は不明である。

S X 55 3 L23に位置する。平面形は不定形な隅丸長方形で、長軸はN-44°-Eである。遺物は表裏縦文土器（I群A類）1個体分（図版9-16）がある。この土器の尖底部は、立てて据えられていたような状態で底面から出土した。S X 55の東側では小ピットが9基検出されたが、性格やS X 55との関係は不明である。

S X 1 3 D24に位置する。平面形は菱形に近い梢円形で、長軸はN-13°-Wである。出土遺物はネガティブ梢円文の押型文土器片（II群B類）（図版9-7）がある。

S X 2 3 D 7・8に位置する。平面形は西に開く「凸」字形で、長軸はN-12°-Wである。出土遺物は山形文の押型文土器片（II群A類）（図版9-8）がある。

S X 3 3 D17に位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸はN-25°-Wである。出土遺物は黒曜石製の凹基無蓋土窓1点（図版18-14）がある。

S X 4 3 C22, 3 D 2に位置する。平面形は五角形で、長軸はN-77°-Eである。出土遺物はない。

S X 5 3 C 7・8・12・13に位置する。平面形は南東側に弧がくる半月形で、弦の部分は波打って直線的ではない。長軸はN-73°-Eである。出土遺物はない。

S X 6 4 C 6・7・11・12・16・17に位置する。平面形は隅丸三角形で、長軸はN-22°-Wである。検出された中では大形の土坑であり、長軸は185cmである。出土遺物はネガティブ梢円文（II群B類2）（図版9-9）、山形文の押型文土器片（II群A類）（図版9-10）がある。

S X 7 3 D17-18に位置する。平面形は菱形に近い梢円形で、長軸はN-28°-Wである。出土遺物はない。

S X 54 1 K10・2 K 6に位置する。不整梢円形で長軸はN-22°-Wである。検出された最大の土坑であり、長軸は230cmである。覆土は単層で大小の礫が多数混入していた。出土遺物はない。

S X 56 2 L 1・2・6に位置する。不整梢円形で長軸はN-28°-Wである。南西方向に幅約50cm、長さ約90cmの張り出しがあるが、S X 56より前に掘られた別の土坑の可能性がある。出土遺物はない。

S X 57 11 J 1に位置する。南東隅がS K32を切っている。平面形は不整梢円形で、長軸はN-63°-Wである。出土遺物はない。

P i t 5 1 M 9に位置する。平面形は梢円形で、長軸はN-90°-Wである。出土遺物はない。

C. IV層で検出された遺構（図版6・7・30）

S K11 2 M21・22に位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸はN-84°-Wである。覆土には大小の礫が多く含まれる。出土遺物は前期後半の半截竹管文土器片（VI群）（図版9-1・2）と凝灰岩製の両轆石器1点（図版18-24）がある。

S X 8 4 D12・13・17・18に位置する。平面形は隅丸三角形で、長軸はN-84°-Eである。出土遺物はネガティブ梢円文（II群B類2）（図版9-11-15）、山形文の押型文土器片（II群A類）（図版9-12・13）がある。

S X 9 4 D21・22に位置する。平面形は梢円形で、長軸はN-69°-Eである。出土遺物は山形文の押型文土器片がある。

4. 旧石器時代と縄文時代の遺物

A. 土器 (図版 9~17・32~40)

(1) 概要

本遺跡からは、浅箱で15箱あまりの土器が出土している。これらの土器は、表裏縄文土器、押型文土器、条痕文土器、格条体圧痕文土器などで、縄文時代草創期?~前期に比定される。これらの土器の中から資料化に耐え得るもの273点を抽出して報告する。

出土層位が明確なものは166点を数え、その内II層出土のものは49点(30%)・III層出土のものは5点(3%)、IV層出土のものは82点(48%)、V層出土のものは29点(18%)、VI層出土のもの1点(1%)である。胎土中に植物繊維と推定されるもの(以下「繊維」とする。)を含む土器は170点(62%)を数え、そのうち多量に含むもの3点・少量含むもの15点である。その他の混入物を含む土器は約90%を占め、主なものとして石英・角閃石・長石・雲母・白色の砂礫が目立ち、これらのいずれかが含まれている土器は約85%に上った。二次焼成の痕跡は118点の資料においてみとめられ、内外面にその痕跡を残すものの43点(36%)・内面のみに痕跡を残すものの23点(20%)・外面のみに痕跡を残すものの52点(44%)である。

分類は、胴部破片資料が多く、器形全体が把握できるものも少ないため、以下のように文様を中心におこなった。そのほか、胎土への繊維の混入や二次焼成などについては、必要に応じて説明を加えた。なお、器種はすべて深鉢である。

土器分類

I群土器 表裏縄文

A類 繊維を含まないもの。

B類 繊維を含むもの。

II群土器 押型文

A類 山形文が施されているもの。

B類1 楕円文が施されているもの。

B類2 楕円文(ネガ)が施されているもの。

C類 格子目文が施されているもの。

D類 山形文と楕円文が併用されているもの。

E類 その他

III群土器 格条体圧痕文

A類 口縁部に格条体圧痕文が押圧され、内外面に条痕文が施されているもの。

B類 口縁部などに格条体圧痕文が押圧され、胴部に撻糸文が施されているもの。

IV群土器 条痕文

A類 内外面に条痕文が施されているもの。

B類 その他

V群土器 繩文

A類 撻糸文が施されているもの。

B類 外面に縄文、内面に条痕文が施されているもの。

C類 組織的な縄文が施されているもの。

D類 羽状縄文が施されているもの。

E類 縄文が施されているもの。

VI群土器 その他

A類 その他の土器

B類 無文土器

(2) 造構出土の土器 (図版 9・32)

16点の I、II、VI群土器が 5 基の造構から出土している。

S K11 (1~6) 半截竹管で文様が描かれている土器 (VI群) が 6 点出土している。いずれも同一個体で、焼成は良好である。4 の内面にススの付着がみとめられる。前期後半に比定される。

S X 1 (7) II群B類 2 が 1 点出土している。胎土に少量ではあるが纖維を含んでいる。内面にスス状炭化物の付着がみとめられる。

S X 2 (8) II群A類 が 1 点出土している。この土器は焼成が良好である。

S X 6 (9・10) II群B類 2 (9) と II群A類 (10) が 1 点ずつ出土している。9 は焼成が良好で、胎土に纖維を含んでいる。

S X 8 (11~15) II群B類 2 (11・15) と II群A類 (12・13) が各 2 点ずつと V群E類 (14) が 1 点の計 5 点が出土している。11は、外面にスス状炭化物の付着がみとめられる。12は、内面にスス状炭化物が付着している。13も、内外面にスス状炭化物の付着がみとめられる。14は胎土に大量の纖維を含み、外面にスス状炭化物が付着している。15は胎土に纖維を含んでいる。

S X 55 (16) I群A類が一個体まとめて出土した。この土器は口径 21.4cm、器高 21.1cm と推定される。口縁部が短く外反し、底部は丸みを帯びた尖底である。L R の縄文が内外面に施されているほか、口唇部にも縄文がみとめられる。胎土中には礫が多く含まれている。

(3) グリッド出土の土器 (図版 9~17・33~40)

a. 表裏縄文土器 (17~30)

胎土に纖維を含まない I群A類と胎土に纖維を含む I群B類がある。個体数が少なく、点在的に出土するが、図上復元が可能なものや大形破片といったようにまとまりのあるものが多い。

I群A類 (24~29) 26 は胴部の下半にあたる大形破片で、9 J 24 の IV 層から出土している。この土器は胎土に雲母を含み、内面にスス状の炭化物の付着がみとめられる。29は図上復元が可能で、4 N 16 の V 層からまとめて出土している。この土器は口径 20.6cm、器高 22.4cm と推定される。口縁は緩やかに外反し、底部は乳房状の尖底と考えられる。裏面の縄文は口縁部付近に顯著である。胎土には角閃石を含み、内外面にスス状の炭化物の付着がみとめられる。この他 24・25 は 9 G 20 の IV 層から 27・28 は 2 K 5 の V 層から出土している。24 と 25、27 と 28 は同一個体である。

I群B類 (17~23・30) 17~22 は 3 D 5 の II 層からまとめて出土しており、同一個体の可能性が高い。いずれも縄文は L R の原体で、20 の外面にはスス状の炭化物の付着がみとめられる。23 は 3 D 25 の II 層、30 は 3 Q の IV 層上面から出土している。

b. 押型文土器 (31~110)

山形文が施されているII群A類、楕円文が施されているII群B類1、楕円文のネガが施されているII群B類2、格子目文が施されているII群C類、山形文と楕円文が併用されているII群D類などがある。これらの中ではII群A類が最も多くて過半数以上を占め、次いでII群B類1、II群C類の順となる。分布は、2~4C~Dにほとんどが集中する。

II群A類 (32~75) 2D・3~4C~Dから全てが出土している。出土層位は、明確なものの中で約7割をIV・V層が占める。施文方法は帶状施文が目立ち、器面調整や器壁の厚さは、37は内面の整形が丁寧、46・48・54・75は他と比べて器壁が薄い個体である。38~43は同一個体である。胎土中に纖維を含むものは認められないが、ほとんどに石英・長石・角閃石などが混入している。7割近くに二次焼成の痕跡がみとめられ、55・67は外外面にスス状炭化物が、70は内面にスス状炭化物、外面にオコゲ状炭化物がそれぞれ付着している。

II群B類1 (76~93) 90~93を除く8割は、II群A類と同じく3~4C~Dから出土している。出土層位は、5割強がII層からの出土である。施文方法は全てが密接施文で、78・85~87はほかと比較して器壁が薄く、器面調整がていねいで、焼成が良好である。胎土中に纖維を含む土器が目立ち、6割強がそうであり、83・89は多量に含んでいる。纖維以外では石英や雲母の混入が目立つ。二次焼成の痕跡をとどめる土器は少なく、76・77・81・89の4点にすぎない。

II群B類2 (104~106) 3C~Dから出土しており、104・105はV層、106はII層から検出された。胎土中に纖維は含まないが、石英の混入はみとめられる。

II群C類 (31・94~103) 2~4C~Dから全てが出土している。出土層位が明確なものは少ないが、V層からの出土が目立つ。94・95・102は器壁が薄く、31・94・103は器面調整がていねいである。31・95はともに菱目文で同一個体の可能性が高い。98も菱目文である。胎土中に纖維を含むものはみとめられないが、雲母や石英を混入するものが多い。二次焼成の痕跡は6割にみとめられる。

II群D類 (107~109) いずれも4H8からの出土で、同一個体である。胎土中に纖維を含み、石英の混入もみとめられる。

II群E類 (110) 4C17から出土しており、楕円文のボジとネガの併用?と考えられる。器面調整や焼成は比較的良好である。胎土中には纖維を含み、石英の混入もみとめられる。

c. 絡条体压痕文土器 (116・117・147~157・163~166)

外表面に条痕文、口縁部に絡条体压痕文が施されているIII群A類と口縁部と頸部の境界に1条の隆帯がめぐり、その隆帯上や口縁部に絡条体压痕文が押圧され、それ以下に捺糸文が施されているIII群B類に2分される。いずれも胎土中に纖維を含んでいる。分布は4E・2~3O~P・11Lにまとまっており、特に2~3O~Pからは集中的に出土している。

III群A類 (117・147~151) 147を除いて全て2~3O~Pから出土している。出土層位が明確なものは少ないが、明確なものは全てIV層からの出土である。117は口径26.4cm、器高36.5cmあまりで、口縁形は外反するゆるやかな4単位の波状、底部は丸底と推定される。147は纖維のほかに胎土中に多量の石英を混入するが、ほかは纖維以外に目立った混入物は含まない。二次焼成の痕跡は147以外の全てにおいてみとめられる。

III群B類 (152~157・163~166) 11L12・17・18・22というように全て隣接するグリッドから出土しており、器形や文様も近似していることから同一個体と考えられる。出土層位はIV層が多く、地文の捺糸

原体はLである。胎土に纖維のほか小礫が全てに混入している。

d. 条痕文土器 (111~116・118~146・158~162)

原則として内外面に条痕文が施されるIV群A類とその他の土器をとりまとめたIV群B類がある。IV群A類とIII群A類は胴部破片などにおいては識別不可能であり、出土地点もほぼ同じである。それゆえ、IV群A類のなかにIII群A類が混在している可能性は十分に考えられる。

IV群A類 (111~116・118~146) 1~30~Qからまとまって発見されており、特に2P・30~Pからは集中的に出土している。出土層位が明確なものは、いずれもIV層からの出土である。原則として内外面に条痕文が施されているが、111・112・142・146は内面に条痕文が施されていない。133は内面に条痕文がみとめられないが、類似する他の条痕文土器はすべて内面に条痕文が施されていることから、たまたま施文が及ばなかった部位の可能性がある。138はゆるやかな波状口縁を持ち、口縁部も条痕文のみが施されている。116・117・119・120は同一個体である。纖維は全てに含まれており、それ以外にも石英の混入が目立つ。二次焼成の痕跡は、5割強の土器にみとめられ、114・117・119・123・125・127・131・143・145の内外面にはスヌ状もしくはオコゲ状の炭化物の付着がみとめられる。

IV群B類 (158~162・255) 158~161・255は同一個体と考えられ、II層またはV層から出土している。口縁部はゆるやかに外傾し、胴部上半あるいは口縁部と頭部の境界に1条の微隆帯がめぐるものと推測される。口縁部外面には竹管による押引き文や円形竹管による円形刺突文が施文され、頭部もしくは胴部上半には竹管による押引き文が施されている。口縁部内面には横方向の条痕文が施されている。胎土中には纖維のほか大形の雲母や石英を含んでおり、ほかの土器の胎土とはきわだった対称を示している。このような文様や胎土の特長から、この土器は他地域からの輸入品あるいは多地域の影響を強く受けて成立した異系統土器と考えられる。162は細い条痕文と撻文が併用して施文されている。胎土中には纖維のほか、多量の石英をも含む。

e. 繩文土器 (167~254)

広義の縩文が施されているものを一括した。撻糸文が施されているV群A類、外面に縩文、内面に条痕文が施されているV群B類、組紐的な縩文が施されているV群C類、羽状縩文が施されているV群D類、縩文が施されているV群E類がある。これらは2~5C~Eから集中的に出土している。

V群A類 (167~178) 11L17・18・22を中心にしてIV層から出土している。173~175は同一個体である。178はV層より出土しており、他のものと比較して薄く、施文も撻糸文?である。胎土中への纖維の混入は、178以外全てにおいてみとめられ、纖維以外では石英やチャートの混入が目立つ。

V群B類 (179~185) 3C2・3・5・8のII層から集中的に出土している。全ての胎土中に纖維と石英・長石を含む。

V群C類 (187~194) 4E20・25と5F19のIV層から出土している。188~191、192~194は同一個体である。全ての胎土に纖維を含むほか石英やチャートの混入が目立つ。二次焼成の痕跡もほんどの土器にみとめられ188~190・194の内外面にはスヌ状の炭化物が付着している。191は復元可能な土器である。器形は、口縁は4単位の波状で、口縁部はゆるやかに外反する。頭部から胴部上半にかけてはややくびれて胴部下半が膨らみ、底部は丸底気味となる。法量は口径28cm、底径6cm、器高25.6cmである。文様は器面のほぼ全面に組紐的な縩文が施されているが、底部と底部上方6cmのところまでは縩文原体の端部?が押圧されている。

V群D類 (186・197~199・202・219~254) 3Dからの出土がやや目立ち、II・IV・V層からの出土

が確認されている。未結束のものが多い。186は裏面に条痕文を施し、胎土に纖維を含む。197~199は同一個体である。219~221は器壁が薄い作りであり、228はループ的な羽状縄文である。233は縦位の羽状で、口唇部に連続する右下がりの刻み目が施されている。254は波状口縁で、口唇部に連続する刻み目が施され、口縁部は無文帶である。口縁部と胴部の境界には右下がりの刻み目が施された1条の微隆帯があげられ、胴部は羽状縄文となる。纖維の混入はほとんどの土器においてみとめられるが、241~242は?、248は含まれない。二次焼成の痕跡は7割弱の土器においてみとめられ、そのうちの199・202・220・221・238・239は内外外面にスス状の炭化物が付着している。

V群E類 (195・196・200・201・203~218・222~227・229~232・234~236・240~244・245~247・249~251)
I~IV層での出土が確認されている。縄文原体がL Rのものは195・200・203・204・206・207・218・222・236・247、縄文原体がR Lのものは210~212・246・252である。210~212、225と226、252と253は同一個体である。213・214は器壁薄く、焼成が良好であり、共に4E10から出土していることから、同一個体の可能性が高い。218は器壁薄く、243は縄文原体がRの小形土器で、器壁が薄い。232はループ縄文である。249は器壁薄く内面に器面調整によって生じたと考えられる指頭圧痕がみとめられる。纖維の混入は8割強の土器にみとめられるが、234・235・240・243・246・250・251には含まれていない。二次焼成の痕跡は6割弱の土器にみとめられ、その内196・201・203~205・209・213・214・216・218・224・244・249は内外外面にスス状の炭化物が付着している。232のみ内外面にオコゲ状の炭化物が付着している。

f. その他の土器 (256~273)

微量の出土であるが特徴的な土器と無文土器を一括した。なお、微量の出土であるが特徴的な土器をVI群A類、無文土器をVI群B類とする。

VI群A類 (256~267) 256はII層から出土し、縄文地上に刺突が1列施され、胎土に纖維と多量の石英を含んでいる。257は口縁に長短2列の爪形様の刻みが施され、以下は縄文で、胎土に纖維を含むというようすに神ノ木的である。258はII層から出土し、ボタン状の突起が添付され、胎土に纖維を含んでいる。ボタン状突起を持つという点からすればこれも神ノ木的である。259はII層から出土し、背竹管による爪形文が密に施され、胎土に纖維を含んでいる。260はIV層から出土し、竹管による押引き?が施され、胎土に纖維を含んでいる。261はIV層から出土し、爪形状の刻み目が密に施され、胎土には少量であるが纖維を含んでいる。262は、III層から出土した波状口縁の小形深鉢で、無文地上に半截竹管の押引きで5条の浮線状の文様を描出している。263はII層から出土し、半截竹管で細沈線文を密に施している。264はIV層から出土し、並行沈線間に刺突が加えられ、以下は縄文である。胎土に纖維を含む。265・266はIV層から出土し、半截竹管で文様が描かれている。267は発掘区の南東角にある近世の溝(S D 3)から出土した。羽状縄文地上に結節浮線文が施され、胎土に砂が多量に混入し、焼成は良好である。

VI群B類 (268~273) 269はVI層より出土し、内外面に指頭圧痕による器面調整の痕跡がみとめられ、胎土に多量の白砂と角閃石が含まれる。内面にスス状の炭化物、外面にオコゲ状の炭化物が付着している。この土器は表裏縄文土器よりも下層から出土しており、指頭圧痕の器面調整が行われていることから、草創期の無文土器の可能性がある。270はII層より出土し、押型文土器の無文部の可能性がある。271・272はIV層から出土し、外面に指頭圧痕による器面調整の痕跡があり、器壁の厚さは5mm程度と薄い。胎土に少量の纖維と多量の石英と雲母を含む。この2点の土器は、長野県の木島式土器の流れをくむ土器ではないかと考えられる。

B. 石器（図版18~22・41~44）

(1) 概要

大堀遺跡で出土した旧石器時代と縄文時代草創期？～前期の石器は、浅箱に約5箱分、総点数113点である。旧石器時代の石器は10点で、ナイフ形石器、尖頭器などがある。縄文時代の石器は103点が出土した。縄文時代の石器の出土地点はおよそ3か所にまとまっており、それぞれの出土地点を石器集中地点1～3と呼称する。記載はこの集中地点ごとに進めていく。

なお、記載に当たっては、実測図左側を表面または背面、右側を裏面または腹面とし、石器の上下左右は表面を基準とし表現する。

石器は個体間接合資料がなかったので、完形品・破損品にかかわらず1個1点と数えた。ただし明らかに同一個体とわかる接合は、接合後の石器を1点と数えた。

(2) 旧石器時代の石器（図版18・41）

旧石器時代の石器は単品で出土した尖頭器、切出形ナイフ形石器、横長剥片を素材とするナイフ形石器と、集中地点を形成して出土した石核2点、剥片5点がある。旧石器時代については、尖頭器の時期と、ナイフ形石器の時期の2時期に大別できる。

尖頭器（1） 1は表面下半に素材の腹面と推定される凸面が残されていることと、左面脇部左側の盛り上がり部分が素材の打瘤と推定されることから、横長の剥片を素材としていたことがわかる。脇部が丸みを帯びて膨らむ左右対称形であることと、細部調整のあり方が縄文時代の尖頭器と比較して平坦でないことから旧石器時代の尖頭器とした。

ナイフ形石器（2・3） 2は切出形ナイフ形石器である。背面に自然面の残る黒曜石の横長剥片を素材とし、打面側を基部にしている。打瘤は平坦な剝離によって除去され、基部と背面左側縁に急斜度の刃済し加工が施されている。出土地点周辺には縄文時代の黒曜石の剥片類も出土しているが、縄文時代の石器には見られない刃済し加工の状態と全体の形状から、旧石器時代のナイフ形石器とした。

3は無斑晶質安山岩製の横長剥片を素材とするナイフ形石器である。素材の横長剥片は翼状剥片に似るが、翼状剥片に特徴的な打面調整を観察することができず、底面もないことから翼状剥片とは言い難い。素材の剝離軸と石目との角度は約30度である。先端部は右側縁から統く調整剝離によって正面角度約90度と鈍く断ち切られている。基部の欠損は二次調整との切り合い関係がないため、折断によるのか、事故によるものなのかは不明である。

剥片（4～8） 4～8の剥片は次に説明する石核とともに1・2K、1・2Lの辺りにまとまって出土した。この付近から横長剥片素材のナイフ形石器が出土している。周辺から縄文土器が出土しないこと、石材が全て無斑晶質安山岩と共通すること、剥片の中に翼状剥片に似る横長剥片があることから、これらの石器は横長剥片素材のナイフ形石器に伴うと考える。

4は翼状剥片に似る横長剥片で、下端に石核の底面と見られる剝離面がある。打面は背面側からの剝離で形成された单剝離打面である。5～8の剥片は背面に多方向からの剝離痕をもつ。

石核（9・10） 9・10は石核で、いずれも打面取位を繰り返し行った後、ひとつの打面から連続して小剥片を剝離している。

(3) 縄文時代の石器 (図版18~22・41~44)

縄文時代の石器の形態分類は以下のとおりである。

有舌尖頭器 「基部に茎を作り出した尖頭器」(鈴木1991)。

石鏃 「矢の先端につける石製の矢じり」(鈴木1991)であり、有茎と無茎に分けられる。

石錐 作り出された突出部の先端に摩耗痕が認められるものを石錐とした。

両極石器 両極に打痕・剥離痕のあるものを両極石器とした。2個1対の極をもつものと4個2対の極をもつものがある。

スクレイパー 「剥片の縁辺に対し、連続的な調整剝離を加えて刃部を作出したもの」(斎藤1987)。

石匙 「一端につまみ状の突起をもち縁辺を刃部とする石器」(田中1991)。

打製石斧 「礫または大型の剥片を素材とし、大ぶりな成形・調整によって斧形に仕上げられた石器」(藤巻1991)。

局部磨製石斧 打製石斧が部分的に研磨されたもの。

特殊磨石 「三角柱・四角柱・楕円柱状などの河原石(転石)を素材とし、その稜の部分に細長い橢円面を有するもの」(北村1990)とし、次のように細分した。

I類 稲上の磨面のみのもの

II類 稲上の磨面のほかに磨面があるもの

III類 稲上の磨面のほかに端部に敲打痕があるもの

IV類 稲上の磨面のほかに磨面、端部の敲打痕があるもの

磨石類 「素材となる礫(転石)の正裏面および側縁に磨痕・敲打痕・くぼみ痕を有するもの」(北村1990)とし、次のように細分した。

I類 磨痕のみのもの

II類 磨痕のほかに敲打痕があるもの

III類 磨痕のほかにくぼみ痕があるもの

IV類 磨痕のほかに敲打痕とくぼみ痕があるもの

V類 磨痕をもたず、敲打痕またはくぼみ痕のみもつもの、あるいは両者を合わせもつもの。

上記の分類に従い、以下集中地点ごとに記載を進める。

a. 石器集中地点 1 (11~53)

石器集中地点 1は調査区北西端の押型文土器・表裏縄文土器・条痕文土器などの土器集中地点にはば重なる。遺構出土のもの以外は出土状況等から土器との明確な共伴関係を捉えることは困難であった。この地点は3つの集中地点のうち、最も出土量が多く石器形態も多様な地点であり、有舌尖頭器、石鏃、石錐未製品、両極石器、箆状石器、石錐、スクレイパー、局部磨製石斧、剥片瓢、磨石類、特殊磨石、石核など、合計73点が出土した。剥片石器の石材は黒曜石、無斑晶質安山岩、珪質頁岩などが用いられている。

有舌尖頭器 (11) 11は縦長剥片を素材とし周縁部が鋸齒状に調整されている。

石鏃 (12~19) 12は有茎石鏃だが、基部を欠損している。13は凹基無茎石鏃である。12・13は形態からみて、前期以降の所産と推定される。14はSX3から出土した薄手の非常に精緻な作りの凹基無茎石鏃である。15の凹基無茎石鏃は裏面に素材の腹面が残っている。周縁の調整は粗い。16~18は黒曜石の石錐未製品である。19は無斑晶質安山岩製の石錐未製品と推定されるが、基部の方は加工が進んでいない。

石錐 (20・21) 20の石錐は折断剥片を素材としている。錐部が短くつまみをあまり調整していないこと

から、所属時期は草創期から早期と考える。21の石錐はつまみが棒状で未発達であることから早期の所産と考える。これも素材は折断剝片である。

局部磨製石斧 (27) 長さ約26cmの撥形の局部磨製石斧である。VI層に食い込んで単品で出土した。表面に自然面、裏面に破碎面あるいは節理による割面とみられる部分が残る。表裏面の素材面とも調整剝離面に比べて著しく風化が進んでいることから、石斧製作のために生産された剝片ではなく、板状の自然礫片を素材として利用したと推定される。調整剝離後、表裏面とも全体によく磨かれ、表面右下半部には細かな綾杉状の擦痕がついている。表裏面の研磨が凹んだところにはあまり及んでいないのに対して、周縁の剝離痕は稜線が不明瞭になるまで研磨され、一部の剝離面は光沢を帯びている。この場合、明瞭な擦痕は認められない。おそらく綾杉状の擦痕がつくような研磨には硬質の砥石が用いられ、剝離面の中まで届くような研磨には軟質の砥石あるいは研磨具が用いられたのであろう。なお、刃部には長軸に対して平行な使用痕はなく、成形の際の研磨痕とみられる刃部に平行な擦痕しか観察されない。非実用的な石斧と推定される。

両極石器 (22~24) 22は打撃にともない破損したものと推定される。23は2対の極をもつ。24はSK11出土の両極石器である。石器散布地点1の遺物ではないが、押型文土器とともに遺物としてここに含めた。

使用痕のある剝片 (25・26) 25は背面に自然面がある剝片を素材としている。打面部を欠損している。26は使用痕のある剝片で、端部がヒンジフランクチャーによって直角に曲がっている剝片が素材である。刃部作出はされていないが、剝片の背面側縁の急角度をなす剝離面を搔器様に用いたと推定される。

スクレイバー (28・29) 28は円錐を荒削してきた大形の剝片を素材としている。剝片末端に平坦な分割面が残っており、そこを機能面としている。分割面と背面との間の稜線には微細な剝離痕とともに摩耗が認められる。29は大形の両極石器の背面に平坦剝離が施されている。両側縁に使用痕とみられる微細な剝離が残されている。

薦状石器 (30) 30は横長の剝片を素材とする。両側縁の調整は主に背面側に、末端部の調整は腹側に行われている。

石核 (31) 31は頁岩の円錐の分割面を打面とし、小剝片を剝離していることから石核に分類した。ただし、遺跡内で同様の石質の剝片類が出土していないこと、作出される剝片の大きさや形状が石器として使用するには不充分と推定されることから、石核の可能性はあるが、断定し難い。

剝片 (32~40・図版44) 集中地点1からは24点の剝片が出土した。石材は黒曜石が最も多く14点、他に無斑品質安山岩、凝灰岩などが使われている。黒曜石製の剝片(図版44)の中には、石錐の素材となるようなものも含まれている。

特殊磨石 (41~48・51) 特殊磨石はI類2点、II類3点、III類1点、IV類3点の計9点が出土した。ただし、41の左側面はくぼむほど磨り減っており、砥石として使われていた可能性がある。

特種磨石は側面形が三角形を呈するものと長方形を呈するものの2者に大別される。稜上の機能面は長短があるが、幅は最小3mm~最大27mmまでで、大方が10~15mmにまとまる。また、稜上の機能面を底面とした場合の石器の高さは側面形に係わらず、6~7cm前後である。人の指の長さがちょうど6~7cm前後であるので、握って使うのに都合の良い機能面と保持部分の長さを考慮して選択されていたと推定される。

磨石類 (49・50・52・53) 磨石類はI類6点、II類1点の計7点が出土した。石材は全て安山岩である。

5. 平安時代以降の遺構

b. 石器集中地点 2 (54~65)

石器集中地点 2 は条痕文土器の集中地点とほぼ重なる。出土石器は滑石製の未製品、石錐、両極石器、特殊磨石、磨石類、石皿など、計13点が出土した。

未製品 (54) 表面は平滑に良く磨かれている。裏面は研磨途中であるのか、擦痕が認められ、凹凸が顕著に残っている。研磨方向は表面とも長軸に対し50~90度である。抉状耳飾りの未製品と推定される。

石錐 (55・56) 石錐は精緻な作りの凹基無茎石錐が2点出土した。形態から草創期~早期の所産と考える。

両極石器 (57) 57は二極一対の両極石器である。

使用痕のある剝片 (58) 58は散布地点 2 から少し離れたところにある陥穴状土坑 S K26から出土した。

右側縁に微細な刃こぼれがある。

剝片 (59) 59は、条痕文土器の集中地点内から出土した。

特殊磨石 (64) I 類が1点出土したのみである。

磨石類 (62・65) I 類、III 類が各1点出土した。

石皿 (63) 表裏面及び側面が研磨され、稜線がきっちり作り出されている。作業面は表面のみである。

c. 石器集中地点 3 (66~72)

石器集中地点 3 からは石錐 1 点、打製石斧 1 点、特殊磨石 1 点、磨石類 3 点、石錐 1 点の計 7 点が出土した。

石錐 (66) 凹基無茎石錐である。形態から早期の所産と考える。

打製石斧 (67) 刃部が欠損し、裏面は大きく剥落している。近世の溝 S D30からの出土である。

特殊磨石 (72) III 類が1点出土した。敲打痕は両端部に認められる。

磨石類 (69~71) I 類、II 類、V 類が各1点出土した。69の凹部の輪郭は器面が非常に荒れているため、明瞭ではない。

d. 集中地点外の石器 (73~78)

散布地点以外のところから出土した石器は石錐 4 点、石匙 1 点 (77)、両極石器 1 点 (78)、剝片 4 点がある。

石錐 (73~76) 平基有茎石錐 (73) の側縁は鋸歯状を呈す。ほかに凹基無茎石錐 3 点 (74~76) がある。

5. 平安時代以降の遺構

A. 概要

本遺跡の平安時代以降の遺構は近世の土壤墓 1 基、溝状遺構 1 条、性格不明遺構 1 基が検出されたのみである。2 C11グリッドでは平安時代の遺物がまとまって出土したが、住居跡の可能性は低い。

B. 遺構各説 (図版 8・31)

(1) 土 墓

S K15 検出面は I 層である。308・9・13・14に位置する。平面形は円形で上面には円周に沿って石が組まれている。石組みは北側が一部欠損するが、石の無い部分は黄褐色土が石組みの欠損を補うように埴

状に廻っている。本来石組みは完全な円形であったと推定される。南西の一部分で、石組みの直下から拳大の礫が円周に沿って積まれたような状態で検出された。掘り形は円筒形で、断面には木棺の跡と見られる土が壁面に貼り付くようにして、15cmほどの厚さで廻っている。底面は平らで、中央に長さ約18cmの木片が、N-57'-Wの方向で横たわっており、その上に石組みの礫に似た礫が乗っていた。その礫と南東の壁面との間から、2個の礫が並んで出土した。出土遺物は煙管の吸い口（図版24-37）がある。

(2) その他の遺構

S D30 検出面はIII層である。12M~11Pにかけて、N-56'-Eの方向に走行する溝状の遺構である。南東側がS X32を切っている。掘り形は平底で、北西壁は立ち上がりが直角に近く南東壁は緩やかに立ち上がる。幅は約5.5mである。ただし、北東端の掘り込みは明確に検出することができなかった。出土遺物は煙管の雁首（図版24-38）、土師器の杯（図版23-20）、打製石斧（図版21-67）がある。

S X32 S D30の南東壁に沿って検出された。S D30に切られている。掘り形は平底で、検出面からの深さは約70cmである。3.6~3.7mおきに幅約1mの北西一南東に走る畦状の高まりによって区切られている。畦状の高まりは調査区外へ伸びていることから、S D30が調査区外へ広がることは明らかである。全体の形状が不明であるため、性格については言及を避けたい。出土遺物はない。

6. 平安時代以降の遺物

A. 平安時代の遺物（図版23・45）

平安時代の遺物は大半が2C11・14・15・19グリッドのI・II層から出土した。2C11グリッドでは明確な掘り込みは認められなかつたが、焼土が集中しており住居が存在した可能性がある。遺物は浅箱に約3箱分出土したが、多くは細片である。器形の分かるものに、土師器の有台杯、無台杯、長胴甕、小型甕、須恵器の短頸甕、長頸甕がある。杯は全てが内面黒色処理されている。口縁部残存率計測法（宇野1988・1989）による土師器と須恵器の比率はおよそ9対1で、土師器の内6割程度が环である。遺物の所属時期は今池遺跡の編年（坂井1984）のVI-VII期、松本平の編年（小平1990）の7~11期に該当し、年代は9世紀後半~10世紀代と考えられる。

(1) 須恵器（1~3）

短頸甕 (1) 口縁部は外反し、口唇部は丸く收まる。肩部外面に「川」の字状の楷書きがある。

長頸甕 (2) 頸部と肩部の外面接合部分に明瞭な段が認められる。

壺底部 (3) 内面に不定方向の刷毛目調整が施され、外面の底部と体部の境はロクロ削りされている。

(2) 土師器（4~20）

長胴甕 (4~10) 長胴甕は口縁の形態で4分類できる。内湾気味に外反する4・5、直線的な6・7、「く」の字状の段をもつ8、内湾しつつ大きく開く9である。これらのようなくの字に外反し、端部を丸く收める口縁形態は「北信型土師器甕」（兼沢1995）にみられるものである。4はロクロ整形であるが、口唇部の調整が粗雑で不安定なナデ痕が残っている。10はほかの長胴甕に比べ器壁が著しく薄い。外面に

ごく浅い叩き目、内面に当て具痕が残されている。叩き目は非常に細かい格子目文である。当て具痕の同心円文は木の年輪とみられることから、当て具は直径約3.5cmの丸木であったと推定される。

小型櫛 (11~13) 口縁部が外反する10と内湾気味に立ち上がるIIがある。底部 (12) は回転糸切り無調整である。

櫛 (14~19) 杯はすべて内面が黒色処理されており、有台櫛 (14・15) と無台櫛 (16) がある。有台杯は大きく内湾しながら立ち上がり、口唇がやや強めに引き出される。高台は内端接地で丸みを帯びながらふんばる。無台杯はあまり内・外湾せずに立ち上がり、口唇がわずかに外側へ引き出され丸く收められる。16・20は被熱のため黒色は飛んでいるが、無処理の杯には見られない磨くような丁寧な仕上げがされることから、黒色処理されていたと判断した。

B. 中世の遺物 (図版24・45)

中世の遺物は珠洲焼の擂鉢の破片などが数点出土したにすぎない。

擂鉢 (21) 口唇端面は平坦で外傾し、鉢目は1cmに6条が1単位である。口縁部外面に指押えの跡が残る。吉岡編年 (吉岡1982) のIII~IV期に該当する資料であろう。

C. 近世以降の遺物 (図版24・45)

近世以降の遺物は陶磁器が平盤に約2箱分と煙管、銅錢、土製品が出土した。

(1) 陶 磁 器 (図版24・45)

陶磁器は肥前系のものが主体であり、時期は大橋編年 (大橋1984) のIV~V期に属するものが多い。

擂鉢 (22・23) 肥前系の擂鉢で、口縁部は外反する。23の鉢目は条の間隔が3mmと粗い。

土鍋 (24) 素焼きで、外面に縱方向の平行沈線がつけられている。

急須 (25) 外面梨肌の急須である。

香炉 (26) 肥前系青磁の筒形香炉である。内面は口縁部のみ施釉されている。

碗 (27~30) 27~29は肥前系磁器の碗である。27・28は染め付けで、28は割筆で二重の網目が描かれている。29は京焼風陶器である。30は広東碗で断面に漆緞の痕がある。

皿 (31~34) 31は底部回転糸切りで内面と体部外面に鉄釉が掛る。32は肥前系陶器の皿で、大橋編年のI~II期に属する。33は内外面および高台部に施釉されている。34は越中瀬戸の皿である。底部ロクロ削りで高台部は削り出されている。

器種不明 (35・36) 35は瓦質陶器である。36は内外面とも黒色で、外面には厚くススが付着している。

(2) 金属製品 (図版24・45)

煙管 (37・38) 雁首 (37) は上面中央付近に灰落としたために叩いた跡がへこんで残っている。吸い口 (38) はSK15からの出土である。

銭貨 (39~43) 寛永通寶 (39~42) は寛文8年以降に鋳造された新寛永銭である。43は「元」の文字が読み取れるが、字形から銭貨の種類まで特定することはできなかった。44は大正9年鋳造の一銭である。

(3) 土 製 品 (図版24・45)

賽ころ状土製品(45)は粘土塊をヘラ状工具で切断しながら成形したと推定される。46の円盤状土製品の中央部の穴は、錐状のもので焼成前に穿孔されている。47の表面には指跡がよく残っている。ほかに、写真のみ掲載したが、フィゴの羽口(52)が出土した。

(4) 石 製 品 (図版24・45)

砾石(48~51)、凝灰岩製(48・49)と粘板岩製(50・51)のものがある。50の末端部には鋸歯痕のようなものが認められる。

第IV章 年代測定

平成6年度調査時に採取した土壌サンプルを帝古環境研究所に送付し、年代測定を委託した。以下にその結果報告書を掲載する。

新潟県 大堀遺跡出土の放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

大堀遺跡から出土した試料について年代測定を行った。その結果を次表に示す。なお、年代値は1950年よりの年数(B.P.)である。

年代値の算出には¹⁴Cの半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用している。また、付記した誤差は β 線の計数値の標準誤差 σ にもとづいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代である。また、試料の β 線計数率と自然計数率の差が 2σ 以下のときは、 3σ に相当する年代を下限の年代値(B.P.)として表示してある。また、試料の β 線計数率と現在の標準炭素(MODERN STANDARD CARBON)についての計数率との差が 2σ 以下のときは、Modernと表示し、 $\delta^{14}\text{C}\%$ を付記してある。

第1表 大堀遺跡の放射性炭素年代測定結果(学習院大学年代測定室)

試料No.	出土地点	試料	年代値	コードNo.
サンプル1	V層	土壌	$10,170 \pm 140$ (B.C.8220)	GaK-18719
サンプル2	黒色土層	土壌	$8,770 \pm 120$ (B.C.6820)	GaK-18720
サンプル3	S K30覆土	土壌	$8,350 \pm 130$ (B.C.6400)	GaK-18721
サンプル4	焼土1覆土	土壌	$7,520 \pm 150$ (B.C.5570)	GaK-18722

上記のような分析結果を得たわけであるが、サンプルについて若干の補足をしておく。「サンプル1」のV層は縄文時代早期の遺物包含層、「サンプル2」の黒色土層は田口岩層なだれ堆積物層中に挟在する無遺物の黒色土層である。「サンプル3」は陥穴状土坑S K30の14層の土壌、「サンプル4」は焼土遺構1の炭化物含む2層の土壌である。

第V章 まとめ

1. 旧石器時代のナイフ形石器について

大堀遺跡出土の旧石器時代の石器は黒曜石製の画面調整尖頭器、切出形ナイフ形石器、無斑晶質安山岩製の横長剝片を素材とするナイフ形石器各1点がある。この他に比較的まとまって出土した無斑晶質安山岩製の石核2点、剝片5点がある。剝片のうち1点は横長の剝片である。

石器の出土層位はすべてVI層である。VI層下位のVII層は関川岩屑なだれ堆積物であり、約19,000年前の堆積年代が与えられている（早津1985）。また、VI層下から約2.6mほど下がったところで、層厚約7cmの姶良一丹沢火山灰（AT）の純層が観察されている。のことから、大堀遺跡で出土した石器はAT上位の石器であり、なおかつ約19,000年より新しいということは確実である。

大堀遺跡で旧石器時代の石器が出土したことは、これまで旧石器時代の遺跡・遺物の検出例がほとんどなかった上越方面においては注目すべきことである。特に横長剝片を素材とするナイフ形石器の存在は、関川対岸の野尻湖周辺の旧石器文化との関連を考える上で重要である。

まず、横長剝片を素材とするナイフ形石器の編年の位置について触れておきたい。この石器は形態から瀬戸内系石器群（麻柄1994）の影響を受けた石器と捉えられる。

野尻湖周辺の旧石器時代の遺跡の中で、横長剝片を素材とする瀬戸内系のナイフ形石器が出土した遺跡には仲町遺跡（野尻湖人類考古グループ1987）、貫ノ木遺跡（野尻湖人類考古グループ1990）、西岡A遺跡（大竹1995）、東裏遺跡（渡辺1994）、上ノ原遺跡（中村1996）などがある。石器の出土層位は上部野尻ローム層II上部である。この層はATより上位で、細石器～縄文時代草創期までの遺物を包含する上部野尻ローム層IIモヤ層準の下位に当たる。横長剝片を素材とするナイフ形石器の石材はほとんどが無斑晶質安山岩製で、素材となる剝片の生産は打点の移動を行う剝片剝離技術によっており、打点を固定して剝片生産を行う瀬戸内技法は認められない。東日本の瀬戸内系石器群においては、打点を移動しながら素材の横長剝片を生産する三国技法のような技法は、瀬戸内技法に後続するものとされ、瀬戸内系のナイフ形石器の中でもかなり後出的な段階に出現すると考えられている（麻柄1994）。

さて、大堀遺跡の横長剝片を素材とするナイフ形石器は、背面に主要剝離面と打点の方向がほぼ共通する2枚の剝離面が認められ、なおかつ底面を持たない。のことから、素材の剝片が瀬戸内技法によるものでないことが分かる。素材の横長剝片の打面部を背面から腹面に向けて整形加工を施している点から、「直坂II型」の範疇で捉えることができよう。別に出土した横長剝片は底面と見られる剝離面はあるものの、背面に主要剝離面とは同一方向に打点がある複数の剝離面が認められることから、これも瀬戸内技法によるものとは言えない。

上記のような出土層位の関係や石器の形態から見て、大堀遺跡出土の横長剝片を素材とするナイフ形石器は、野尻湖周辺で出土した瀬戸内系ナイフ形石器群と同時期の所産であると推定される。そして、瀬戸内系ナイフ形石器の中でも後出的な段階に位置付けられるといえよう。

次に切出形ナイフ形石器と横長剝片を素材とするナイフ形石器の関係について触れておく。切出形ナイフ形石器は形態的には南関東の編年のV～IV下段階に対比されてもおかしくないと思うが、他に共伴する

石器もなく決め手に欠ける。切出形ナイフ形石器と横長剝片を素材とするナイフ形石器の共伴例が関東地方などにあるため(鶴見1988)、出土状況などに問題はあるものの、ここでは両者が共伴する可能性を考えておきたい。

2. 縄文時代の遺物・遺構

A. 土器について

先述したように本遺跡からは、表裏縄文土器、押型文土器、格条体压痕文土器などが出土している。これらの土器の中で主なもの時期について簡単に触れてみたい。

表裏縄文土器は、胎土中に纖維を含まないもの(I群A類)と含むもの(I群B類)があり、本遺跡ではI群A類はI群B類よりも下層から出土している。I群A類は口縁が外反し、底部は尖底で、16や26にみられるように内面の縄文は胴部下半にも施されているといった特長がうかがえる。これらの特長を持つ表裏縄文土器は、隣接する長野県小佐原遺跡(廣瀬1980)や三牧原遺跡(廣瀬1977)に類似を求めることが可能である。小佐原遺跡や三牧原遺跡の土器は、最近の研究では表裏縄文土器の2~3段階または回転文系土器群II b~II c期に編年されて、本県の室谷上層や関東の井草II~夏島・稻荷台古に並行するものと考えられている(廣瀬1995、宮崎・金子1995)。I群B類は破片資料で、全体をうかがい知ることはできない。纖維を含むという点で類似するものは、本県の中魚沼郡津南町下別当遺跡から出土しており、早期後半に位置づけられていた(中村1959)。しかし、その後この土器は、関東地方の燃系文土器とは並行する地方色の強いものとも考えられ、A類と同じく早期初頭に比定されるとの見方もある(小林1985・小熊1989)。

押型文土器は、山形文が施されているもの(II群A類)・横円文が施されているもの(II群B類1)・格子目文が施されているもの(II群C類)が大半である。その中でもII群A類が約6割と過半数を占め、次いでII群B類1が約2割、II群C類とその他が約1割である。II群A類は帯状施文、II群B類1は密接施文がほとんどである。これらの特長から本遺跡出土の押型文土器は、押型文土器様式の第II様式~第III様式(可見1989)、すなわち中部高地の播磨式~細久保式に並行する可能性が高いと考えられる。II群B類1には纖維を含んでいるものが5割以上みとめられる。胎土中に纖維を含む事例は本県においては妙高山麓ではよくみかけられるが、それ以外ではありませんり出土例ではなく、小千谷市百塚東E遺跡(江口1996)・中里村干溝遺跡(佐藤1994)でわずかに報告されている程度である。

格条体压痕文土器は、口縁部に格条体压痕文が押圧され、内外面に条痕文が施されるもの(III群A類)と胴部に燃糸文が施されるもの(III群B類)に2分される。III群A類は、本県の中魚沼郡から長野県の北部にかけてその類例が多数知られており、本県では展開的段階に当たる穴川タイプ・駒返り十二社タイプに相当し、長野県の資料を媒介して東海地方の上ノ山式~入海I式に並行させている(小熊1989)。長野県では古段階の格条体压痕文土器とされ、関東地方の茅山上層式土器や東海地方の船形式土器・上ノ山式土器に並行する時期に比定されている(綿田1996)。III群B類は、自条自巻の格条体の原体を回転させて燃糸文を施文したと考えられるもので、本県では類例は確認されていない。しかしこの土器は、格条体压痕文のほかは条痕文ではなく燃糸文が施されていることから、III群A類よりも後出の土器と考えられる。一方、長野県では類似する土器が出土しており、格条体压痕文土器の新段階に比定され、東海地方の石山式・天神山式に並行するものと考えられている(綿田1996)。147は微細な条痕文が施されており、III群A類の中

でも異質であるが、他と同様に本県の中魚沼郡から長野県北部にかけてその類例がみとめられる。本県では絡条体圧痕文土器の終末的段階・星敷田タイプ（小熊1989）に当たる。長野県では前述したIII群B類と同じく絡条体圧痕文土器の新段階とされている（綿田1996）が、並行関係においては石山式・天神山式（綿田1996）ではなく入海II式以降とする考え方もある（小熊1989）。

条痕文土器はIV群A類とB類からなる。IV群A類は、出土地点・出土層位・条痕文の施文部位・条痕の施文工具および技法が絡条体圧痕文土器のIII群A類と共通することから、同時期の所産であろう。IV群B類は、関東地方の鶴ヶ島台式土器もしくはその影響を強く受けた土器と考えられ、当地域では異質な土器である。一般的に考えて時期的にもIV群A類に先行する可能性が高い。

繩文施文の土器は、撚糸文のV群A類・組紐的な繩文のV群C類・羽状絞文のV群D類などがある。178を除くV群A類は、撚糸文が施されて纖維を含んでいるという点からIII群B類と同時期の絡条体圧痕文土器の新段階に比定されるものと考えられる。V群C類は、組紐的な繩文を持つことから前期の関山式土器に並行するであろうし、ループおよびループ的な繩文を持つものも同時期に比定されるであろう。V群D類は、241・242・248を除く全てにおいて纖維を含んでいる。纖維を含んでいるものは有尾式土器以前、纖維を含んでいないものは諸磯式土器以後に比定される可能性が高い。

他の土器の中で特筆されるものとしては、無文土器ではあるが表裏繩文土器の出土層位であるV層よりも下位のVI層から出土したことにより草創期の可能性が指摘されている269と器面調整・器壁の厚さ・纖維の混入の状況から長野県に分布する木島式土器である可能性が高い271・272がある。もし271・272が木島式土器であれば、妙高山麓（室岡・早津1986）や魚沼地域（江口1996）にはそれに近似または類似する土器が存在することから、今後の動向が注目される。

以上のように本遺跡からは、草創期？～前期までの土器が出土しているが、その主体は早期の土器であり、主要土器の並行関係などは以下のとおりである。中でも本遺跡が所在する妙高山麓における表裏繩文、押型文、絡条体圧痕文など動態は、縦的、地域的のいすれの問題においても注目に値する。今後の建設省関連や日本道路公团関連の遺物整理および報告書の刊行に期待したい。

第2表 大根遺跡の編年対応表

時 期	文 標	主 要 土 器	並 行 関 係 等
草創期？	無 文	VI群B類	
早 期	表裏繩文 押型文 絡条体圧痕文 条痕文 撚糸文 無 文	I群A類、I群B類 II群A類、II群B1類 III群A類 III群B類 IV群A類 V群A類 VI群B類	室谷上層・井草II～夏島・福荷台古 檍沢～細久保 茅山上層・船畑・上ノ山～入海I 入海II～石山・天神山 茅山上層・船畑・上ノ山～入海I 入海II～石山・天神山 木島
前 期	組紐的繩文 羽状繩文 半截竹管文 結節浮線文	V群C類 V群D類 VI群A類 VI群A類	関山 有尾以前、諸磯以後 諸磯 十三菩提

B. 石器について

繩文時代の石器は3か所に別れて散布しており、これを便宜的に集中地点1～3と呼称した。集中地点1は押型文土器・表裏縄文土器・条痕文土器の集中地点が重なる部分に当たるため、それぞれの土器との共伴関係を捉えることは不可能であった。集中地点2は条痕文土器の集中地点にはば重なる。集中地点3は土器の集中地点には重ならないが、焼土遺構の分布している地点にある。集中地点以外では陥穴列の付近で石鏟・石匙などが出土している。それぞれの集中地点の器種組成・石材組成は別表(図版22)に示したとおりである。

各集中地点からは量の多寡はあるものの、磨石類や石鎌が出土している。のことと、集中地点以外の所から石鎌が出土していること、陥穴状土坑が存在することなどを合わせて考えると、時期幅はあるものの、大堀遺跡は狩猟の場と狩猟時のキャンプ地という性格を備えた場所であったと推定される。

なお、散布地点1のVI層から出土した大形の局部磨製石斧については、非実用品であると推定されるほかは、類例もなく詳細は不明である。所属時期はVI層に食い込んで出土したということから、草創期から早期と推定される。

C. 陥穴状土坑の構築時期について

陥穴状土坑の構築時期の推定方法には①土坑内の出土遺物、②土坑内に堆積した火山灰の検出、③他遺構との切り合い関係、④検出面以降の土層堆積状況の観察、⑤他遺跡との比較などがある。このうち、①②については対象になるような資料が検出されていないので適用できない。③はSK32がSK57に切られているが、SK57は検出面がSK32と同一で出土遺物もないことから時期推定の資料とはならない。よって、ここでは④⑤の方法に基づいて行う。

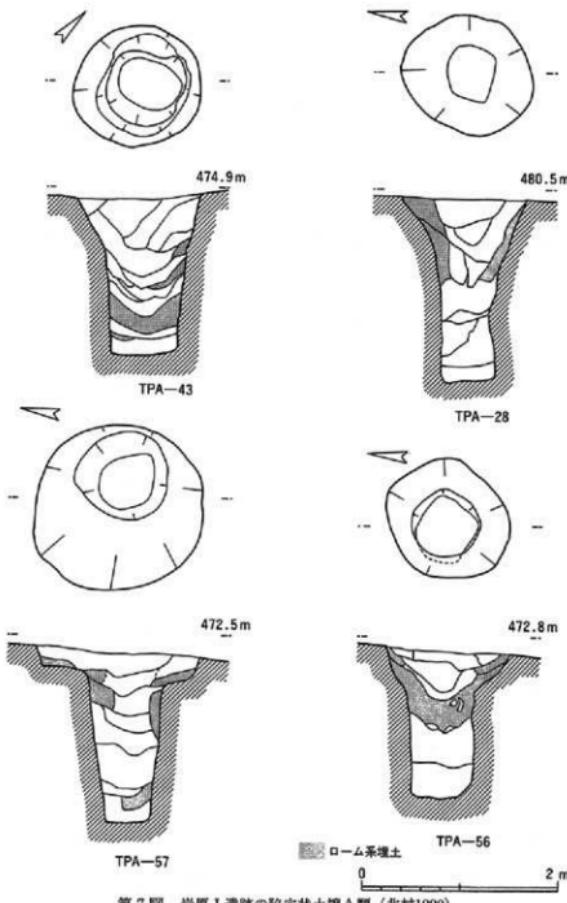
はじめに層位的な面から検討する。13基の陥穴状土坑はすべてVI層上面において検出された。SK22～31の掘り込み面はV層に覆われており、V層の上には田口岩屑なだれ堆積物が厚く堆積していた。SK32～34の存在する地点にはV層と田口岩屑なだれ堆積物がなく、掘り込み面はIV層に覆われていた。IV層の上には赤倉火碎なだれ堆積物が堆積していた。各層の時期は出土遺物から、VI層が草創期?、V層が早期、IV層が早期から前期と推定される。このことから、陥穴状土坑の構築時期は草創期より後、早期以前と推定される。

次に他遺跡との比較を行う。13基の陥穴状土坑の形態は平面形が円形あるいは橢円形で、掘り方は漏斗形をしている。底部に小ビットは認められない。これは岩原I遺跡(北村1990)のA類に当たる。この類型の陥穴状土坑の構築時期は早期から前期前葉と推定されている。その根拠のひとつは火山灰との関係が明らかで、時期推定がなされている同類型の陥穴状土坑との対比である。類例のひとつ岩手県大堀II遺跡(平井1987)の陥穴状土坑は「掘り込み面が縄文前期に降下したといわれる中振浮石層より下位であり、縄文早期に降下した南部浮石層より上位であるから、縄文時代の早～前期であることは間違いない。」とされている。もうひとつの根拠は、岩原I遺跡の陥穴状土坑内から出土する土器が早期の沈線文系・条痕文系土器であるのに対し、包含層出土の土器では早期終末から前期前葉のものが存在しない。この空白期が陥穴状土坑の構築・使用時期に重要な示唆を与えているというものである。

最後に放射性炭素年代測定結果について触れておく。測定の結果、V層に $10,170 \pm 140$ y.B.P.、SK30の14層に $8,350 \pm 130$ y.B.P.という年代値がえられた。V層の年代値は土器の様相からみてもほぼ妥当な値と

見られることから、これに覆われている陥穴状土坑の年代は約1万年前と考えられる。また、土坑内の覆土が8,350年前という値を示していることから、実際埋没に要した時間を推測することはできないまでも、埋没にはかなりの時間を要したと推定される。

以上のように、大堀遺跡の陥穴状土坑は形態的には早期終末から前期前葉にも当たるものであるが、ここでは層位的事実を重視して、草創期より後から早期以前の構築時期を考えておきたい。また、年代測定の結果を考慮するなら、早期でも前葉までに限定できよう。



第7図 岩原I遺跡の陥穴状土壙A類 (北村1990)

要 約

1. 大堀遺跡は新潟県中頸城郡妙高高原町大字関川字大堀1276ほかに所在する。遺跡は妙高山麓南東端の標高約620mの緩斜面上に位置する。遺跡南側を関川とその支流である清瀬川が東流しており、遺跡と河川との間は比高約30mの急崖になっている。
2. 発掘調査は国道18号線妙高野尻バイパスの道路法線内に遺跡が存在したことに起因する。一次調査は平成3年11月11日から22日に実施した。二次調査は3か年にわたり、平成5年5月11日から11月12日、平成6年4月25日から11月30日、平成7年5月18日から7月31日に実施した。調査面積は21,800m²である。
3. 調査の結果、旧石器時代、縄文時代草創期～前期、平安時代、中世、近世の遺物が出土し、縄文時代早期と近世の遺構が検出された。遺跡の主体となる時期は縄文時代早期である。
4. 旧石器時代の石器では切出形ナイフ形石器、横長剣片を素材とする瀬戸内系のナイフ形石器、両面調整の尖頭器が出土した。
5. 縄文土器には無文土器・表裏縄文土器・押型文土器・条痕文土器・絡条体压痕文土器があり、6群19類に分類可能である。所属時期は縄文時代草創期？～前期に比定される。
6. 縄文時代の石器は有舌尖頭器、石鎌、石錐、スクレイパー、石匙、打製石斧、局部磨製石斧、磨石類、特殊磨石等がある。このうち局部磨製石斧は長さ約26cmの楔形をしており、器面に綾衫状の擦痕が付けられている。非实用品と見られるが類例がなく、性格は不明である。
7. 縄文時代の遺構には陥穴状土坑、押型文土器の時期に属する性格不明の遺構が数基検出された。陥穴状土坑の構築時期は草創期後半から早期前半までと推定され、全国的にも古いものである。
8. 遺物の内容・出土状況と遺構の分布状況から、縄文時代草創期？～早期前半の大堀遺跡は、狩猟の場とそのキャンプ地であったと考えられる。
9. 平安時代の遺物は9世紀後半から10世紀代のものと見られる須恵器・土師器が出土した。
10. 近世の遺物には陶磁器、土製品、錢貨、煙管などがある。陶磁器は18～19世紀の肥前系のものが主体だが、1点だけ越中瀬戸の皿がある。
11. 近世の遺構には石組みを伴う土塙墓と溝状遺構がある。

第3表 遺構観察表

縄文時代の遺構

No.	位 置	検出面	上 端		下 端		深さcm	長軸方向	備 考
			長軸cm	短軸cm	長軸cm	短軸cm			
S K22	4 Q 2	VI	154	130	70	60	165	N-90'-W	竪穴状土坑
S K23	3 Q 4・9	VI	165	155	73	55	180	N-73'-E	竪穴状土坑
S K24	3 Q 11	VI	145	134	45	20	160	N-70'-E	竪穴状土坑
S K25	3 Q 2	VI	140	127	45	40	150	N-55'-W	竪穴状土坑
S K26	2 Q 7	VI	190	178	80	53	160	N-77'-E	竪穴状土坑 使用痕のある剝片 (図版21-58)
S K27	1 Q14・15	VI	162	133	64	55	198	N-6'-E	竪穴状土坑
S K28	1 Q12・17	VI	185	180	75	58	160	N-23'-W	竪穴状土坑
S K29	2 Q 8・9・13・14	VI	215	209	70	40	150	N-25'-W	竪穴状土坑
S K30	2 K24・2 L 4	VI	125	120	40	34	135	N-18'-E	竪穴状土坑
S K31	1 P 5	VI	157	154	51	46	150	N-0'	竪穴状土坑
S K32	11 J 2・7	VI	192	155	65	30	177	N-3'-W	竪穴状土坑 S K57に切られる
S K33	9 J 10・15	VI	170	158	75	60	174	N-19'-E	竪穴状土坑
S K34	12 I 21・22	VI	215	198	70	65	180	N-24'-W	竪穴状土坑
S K35	4 I 9	VI	110	105	90	85	93	N-5'-W	竪穴状土坑?
焼土 1	9 O25	VI	83	55	40	13	26	N-25'-E	
焼土 2	9 O15・20	VI	55	45	45	40	10	N-63'-W	
S X 1	3 D24	VI	105	80	37	30	29	N-13'-W	縄文土器II群B類 (図版9-7)
S X 2	3 D 7・8	VI	182	175	37	24	30	N-12'-W	縄文土器II群A類 (図版9-8)
S X 3	3 D17	VI	90	80	65	60	17	N-25'-W	凹基無茎石錐 (図版18-14)
S X 4	3 C22・3 D 2	VI	155	142	45	40	28	N-77'-E	
S X 5	3 C 7・8・12・13	VI	185	170	35	24	35	N-73'-E	
S X 6	4 C 6・7・11・ 12・15・17	VI	400	313	125	117	30	N-22'-W	縄文土器II群B類 2 (図版9-9) 縄文土器II群A類 (図版9-10)
S X 7	3 D17・18	VI	172	145	84	60	47	N-28'-W	
S X54	1 K10・2 K 6	VI	230	180	128	110	45	N-22'-W	
S X55	3 L23	VI	255	150	245	162	10	N-44'-E	縄文土器I群A類 (図版9-29)
S X56	2 L 1・2・6	VI	190	135	25	17	50	N-28'-W	
S X57	11 J 1	VI	90	86	38	26	28	N-63'-W	S K32を切る
Pit 5	1 M 9	VI	102	80	45	40	18	N-90'-W	
S K11	2 M21・22	VI	155	120	145	100	29	N-84'-W	縄文土器VI群 (図版9-1-2) 剝片 (図版18-26)
S X 8	4 D12・13・17・18	III	75	70	40	37	20	N-84'-E	縄文土器II群B類 2 (図版9-11-15) 縄文土器II群A類 (図版9-12-13)
S X 9	4 D21・22	III	80	65	48	43	12	N-69'-E	

近世の遺構

No.	位 置	検出面	上 端		下 端		深さcm	長軸方向	備 考
			長軸cm	短軸cm	長軸cm	短軸cm			
S K15	3 O8・9・13・14	I	150	135	110	100	100	N-80'-E	土壤基 煙管の吸い口 (図版24-38)
S D30	11 O5・11 P21	VI	-	-	-	-	-	N-56'-E	全容不明 煙管の脛首 (図版24-37) 土師器輪 (図版24-20) 打製石斧 (図版24-67)
S X32	12 O3・11 P19	VI	-	-	-	-	-	N-56'-E	全容不明

第4表 旧石器時代・縄文時代の石器観察表

No	器種	出土位置	層位	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	石 材	備考
1	尖頭器	6 C 6	VI	44	18	7	4.6	黒曜石	
2	切出形ナイフ形石器	3 D23	II	42	15	12	4.9	黒曜石	
3	横長剥片素材のナイフ 形石器	1 ~ 4 I ~ L	—	54	23	7	8.2	無斑晶質安山岩	
4	横長剥片	2 K 6	—	31	85	11	18.9	無斑晶質安山岩	破損品
5	剥片	2 K12	V	38	34	10	16.2	無斑晶質安山岩	自然面あり
6	剥片	2 L 3	V	36	42	5	7.1	無斑晶質安山岩	
7	剥片	2 L23	V	30	33	7	7.1	無斑晶質安山岩	
8	剥片	2 L 3	IV	40	51	10	13.2	無斑晶質安山岩	
9	石核	2 K12	V	26	50	30	40.3	無斑晶質安山岩	
10	石核	2 K23	—	26	45	18	17.7	無斑晶質安山岩	自然面あり
11	有舌尖頭器	5 D13	II	39	14	6	3.0	凝灰岩	先端欠損
12	凸基無茎石鏽	2 C16	II層下	23	18	4	1.1	玉髓	先端・茎欠
13	凹基無茎石鏽	3 D 1	II	24	20	3	0.9	無斑晶質安山岩	
14	凹基無茎石鏽	S X 3	—	14	14	2	0.2	黒曜石	
15	凹基無茎石鏽	3 D19	V層下	17	16	4	0.7	無斑晶質安山岩	
16	石鏽未製品?	4 D23	—	22	18	9	3.1	黒曜石	側縁ツブレ
17	石鏽未製品	4 E12	—	19	15	6	1.3	黒曜石	
18	石鏽未製品	5 E22	—	17	14	5	1.0	黒曜石	
19	石鏽未製品	3 D 3	—	24	14	4	1.1	無斑晶質安山岩	
20	石錐	4 E25	—	17	23	6	1.6	無斑晶質安山岩	上半欠
21	石錐	3 D 5	II	39	13	7	3.1	無斑晶質安山岩	
22	両極石器	4 D22	—	10	26	11	1.7	無斑晶質安山岩	二極一対
23	両極石器	3 C24	II	21	23	10	3.9	黒曜石	四極二対
24	使用痕のある剥片	3 D 9	—	26	17	10	3.2	黒曜石	全面水磨
25	使用痕のある剥片	4 D18	—	51	31	10	13.5	頁岩	
26	両極石器	S K11	IV	29	27	9	5.7	凝灰岩	二極一対
27	局部磨製石斧	4 D11	VI	258	91	26	648.9	頁岩?	
28	スクレイバー	2 C22	III	65	106	34	262.3	頁岩	
29	スクレイバー	3 C14	III層下	66	89	32	182.6	頁岩	両極石器軸用
30	籠状石器	3 D18	II	49	32	9	13.2	頁岩	
31	石核?	4 C18	—	49	66	55	216.9	頁岩	
32	剥片	4 E24	—	35	31	7	4.1	凝灰岩	
33	剥片	5 E17	IV	30	21	7	4.8	頁岩	背面礫面
34	剥片	3 D19	V層下	26	22	10	4.2	黒曜石	背面礫面
35	使用痕のある剥片	3 D15	II	35	31	10	7.4	黒曜石	打面水磨
36	剥片	3 D23	II	27	47	7	7.7	凝灰岩	自然面
37	剥片	5 F21	—	38	24	8	4.1	無斑晶質安山岩	
38	剥片	4 E12	IV	25	47	10	9.4	無斑晶質安山岩	
39	剥片	3 D24	II	18	42	7	3.3	無斑晶質安山岩	

No.	器種	出土位置	層位	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	石材	備考
40	剝片	3 D 1	V	73	44	13	35.6	無斑品質安山岩	
41	特殊磨石	3 C 19	III	138	50	71	606.5	安山岩	IV類
42	特殊磨石	3 D 25	II	160	58	70	724.0	硬砂岩	IV類
43	特殊磨石	3 D 15	II	129	38	57	381.3	安山岩	III類
44	特殊磨石	4 E 20	IV	118	67	43	478.2	安山岩	IV類
45	特殊磨石	3 C 15	V	128	59	81	762.7	砂岩	II類
46	特殊磨石	3 C 14	III	135	52	74	720.2	安山岩	II類
47	特殊磨石	4 D 16	V	94	57	95	711.9	安山岩	II類 破損品
48	特殊磨石	3 C 19?	—	105	57	71	605.8	安山岩	I類 破損品
49	磨石類	2 C	V	107	77	34	351.9	安山岩	I類
50	磨石類	3 D 5	II	100	86	43	483.1	安山岩	I類 破損品
51	特殊磨石	2 D 3	III	108	78	58	591.7	砂岩	I類
52	磨石類	3 D 9	II	99	75	45	502.5	安山岩	II類
53	磨石類	2 C 14	V	77	99	31	385.8	安山岩	I類 破損品
54	未製品	1 P 12	IV	43	21	7	9.3	滑石	块状耳飾り?
55	凹基無茎石錐	2 P 11	III	21	16	5	0.9	黑曜石	右脚欠
56	凹基無茎石錐	3 P 1	—	15	15	3	0.5	黑曜石	先端欠
57	両極石器	2 P 17	IV	37	13	8	4.0	無斑品質安山岩	二重一対
58	使用痕のある剝片	S K26内	I	20	18	6	1.5	黑曜石	
59	剝片	3 O 25	—	19	23	11	3.1	黑色頁岩	
60	使用痕のある剝片	3 O 7	III上面	22	28	10	4.6	玉髓	
61	使用痕のある剝片	3 O 18	—	15	17	4	1.0	玉髓	
62	磨石類	3 O 25	IV	108	101	43	626.3	安山岩	III類
63	石皿	3 P 7	IV	162	200	66	4010.0	安山岩	破損品
64	特殊磨石	3 O 9	II	124	59	63	481.4	砂岩	I類
65	磨石類	3 Q 9	IV	107	60	60	611.5	安山岩	I類
66	凹基無茎石錐	9 N 17	IV	25	15	3	0.7	黑曜石	
67	打製石斧	10 P 20 S D 30	—	94	43	24	129.9	安山岩	裏面剥落
68	石鍬	10 O 15	IV	81	79	43	315.9	安山岩	
69	磨石類	12 O 21	II	91	63	48	318.5	安山岩	V類
70	磨石類	11 Q 5	IV	103	90	51	610.4	安山岩	I類
71	磨石類	10 O	II	100	60	48	389.5	砂岩	II類
72	特殊磨石	10 Q 18	IV	148	58	67	749.9	安山岩	III類
73	平基有茎石錐	10 K 21	—	28	16	4	1.5	チャート	先端欠
74	凹基無茎石錐	3 M 3	II	25	16	3.5	0.8	黑曜石	
75	凹基無茎石錐	11 L 15	—	24	16	5	1.2	無斑品質安山岩	
76	凹基無茎石錐	10 J 13	IV	21	16	4	0.9	黑曜石	先端欠
77	石匙	9 L 11	V	49	77	15	38.9	流紋岩	破損品
78	両極石器	拂土	—	31	30	8	7.7	チャート	二重一対

第5表 平安時代以降の遺物觀察表

・「遺存度」は遺存部位の外周の角度を示した。

・胎土凡例 長：長石、英：石英、角：角閃石、チャ：チャート、雲：雲母

・法量、遺存度凡例 口：口径、頸：頸部残存部最大径、底：底径。法量の後ろの数値は各部位の直徑（単位：cm）。

須恵器

No	器種	出土地点	層位	法量	遺存度	胎 土	焼成	色調	手 法	備 考
1	短頸壺	2 C15	II	口14.0	口150°		並	黄灰	内外：ロクロナデ	口縁に自然輪 肩部に「川」字状の彫刻模様あり
2	長頸壺	4 I 10・15	I	頸 6.4	頸 90°	白色粒子	並	暗灰灰	内外：ロクロナデ	外面に自然輪
3	壺	2 C15	II	底16.0	底 70°	長	並	灰	外：ロクロナデ・ロクロ削り 内：刷毛目	

土師器

No	器種	出土地点	層位	法量	遺存度	胎 土	焼成	色調	手 法	備 考
4	長胴甕	2 C21	II	口19.0	口120°	英長角	並	純い褐	外：口縁部ロクロナデ 体部叩き 内：口縁部ロクロナデ 体部叩き毛目	
5	長胴甕	—	—	口19.6	口 60°	英チャ	並	純い褐	内外：ロクロナデ	口縁部にスス
6	長胴甕	2 C15	II	口21.0	口 25°	英長角	並	純い褐	内外：ロクロナデ	
7	長胴甕	2 C11・15	II	口23.8	口 20°	英長角	並	明赤褐	内外：ロクロナデ	
8	長胴甕	3 D 7	II	口20.2	口 40°	長	並	橙	内外：ロクロナデ	
9	長胴甕	—	—	口21.0	口 20°	英長チャ	並	明赤褐	内外：ロクロナデ	
10	長胴甕	2 C15・19	II	—	体 —	雪	並	純い褐	外：格子叩き目 内：昌具柄(径4.5cmの丸木の横断面を利用?)	器壁が著しく 薄い
11	小型甕	2 C15	II	口12.0	口 80°	長角	並	赤褐	内外：ロクロナデ	外面脛曲部に スス
12	小型甕	2 C15	—	口12.0	口 35°	長角雪	並	明赤褐	内外：ロクロナデ	
13	小型甕	2 C11	II	底 7.2	底240°	角雪	並	明赤褐	内外：ロクロナデ 底：圓軌条切り	
14	有台碗	2 C15	II	口16.4	口120°	長角	並	明赤褐	内外：ロクロナデ 内：範磨き後黒色処理	被熱のため黒 色が飛んでい る
15	有台碗	2 C19	II	底 8.8	底 50°	長角	並	橙	内外：ロクロナデ 底：圓軌条切り後高台張付け 内：範磨き後黒色処理	被熱のため黒 色が飛んでい る
16	無台碗	2 C15	—	口11.8	口 32°	角雪チャ	並	明赤褐	内外：ロクロナデ 内：範磨き後黒色処理 底：圓軌条切り	被熱のため黒 色が飛んでい る 内面火はしけ
17	碗	2 C15	II	口12.0	口 50°	長角	並	明赤褐	内外：ロクロナデ 内：範磨き後黒色処理	
18	碗	4 C17	II	口13.6	口 60°	角	並	暗赤褐	内外：ロクロナデ 内：範磨き後黒色処理	外面スス付着
19	碗	2 C19	II	口15.4	口 25°	雪	並	明赤褐	内外：ロクロナデ 内：範磨き後黒色処理	外面スス付着
20	碗	SD30 II O 13	—	口15.6	口 20°	英長	並	橙	内外：ロクロナデ 内：範磨き後黒色処理	被熱のため黒 色が飛んでい る 内面火はしけ

陶器

No.	器種	出土地点	層位	法量	違存度	胎 土	焼成	色調	手 法	備 考
21	擂鉢	12O2	I	口30.2	口 13°	白色粒子	並	灰	内外:ロクロナデ	珠洲焼
22	擂鉢	10N	II	口27.6	口 20°		並	純い褐	内外:鉄輪	肥前系陶器
23	擂鉢	5 O18	II	口28.0	口 15°		並	純い褐	内外:鉄輪 外:灰被り	肥前系陶器
24	土鍋	9 I 14	—	底13.8	底 25°		並	純い黄 橙	内:ロクロナデ 外:ケズリ	素燒き 内外スス付着
25	急須	4 H10	II	—	—		並	鉢	内:ロクロナデ	外:梨肌
26	香炉	8 O	II	口9.2	口 33°		並	白	青磁	肥前系磁器
27	碗	11M	II	口11.2	口 20°		並	灰白		肥前系磁器
28	碗	4 C16	I	底 4.0	底120°		並	灰白	高台端部内側に珍付着	肥前系磁器
29	碗	3 J 5	II	10.8	口 20°		並	灰白		肥前系陶器 京焼風
30	碗	4 H13	II	底 5.4	底 50°		並	白	漆黒	肥前系磁器 広東碗 みごとに判読 不明の文字
31	皿	2 L17	II	底 5.0	底 30°		並	褐灰	内外:鉄輪 底:回転系切り	肥前系陶器
32	皿	5 D17	II	口15.8	口 20°		並	褐灰	口唇~内:全面素灰釉 外:一部褐灰釉	肥前系陶器
33	皿	3 L 5	I	底 6.2	底 —		並	灰黄褐	外:高台部含め全面地釉	
34	皿	5 C 7	I	底 4.2	底120°	英	並	灰黄褐	底:回転ヘラ削り 高台:削り出し	越中瀬戸
35	不明	1 Q 1	I	底 9.2	底 30°		並	鈍賞橙		
36	不明	8 E	I	口17.0	口 50°	英反雲	並	明褐色	口縁上面ミガキ 外:スス付着	

金属製品

No.	器種	出土地点	層位	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	備考
37	煙管の雁首	S D30	—	53	13	11	2.0	銅製
38	煙管の吸い口	S K15	—	35	11	11	14.6	銅製
39	寛永通寶	3 O18	I	25	25	1	2.4	裏面に「文」の字
40	寛永通寶	10 レンチ	—	26	19	1	1.7	推定径27mm 裏面に青海波状文
41	寛永通寶	8 K12	II層	23	23	1	2.9	
42	寛永通寶	1 H17-22	—	12	20	1	1.0	推定径24mm
43	銅錢	5 G16	II	9	13	1	0.3	推定径20mm 「元」の文字あり
44	一銭銅錢	8 P 4	II	23	23	1.5	3.6	「大正八年」銘

土製品・石製品

No.	器種	出土地点	層位	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	備考
45	實ころ状土製品	4 J 22	II	12	13	12	2.9	ヘラ状工具で粘土塊を切断しながら直方体に成形
46	円盤状土製品	2 N20	トレンチ 土	24	22	18	4.8	焼成前に穿孔
47	円盤状土製品	3 M20	II	20	18	6	1.9	全面に指跡が残る
48	砾石	5 D19	II	37	31	11	15.0	凝灰岩
49	砾石	4 I 16	II	31	23	14	16.6	凝灰岩 来端に網目あり
50	砾石	5 G10	II	34	32	5	7.0	粘板岩
51	砾石	11M	II	48	25	5	5.8	粘板岩
52	タイゴの羽口	9 J 14	II	29	29	31	15.0	鉄滓付着

引用・参考文献

- ア会田 進 1971 「押型文土器縄年の再検討特に施文法・文様構成を中心として」『信濃』23巻3号 信濃史学会
- 会田 進 1987 「第2節【課題1】樋沢遺跡の発掘と樋沢式土器」「樋沢押型文遺跡調査研究報告書」郷土の文化財16 長野県岡谷市教育委員会
- 会田 進 1987 「第3節 押型文土器をめぐる最近の研究」「樋沢押型文遺跡調査研究報告書」郷土の文化財16 長野県岡谷市教育委員会
- 石川和明 1983 「第2部 土坑群についての考察」「霧ヶ丘」「霧ヶ丘遺跡調査団
- 石原正敏・小熊博史 1988 「新潟県の研究動向」「第2回縄文セミナー 縄文早期の諸問題」群馬県考古学研究所
- 今村啓爾 1973 「第2部 霧ヶ丘遺跡の土坑群に関する考察」「霧ヶ丘」「霧ヶ丘遺跡調査団
- 今村啓爾 1983 「「縄穴(おとし穴)」「縄文化の研究」2 雄山閣
- 江口友子 1996 「百塚東E遺跡」「堂付遺跡 百塚東E遺跡 百塚西C遺跡 割目B遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第78号 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 大竹恵昭 1995 「信濃西岡A遺跡の調査」「第7回長野県旧石器文化交流会発表要旨」
- 大橋康二 1984 「「紀前海磯一古墳群」伊万里の流通を探るー」佐賀県立九州陶磁文化館
- 岡本東三 1987 「第2節【課題7】押型文土器の技法と起源をめぐって」「樋沢押型文遺跡調査研究報告書」郷土の文化財16 長野県岡谷市教育委員会
- 小熊博史 1989 「縄文時代早期終末における絆条体圧痕文土器の一様相」「信濃」第41巻第4号 信濃史学会
- 力可見通宏 1987 「第2節【課題6】関東地方の押型文土器と絆条文土器」「樋沢押型文遺跡調査研究報告書」郷土の文化財16 長野県岡谷市教育委員会
- 可見通宏 1989 「「押型文系土器様式」「縄文土器大観」1草創期 早期 前期 小学館
- 神村 透 1987 「第2節【課題4】中部地方の押型文土器と特徴」「樋沢押型文遺跡調査研究報告書」郷土の文化財16 長野県岡谷市教育委員会
- 北村 亮 1990 「第III章3 A 「陥穴状土坑」「岩原I遺跡 上林塚遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第56集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 北村 亮 1990 「第III章4 B 「石器」「岩原I遺跡 上林塚遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第56集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小平和夫 1990 「第5節 古代の土器」「越後長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書4 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4—松本市内その1—経験編」越後長野県埋蔵文化財センター
- 小林達雄 1985 「第四節 津南地域の縄文時代」「津南町史」通史編 上巻 津南町役場
- 駒形敏朗・石原正敏・小熊博史 1985 「新潟県における縄文早期・前期の基礎的研究(2)」「長岡市立科学博物館研究報告」第20号 長岡市立科学博物館
- 駒形敏朗・石原正敏・小熊博史 1986 「新潟県における縄文早期・前期の基礎的研究(3)」「長岡市立科学博物館研究報告」第21号 長岡市立科学博物館
- 駒形敏朗・石原正敏・小熊博史 1987 「新潟県における縄文早期・前期の基礎的研究(4)」「長岡市立科学博物館研究報告」第22号 長岡市立科学博物館
- 駒形敏朗・石原正敏・小熊博史 1988 「新潟県における縄文早期・前期の基礎的研究(5)」「長岡市立科学博物館研究報告」第23号 長岡市立科学博物館
- 小島正己 1995 「妙高山麓における最近の考古学事情」「妙高火山研究所年報」第3号 妙高火山研究所
- 小松 康 1978 「「棚原岩陰遺跡と押型文土器の出現時期」「中部高地の考古学」長野県考古学会15周年記念論集」長野県考古学会
- 近藤宗光 1984 「「III 4. 陥穴状遺構」「川口I 遺跡発掘調査報告書」岩手県埋蔵文センター文化財調査報告書第83集 勝手岩手県埋蔵文化財センター
- サ奇藤幸恵 1987 「第6章 押型文系土器文化の石器群とその研究」「郷土の文化財16 樋沢押型文遺跡調査研究報告書」長野県岡谷市教育委員会

- 坂井秀弥 1984 「第VI章 1. 今池遺跡群における奈良・平安時代の土器」「今池遺跡 下新町遺跡 子安遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 柳原松司 1983 「第2部 瓢場についての一私考」「霧ヶ丘 霧ヶ丘遺跡調査団
- 坂井秀弥 1987 「第V章 1. 土器・陶磁器」「三島郡出雲崎町番場遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第48集 新潟県教育委員会
- 笠沢正史 1995 「信濃両地域にまたがるロクロ土師器甕の在り方について」「新潟考古学談話会会報」第15号 新潟考古学談話会
- 佐藤雅一 1987 「川久保遺跡II 宮林B遺跡」「湯沢町埋蔵文化財報告第6輯 湯沢町教育委員会
- 佐藤雅一 1988 「第III章 C. III層下部検出の遺構と遺物」「大刈野遺跡」「湯沢町埋蔵文化財報告書第9輯 湯沢町教育委員会
- 佐藤雅一 1994 「3. 出土遺物(土器類) A. 縄文時代」「干溝遺跡」中里村文化財調査報告書第6輯 中里村教育委員会
- 佐藤雅一 1996 「津南町正面ケ原B遺跡出土の国府型ナニフ形石器について」「越佐補遺些」創刊号 越佐補遺些の会
- 鈴木道之助1991 「図録 石器入門事典 縄文」柏書房
- 諏訪間順 1988 「相模野台地における石器群の変遷について一層位的出土例の検討による石器群の段階的把握ー」「神奈川考古」24 神奈川考古同人会
- タ高橋 保 1976 「V 2 縄文早期の土器」「梨ノ木古墳群万五郎(第1号) 古墳発掘調査報告書」新井市教育委員会
- 田中 靖 1991 「第IV章 遺物2 C1) d 石匙」「城之越遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 戸沢光則 1978 「押型文土器群縄手研究素描」「中部高地の考古学 長野県考古学会15周年記念論集」長野県考古学会
- 戸根与八郎1986 「V 1. 陶磁器」「高田城下鍋屋町遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第41新潟県教育委員会
- ナ中村孝三郎1959 「新潟県中魚沼郡津南町清津 縄文早期下別当遺跡」「N K H」VOL. 2 № 1 長岡市立科学博物館
- 中村敦子 1994 「II 2 歴史的環境」「九谷町遺跡・大道下遺跡発掘調査報告書—平安時代住居址・押型文土器の遺跡ー」信濃町教育委員会
- 中村孝三郎・小林達雄 1963 「耶ノ木押型文遺跡 壱貝遺跡」長岡市立科学博物館
- 中村龍雄 1984 「中部高地 オセンベ土器 完」オノウエ印刷
- 中村由克 1996 「信濃町上原遺跡(県道地点)の調査」「第8回長野県旧石器文化交流会発表要旨」長野県考古学会縄文時代(早期) 研究部会 1994 「衣袴織文土器から立野式土器へ」研究会資料
- 日本貨幣商協同組合 1995 「日本貨幣カタログ」1995
- 野尻湖人類考古グループ 1987 「野尻湖遺跡群の旧石器文化I」
- 野尻湖人類考古グループ 1990 「野尻湖遺跡群の旧石器文化II」
- 八早津賢二 1985 「II D 紗高火山」「紗高火山群—その地質と活動史ー」第一法規
- 早津賢二 1986 a 「V章 中古遺跡とその周辺の地形・地質」「中古遺跡」紗高村教育委員会
- 早津賢二 1986 b 「第二章 紗高高原の大地」「紗高高原町史」紗高高原町
- 早津賢二 1994 「紗高火山群研究の1993年における新展開と問題点」「紗高火山研究所年報」第2号
- 早津賢二 1995 a 「紗高村史の「紗高山の地形と地質」に関する部分の論評」「紗高火山研究所年報」第3号
- 早津賢二 1995 b 「紗高火山群研究の1994年における新展開と問題点」「紗高火山研究所年報」第3号
- 早津賢二・新井房夫 1985 「紗高火山群テフラ地域のテフラ層」「紗高火山群—その地質と活動史ー」第一法規
- 早津賢二・小島正巳 1985 「火山噴出物と先史時代遺物包含層との層位関係」「紗高火山群—その地質と活動史ー」第一法規
- 早津賢二・古川成光 1981 「紗高火山赤倉火碎泥堆積物と田口泥流堆積物の¹⁴C年代」「第四紀研究」20
- 平井 達 1986 「V [3] 陥し穴」「桂平遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第110集 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 平井 達 1987 「V 2[2]円筒状陥し穴」「大堤 遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報

- 告書第119集 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 廣瀬昭弘・高橋 桂 1977 「第1群土器～第8群土器」「三牧原遺跡」本島平村教育委員会
- 廣瀬昭弘 1980 「北信濃小佐原遺跡の表裏縄文土器について」「信濃」第33巻第4号 信濃史学会
- 廣瀬昭弘 1995 「表裏縄文土器研究の現状と課題」「長野県考古学会誌」77・78号 長野県考古学会
- 藤巻正信 1991 「第IV章 遺物2C1) 8打製石斧」「城之越遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- マ麻柄一志 1994 「中部地方および東北地方日本海側の瀬戸内系石器群について」「瀬戸内技術とその時代」中・四国旧石器文化講話会
- 宮崎朝雄・金子直行 1995 「回転文様系土器群の研究—表裏縄文系、燃糸文系、室谷上層系、押型文系土器群の関係—」「日本考古学」第2号 日本考古学協会
- 宮本常一 1983 「第2部 陶穴」「霧ヶ丘」「霧ヶ丘遺跡調査団
- 妙高団体研究グループ 1969 「妙高火山の形成史と山麓の水理地質—新潟県の第四系・そのX—」「新潟大学教育学部高田分校研究紀要」Na14
- 室岡 博・早津賀二 1986 「中古遺跡」「妙高高原村教育委員会
- ヤ山崎静雄 1986 「第一章 自然的概観」「妙高高原町史」妙高高原町
- 吉岡康暢 1982 「北陸・東北の中世陶器をめぐる問題」「庄内考古学」18 庄内考古学会
- ワ鶴田弘実 1996 「中央高地における縄文早期末葉絆条体圧瓦文土器」「長野県立歴史館 研究紀要」第2号 長野県立歴史館
- 和田壽久 1994 「大堀遺跡」「新潟県埋蔵文化財調査事業団年報」平成5年度 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 和田壽久 1995 「大堀遺跡」「新潟県埋蔵文化財調査事業団年報」平成6年度 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 和田壽久 1995 「大堀遺跡」「埋文にいがた」Na12 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 和田壽久 1996 「大堀遺跡」「新潟県埋蔵文化財調査事業団年報」平成7年度 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 渡辺哲也 1994 「信濃町東裏遺跡の調査」「第6回長野県旧石器文化交流会発表要旨」

図 版

凡 例

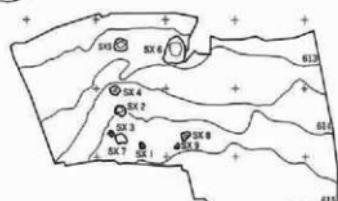
1. 造構の縮尺率は基本的に40分の1であるが、異なる場合には個別にスケールを示した。
2. 繩文土器については、左上に出土地点を示した。同一地点出土の土器が複数ある場合は、出土地点の後の（ ）内に該当する土器番号を示した。

— | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 —

A



B



C

D

E

F

G

H

I

J

K

L

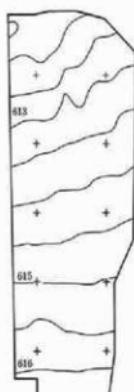
M

N

O

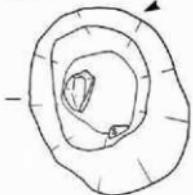
P

Q

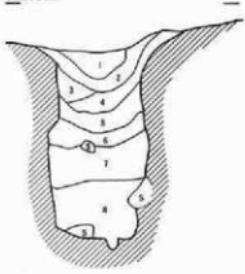


0 30m

SK 22



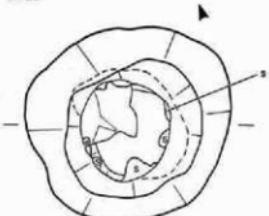
622.0m



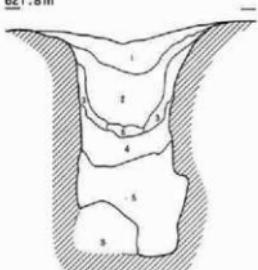
SK 22

- 1 黒褐色土に少量のローム粒が混じる。しまりあり。
- 2 黄褐色土に少量のローム粒が混じる。しまりあり。
- 3 黄褐色土。しまりに付く。ボソボソしている。
- 4 黄褐色土。しまりに付く。表面はやわらか。
- 5 黄褐色土に少量のローム粒が混じる。しまりあり。
- 6 黄褐色土。しまりに付く。ボソボソしている。
- 7 黄褐色土。しまりに付く。表面はやわらか。
- 8 黄褐色土。しまりに付く。ボソボソしている。

SK 23



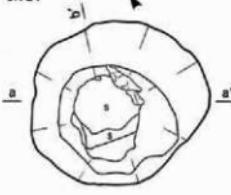
621.8m



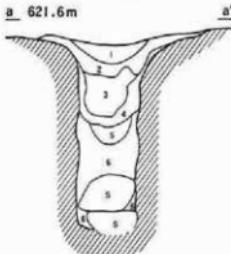
SK 23

- 1 黒褐色土に少量のローム粒が混じる。しまりあり。
- 2 黄褐色土。しまりに付く。表面はやわらか。
- 3 黄褐色土。しまりに付く。表面はやわらか。
- 4 黄褐色土。しまりに付く。表面はやわらか。
- 5 黄褐色土。しまりに付く。表面はやわらか。

SK 24



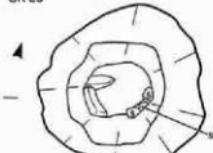
621.6m



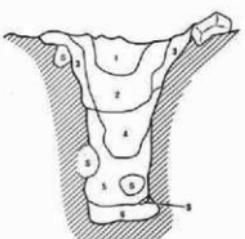
b_ 621.6m

b'

SK 25



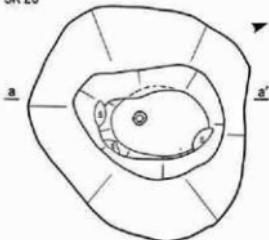
621.9m



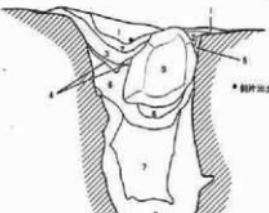
SK 25

- 1 黄褐色土上にローム粒が混じる。しまりあり。
- 2 黄褐色土にローム粒が少く少量混じる。しまりあり。
- 3 黄褐色土。しまりに付く。ボソボソしている。
- 4 黄褐色土。しまりに付く。ボソボソしている。
- 5 黄褐色土と同質か。黄褐色土が混じる。

SK 26



a_ 621.3m

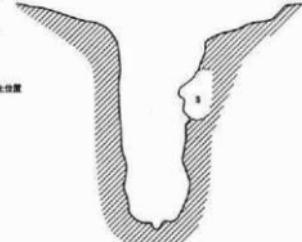


SK 26

- 1 黄褐色土上に少量のローム粒が混じる。しまりあり。
- 2 黄褐色土。しまりに付く。表面はやわらか。
- 3 黄褐色土。しまりに付く。表面はやわらか。
- 4 黄褐色土。しまりに付く。表面はやわらか。
- 5 黄褐色土。しまりに付く。表面はやわらか。
- 6 黄褐色土に少量のローム粒が混じる。しまりあり。
- 7 黄褐色土にローム粒が多量に混じる。しまりあり。
- 8 黄褐色土にローム粒が多量に混じる。しまりあり。

a' _ 621.3m

b_ 621.3m

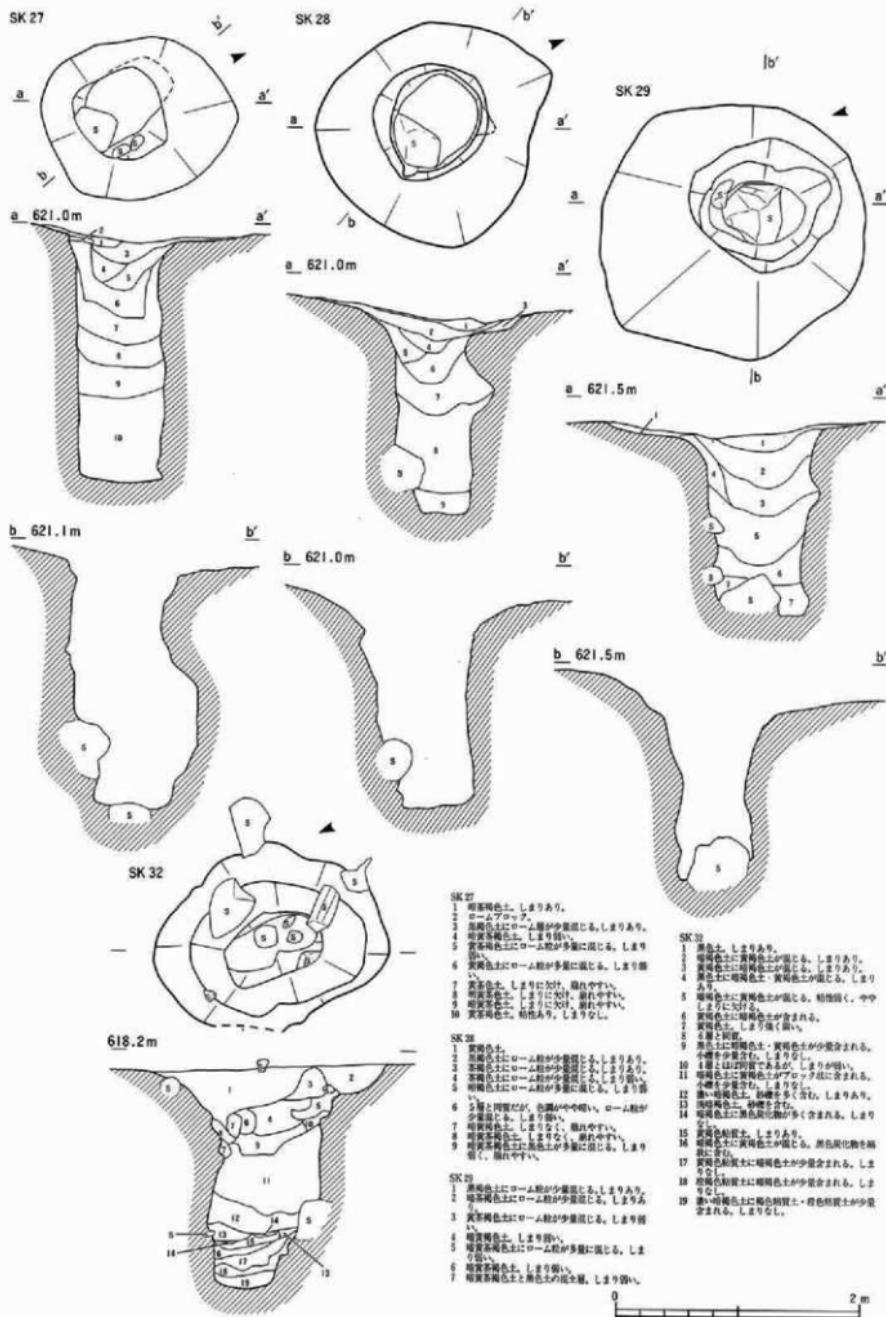


b'

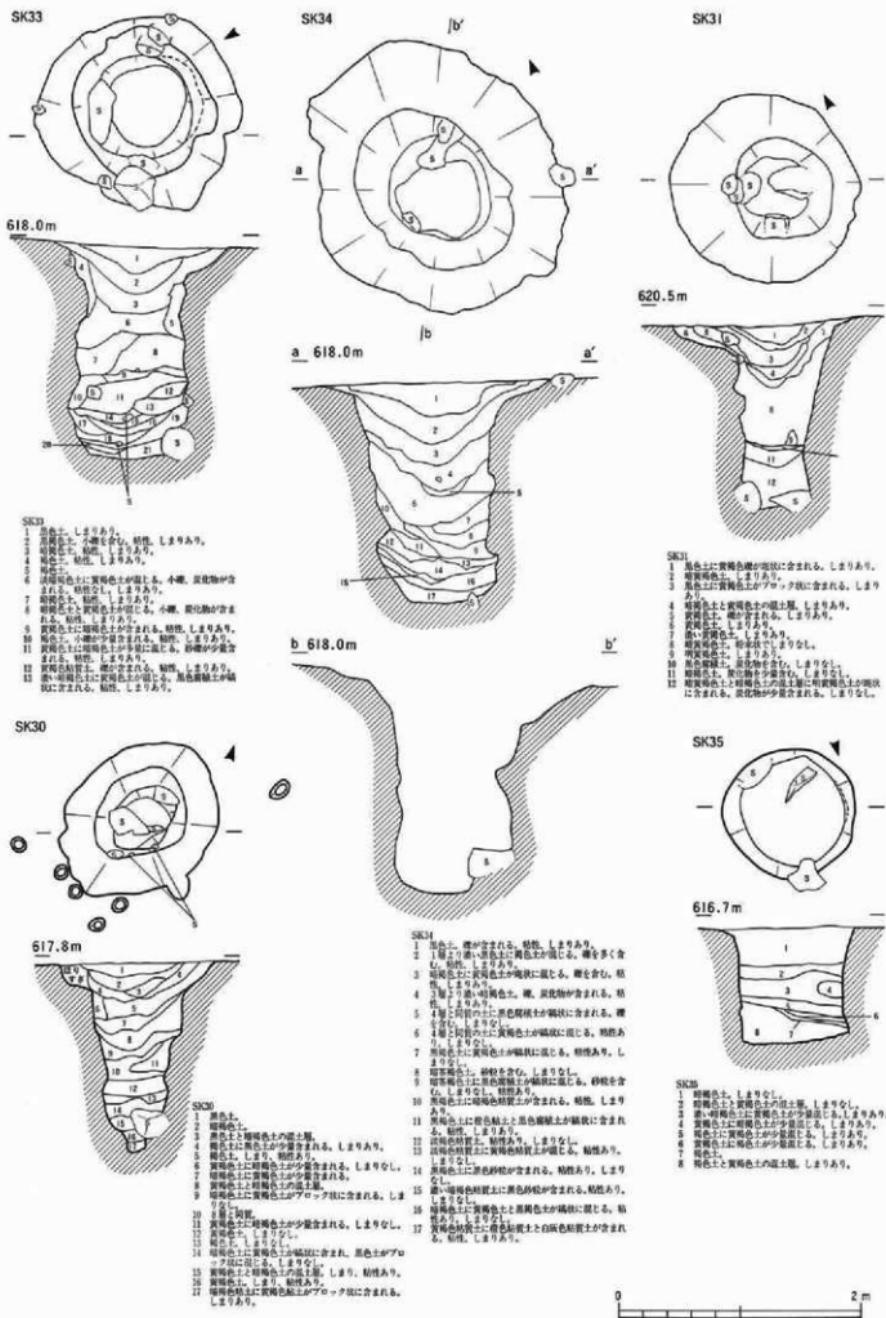
SK 26

- 1 黄褐色土にローム粒が少量混じる。しまりあり。
- 2 黄褐色土にローム粒が少量混じる。しまりあり。
- 3 黄褐色土と黄褐色土の底土間にローム粒が多量に混じる。しまりあり。
- 4 黄褐色土にローム粒が多量に混じる。しまりあり。
- 5 黄褐色土にローム粒が多量に混じる。しまりあり。
- 6 黄褐色土にローム粒が多量に混じる。しまりあり。
- 7 黄褐色土にローム粒が多量に混じる。しまりあり。
- 8 黄褐色土にローム粒が多量に混じる。しまりあり。

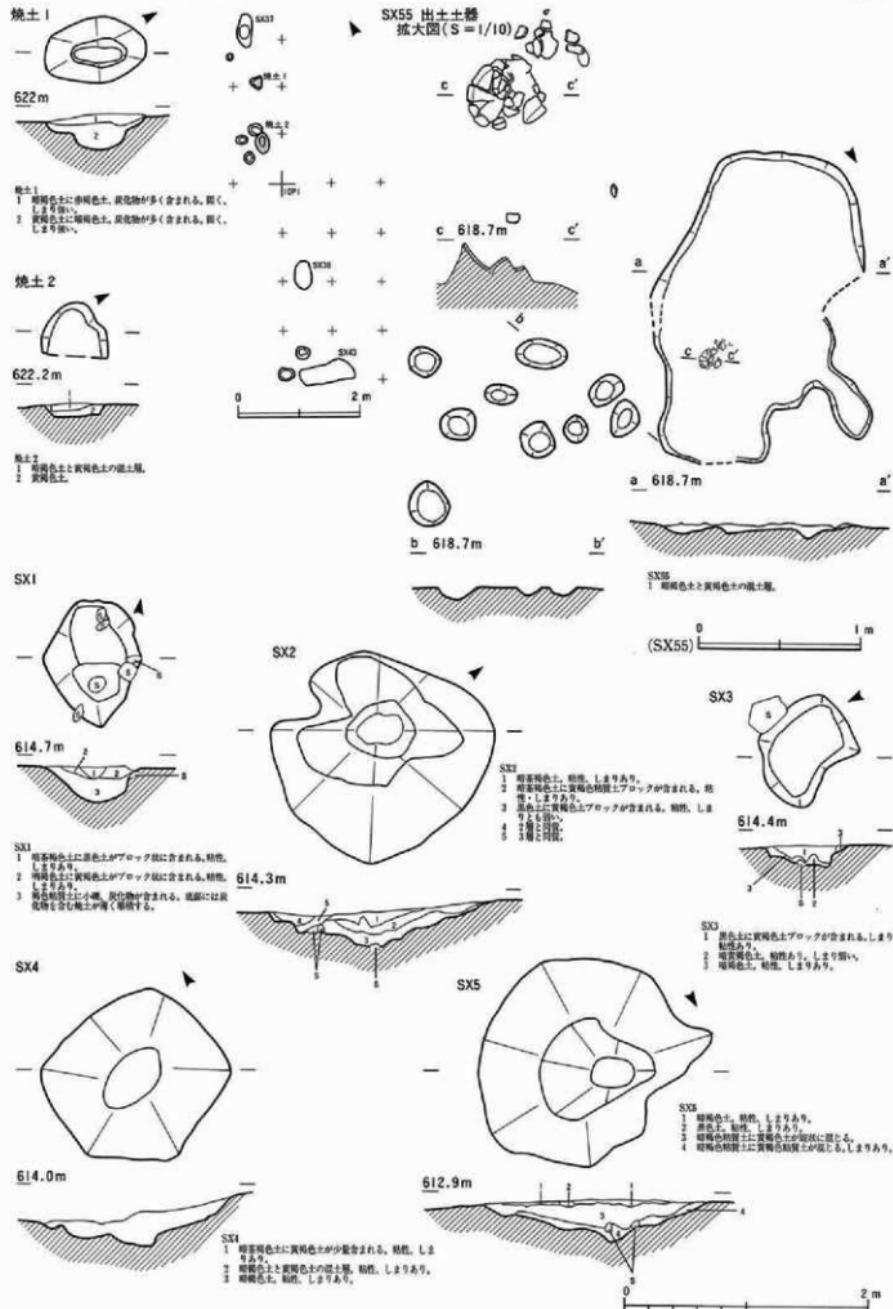




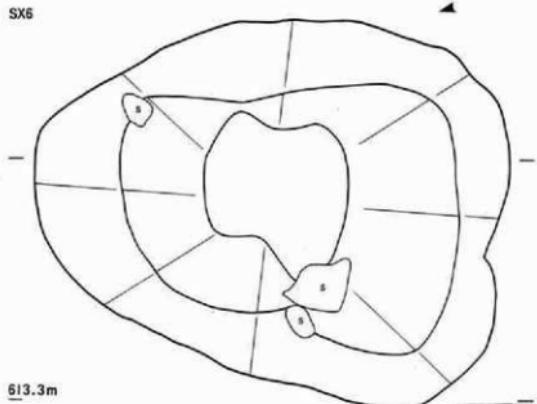
図版4



焼土・その他の遺構(1)



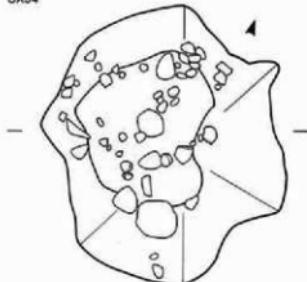
SX6



SX6

- 1 黄色砂質土(赤褐色砂岩隙部)に黄褐色土ブロックが混じる。しまりあり。
- 2 黄褐色土に黄褐色土が少しあまる。しまりあり。
- 3 黄褐色土に黄褐色土が混じる。しまりあり。
- 4 黄褐色土に黄褐色土が多量に含まれる。粘性。しまりあり。

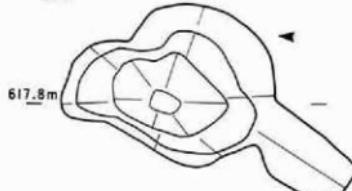
SX54



SX54

- 1 黄褐色土に黄褐色土ブロックが混じる。しまりあり。塊に塊が大量に含まれる。

SX55



SX56

- 1 粘褐色土に黄褐色土ブロックが混じる。

SX57



SX57

- 1 黄色土。黄褐色土塊が多量に含まれる。しまりあり。
- 2 黄褐色土。しまりあり。
- 3 黄褐色土。しまりあり。

SK11



SK11

- 1 黄褐色土。
- 2 黄褐色土。
- 3 黄褐色土。表面の小塊が含まれる。
- 4 3層よりやや薄い黄色土。表面の小塊が含まれる。

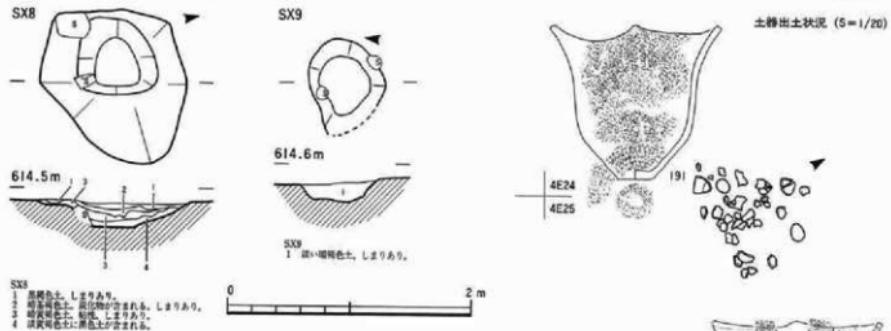
Pit5

- 1 黄色土。しまり弱い。
- 2 黄褐色土。しまりあり。
- 3 黄褐色土。しまり弱い。

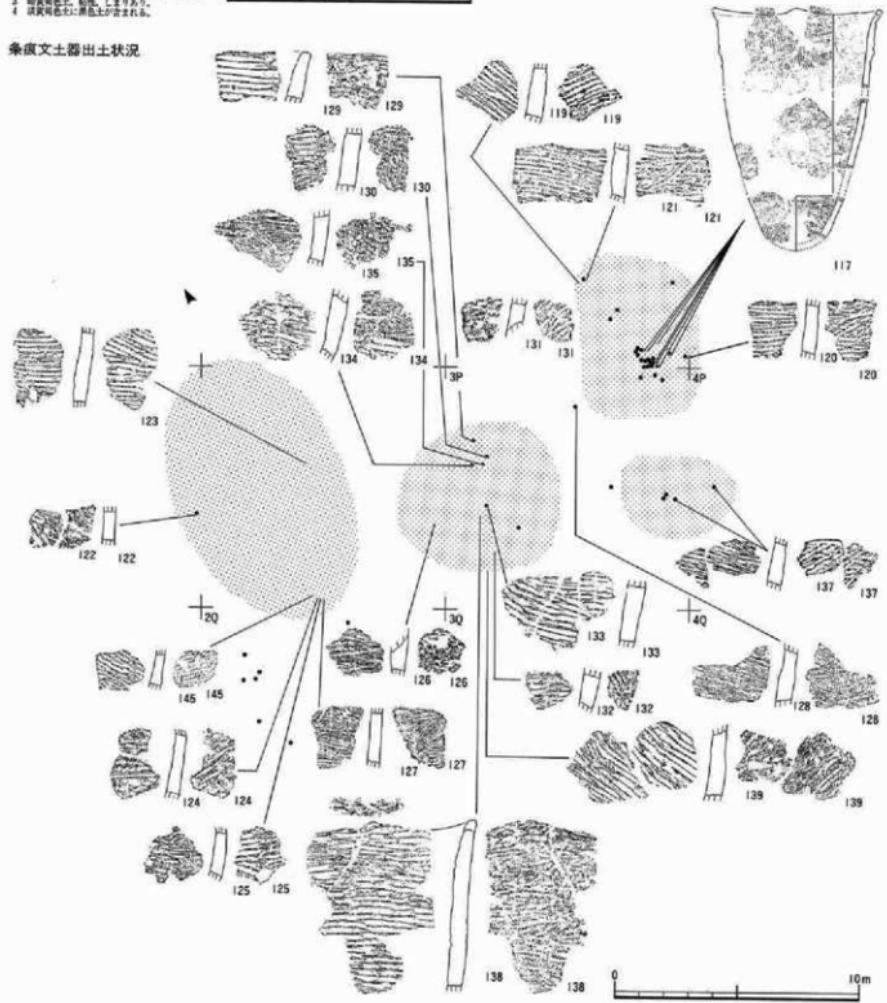


その他の遺構(3)・縄文土器出土状況図

図版 7

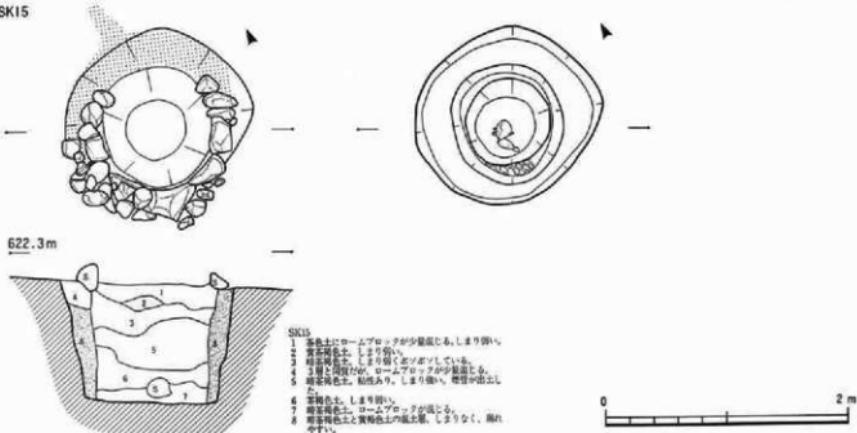


条痕文土器出土状況

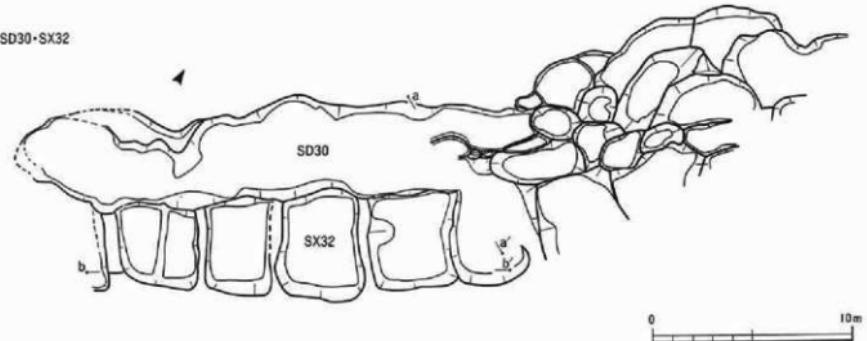


図版 8

SK15



SD30・SX32



SX32

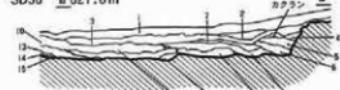


SX32

b 621.0m カクラン カクラン

1 黄褐色土。しまり弱い。
2 黄褐色土と白色土の風化土層。しまり弱く。
3 黄褐色土と白色土の風化土層。しまり弱く。
4 黄褐色土と白色土の風化土層。しまり弱く。
5 黄褐色土と白色土の風化土層。ロームブロックが多く混じる。しまり弱く。
6 黄褐色土と白色土の風化土層。しまり弱く。
7 黄褐色土と白色土の風化土層。しまり弱く。
8 黄褐色土とロームブロック。黄褐色土ブロックが多量に入り込む。しまり弱く。
9 黄褐色土とロームが多量に入り込む。一箇所黄色色を呈する。
10 黄褐色土。しまり弱く。3箇所よりさらにロームが混じる。しまり弱く。
11 黄褐色土と白色土の風化土層。ロームが少量混じる。
12 黄褐色土とロームが多量に入り込む。しまり弱く。
13 黄褐色土と白色土の風化土層。ロームが多量に入り込む。しまり弱く。
14 黄褐色土と白色土の風化土層。ロームが多量に入り込む。子孫大きさ(ボリューム)が大きい。
15 黄褐色土と白色土の風化土層。ロームが多量に入り込む。しまり弱く。

SD30_a 621.0m



SX33

SX33

1 黄褐色土。しまり弱い。
2 黄褐色土にロームが少量混じる。しまり弱い。
3 黄褐色土と白色土の風化土層にロームが多量に入り込む。
4 黄褐色土に少量のロームブロックが混じる。しまり弱く。
5 3箇所よりしまりは弱いが、崩れやすい。
6 黄褐色土と白色土の風化土層。しまり弱く。崩れやすい。
7 黄褐色土と白色土の風化土層。しまり弱く。崩れやすい。
8 黄褐色土と白色土の風化土層にロームブロックが多量に入り込む。
9 黄褐色土に太粒のロームブロックが混じる。しまりは弱く。
10 黄褐色土と白色土の風化土層にロームブロックが多量に入り込む。ボリュームが大きい。

SK11(1~6)



SX1

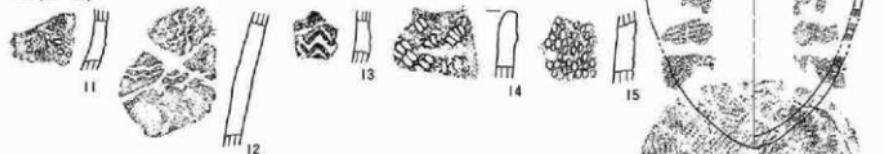
SX2

SX6(9·10)

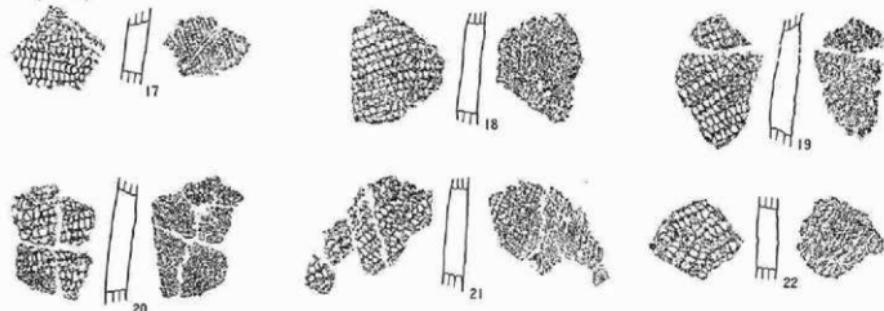
SX55



SK8(11~15)



3D5(17~22)



3D25



9G20(24·25)

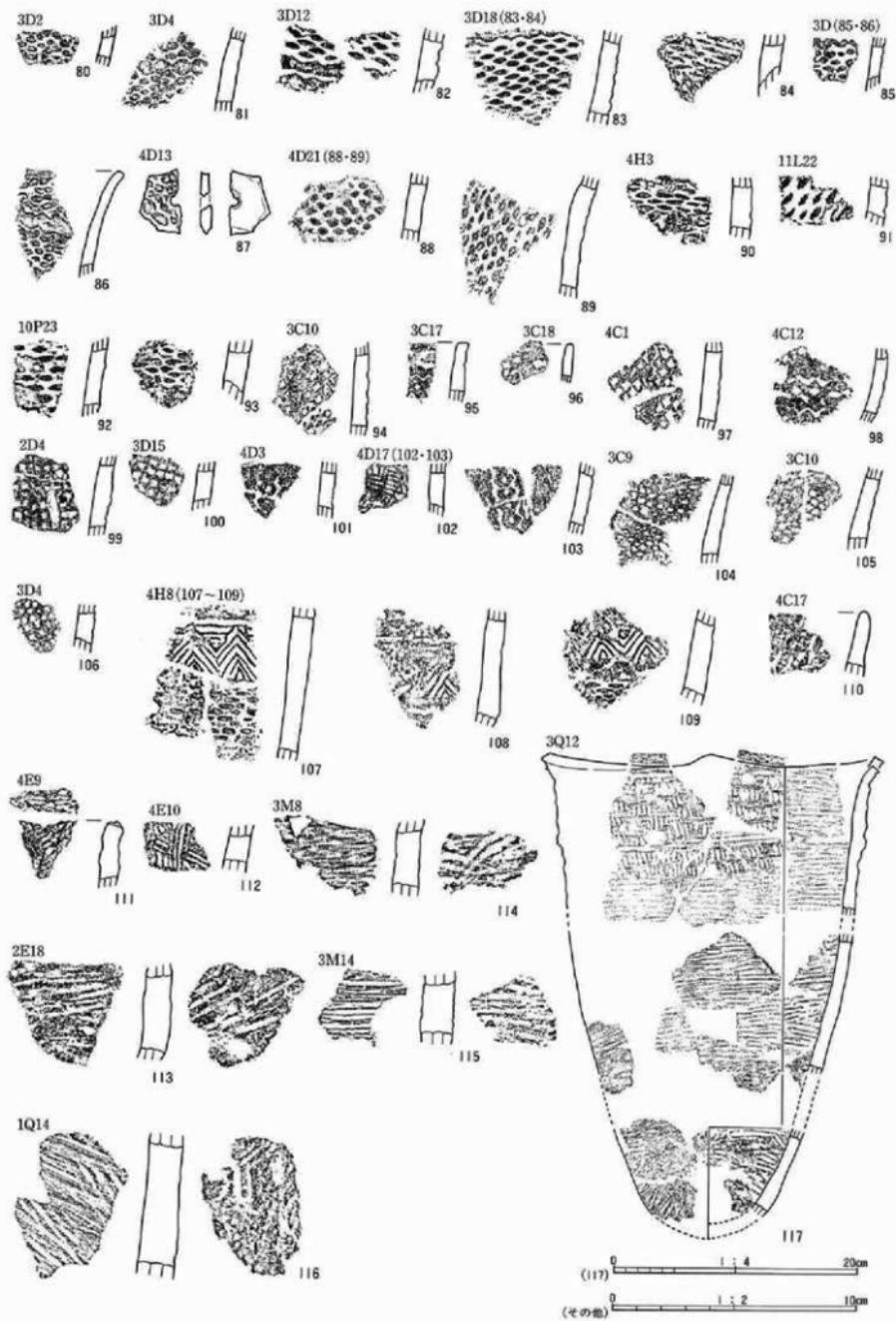


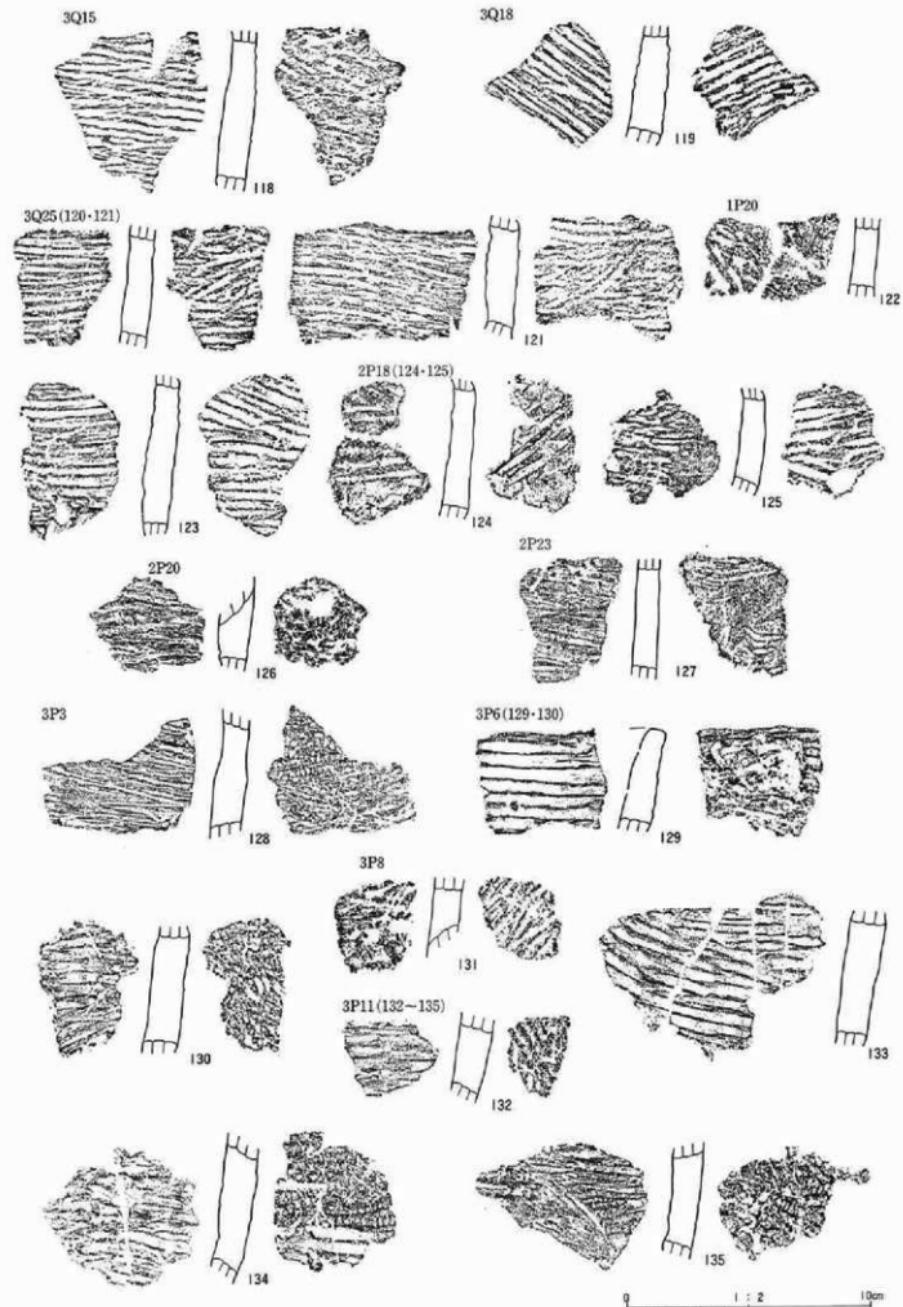
2K5(27·28)

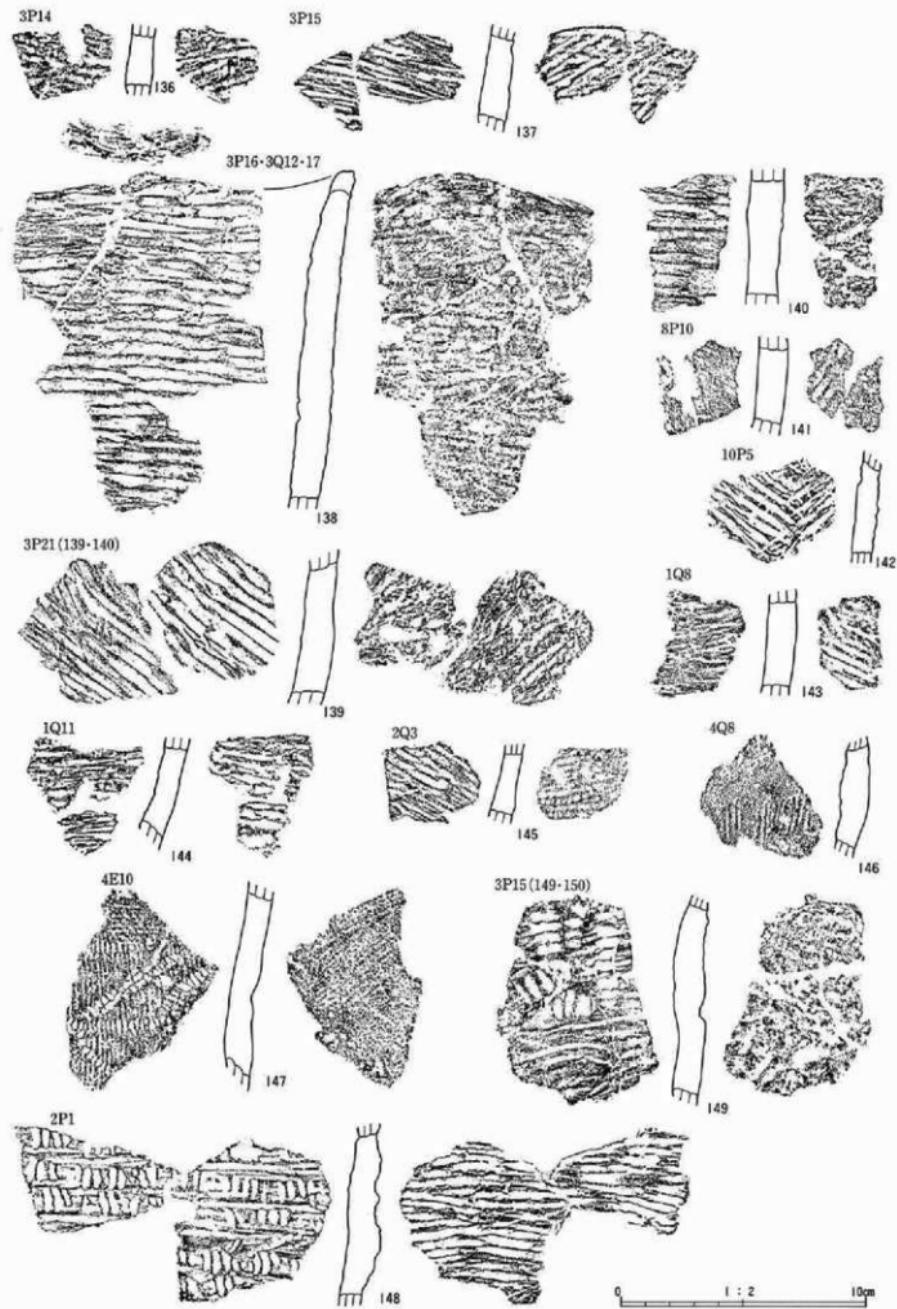


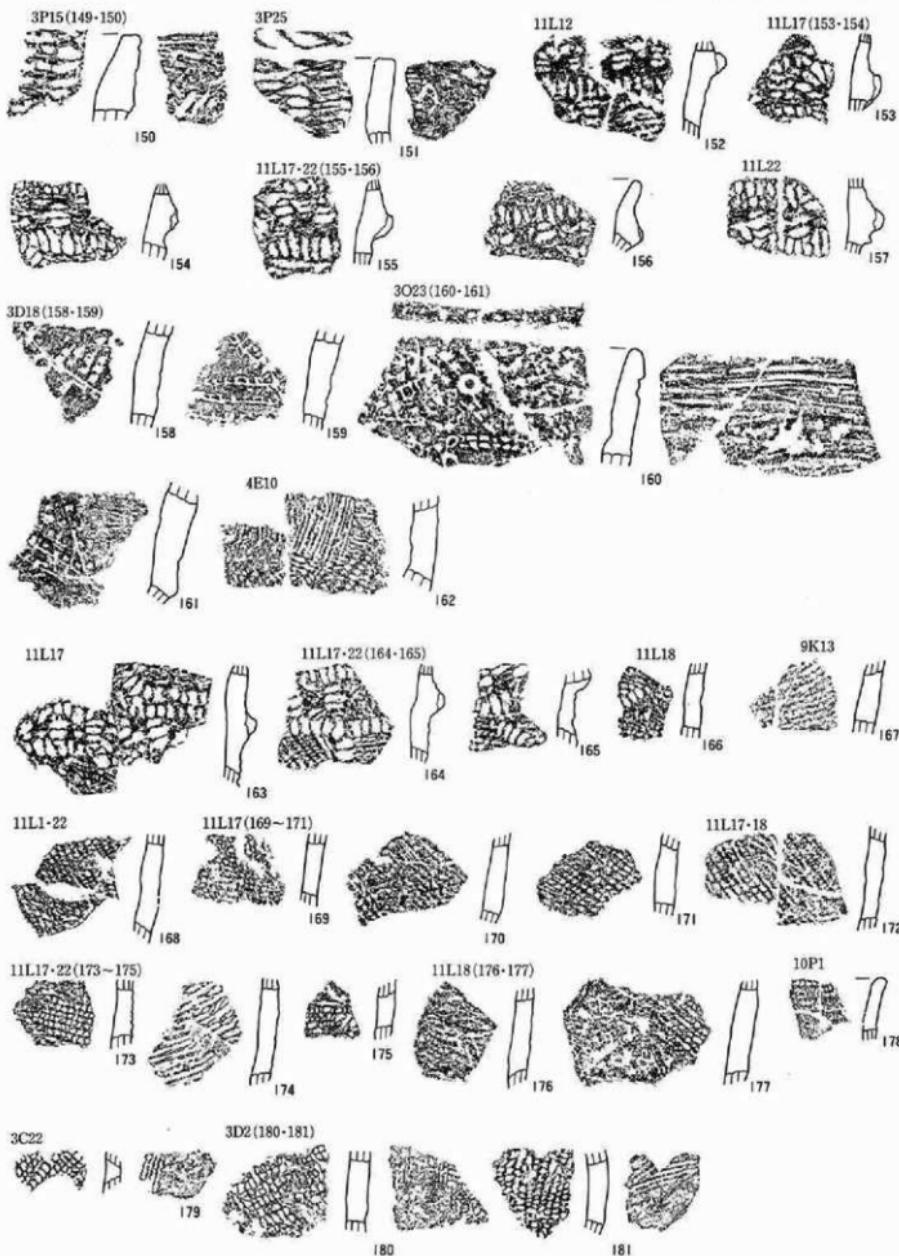
3C16(31-32)

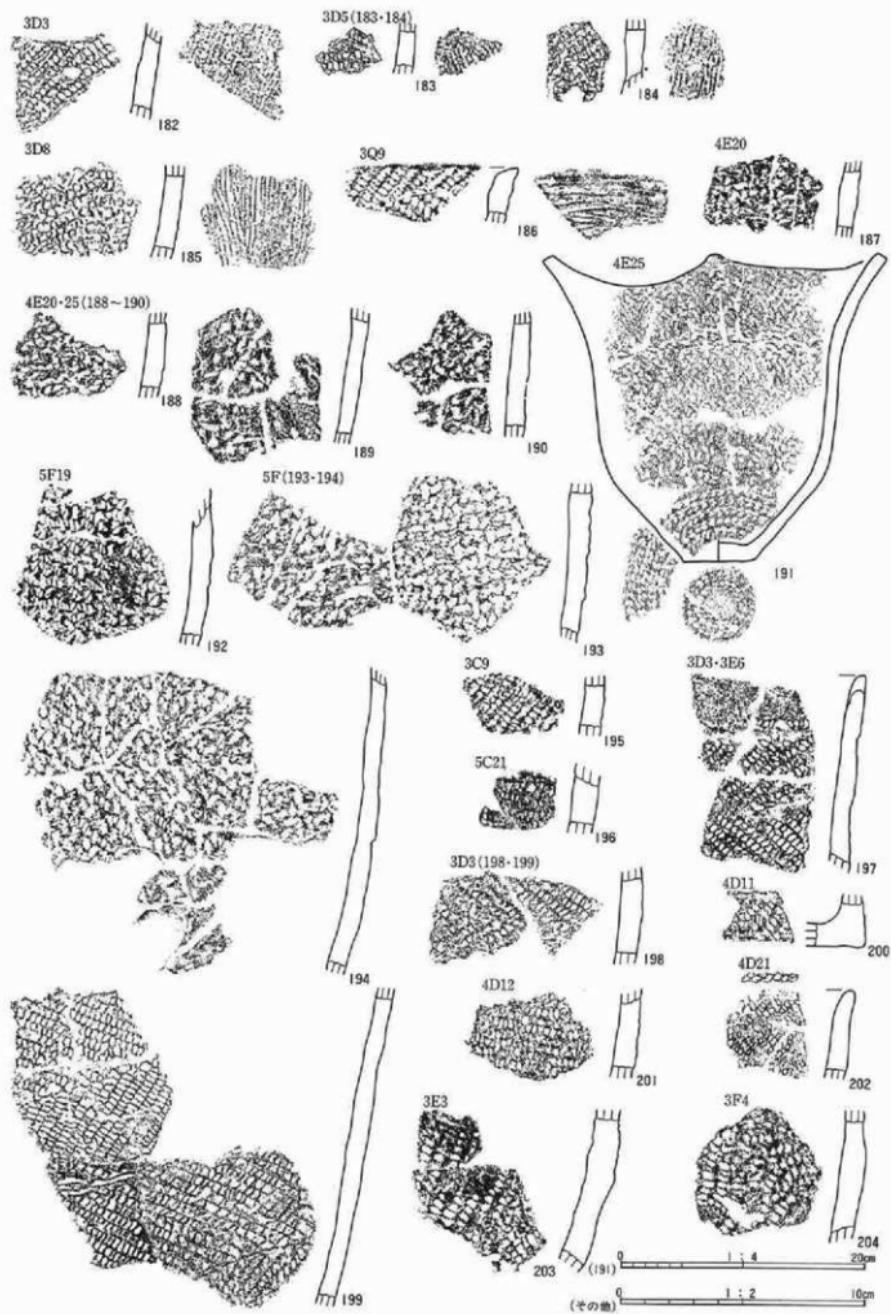


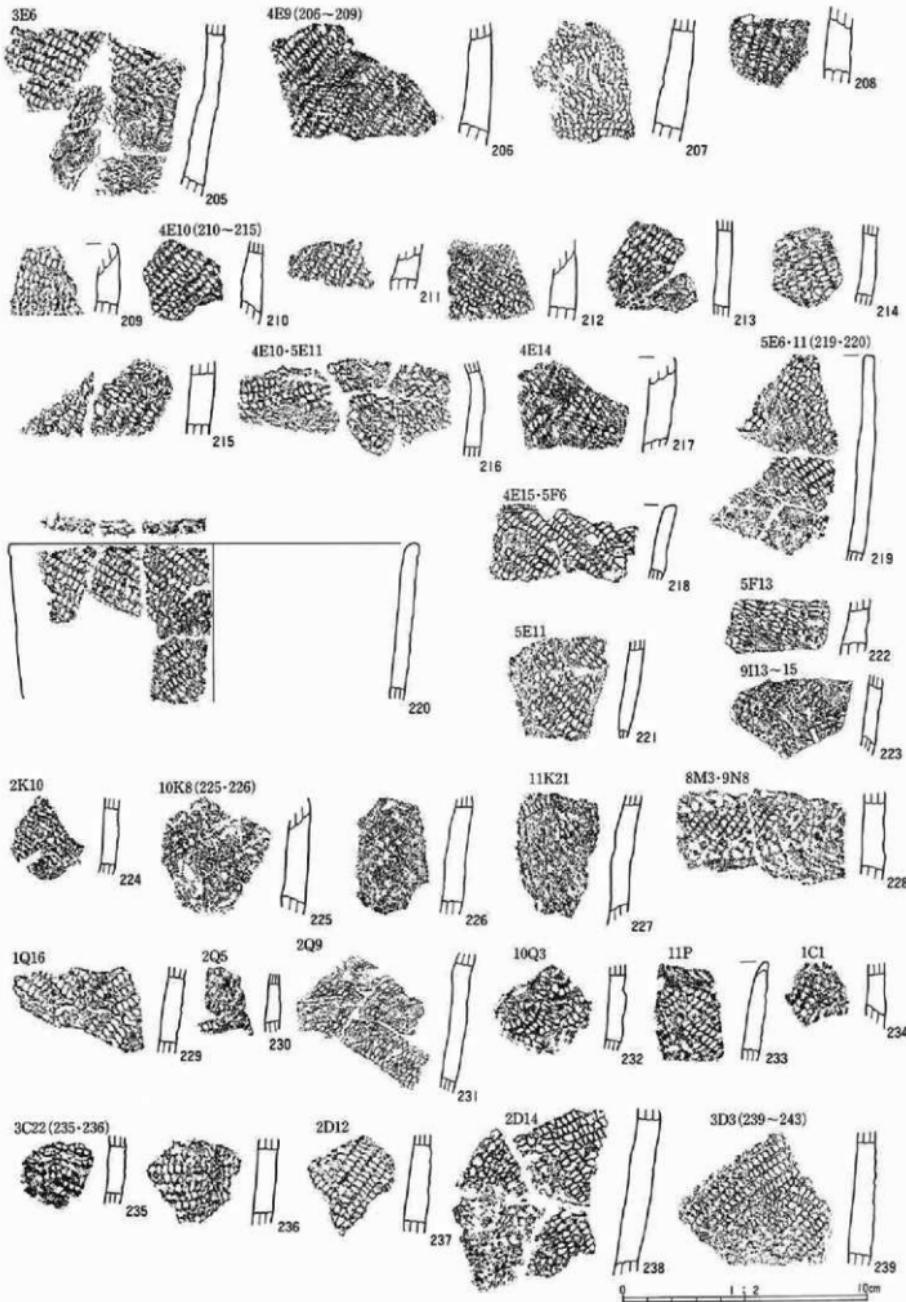


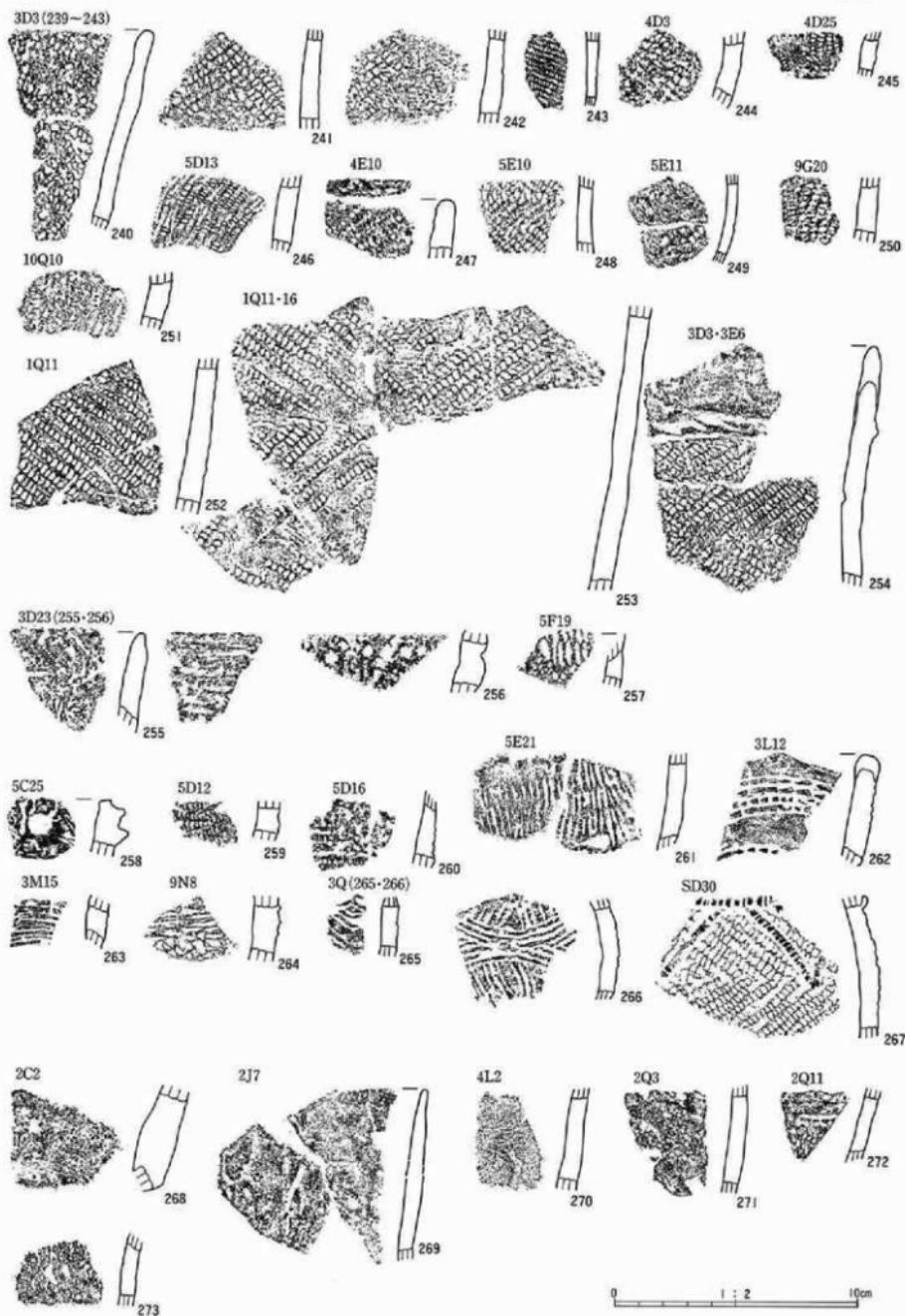






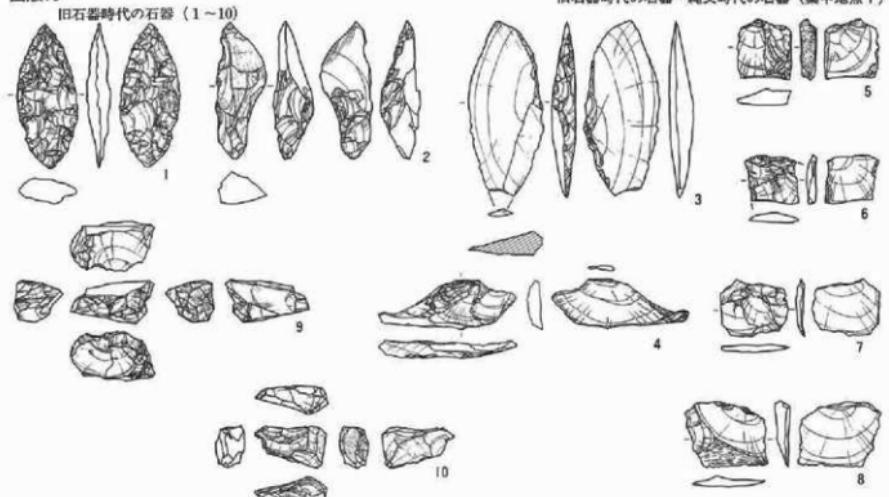




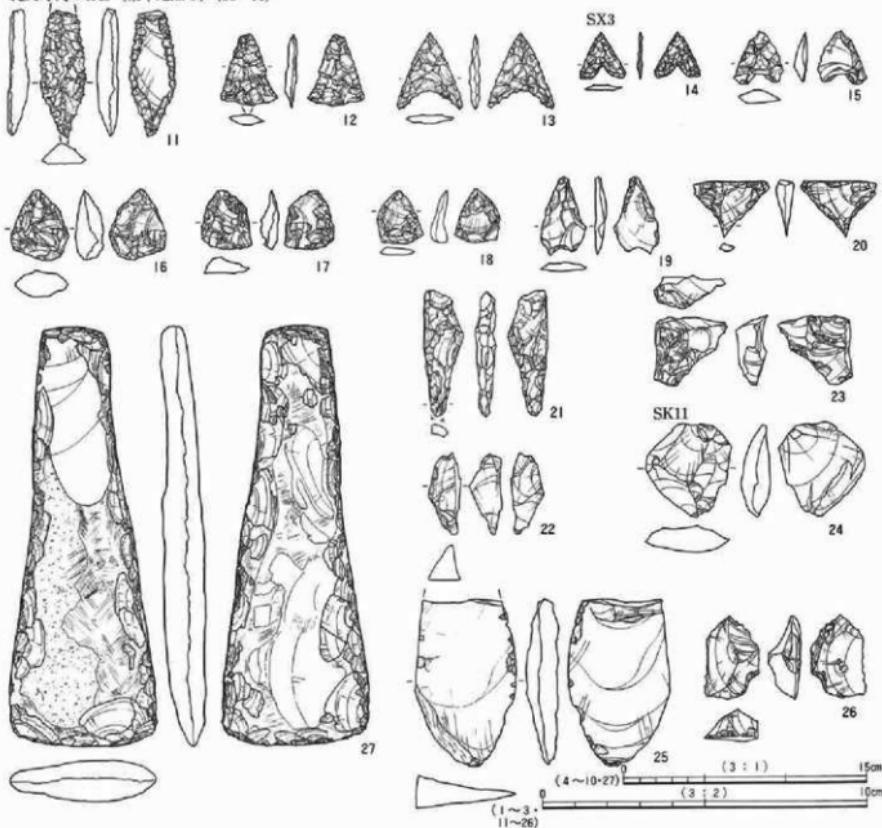


0 1 : 2 10cm

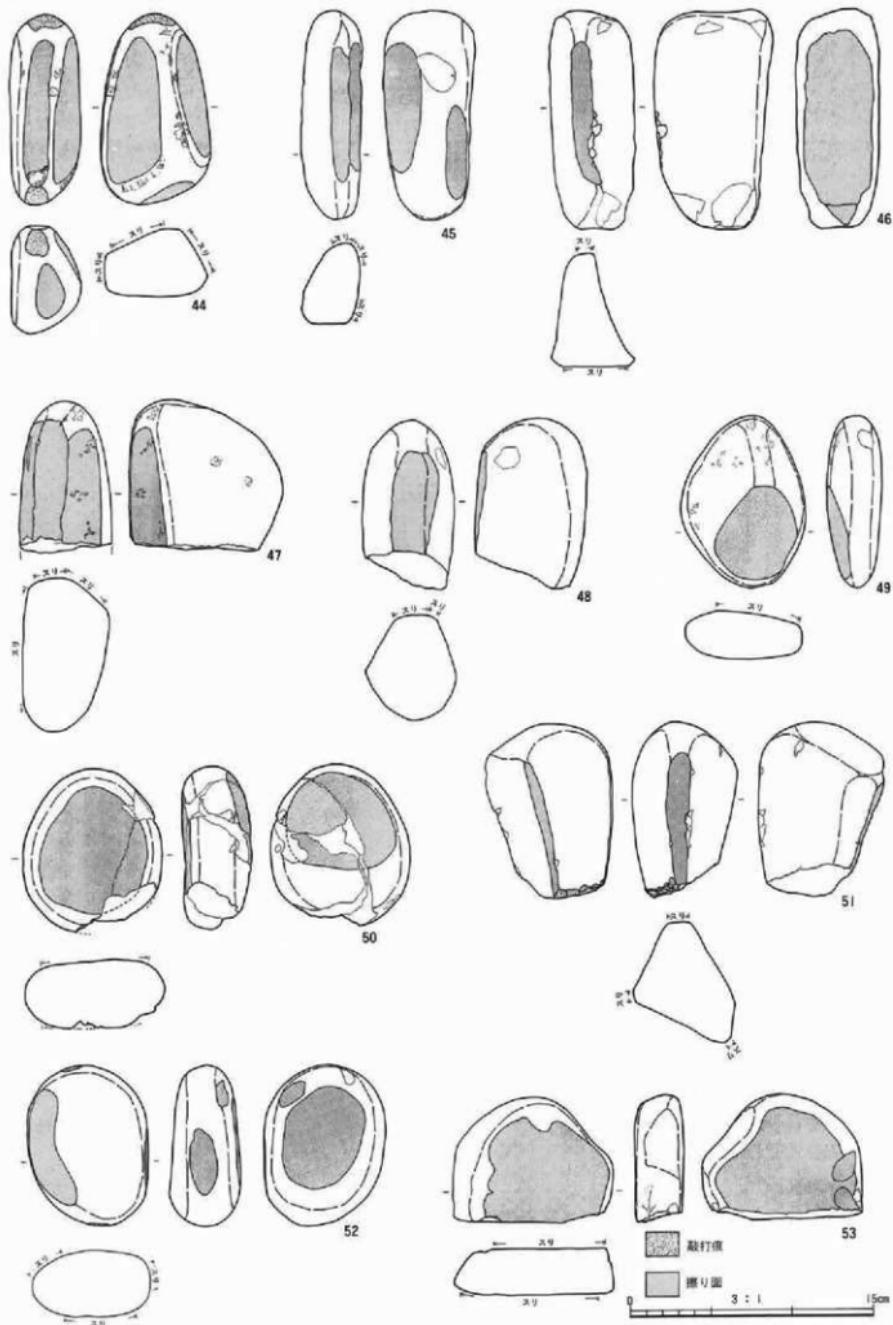
図版18



縄文時代の石器（集中地点1）（11~55）

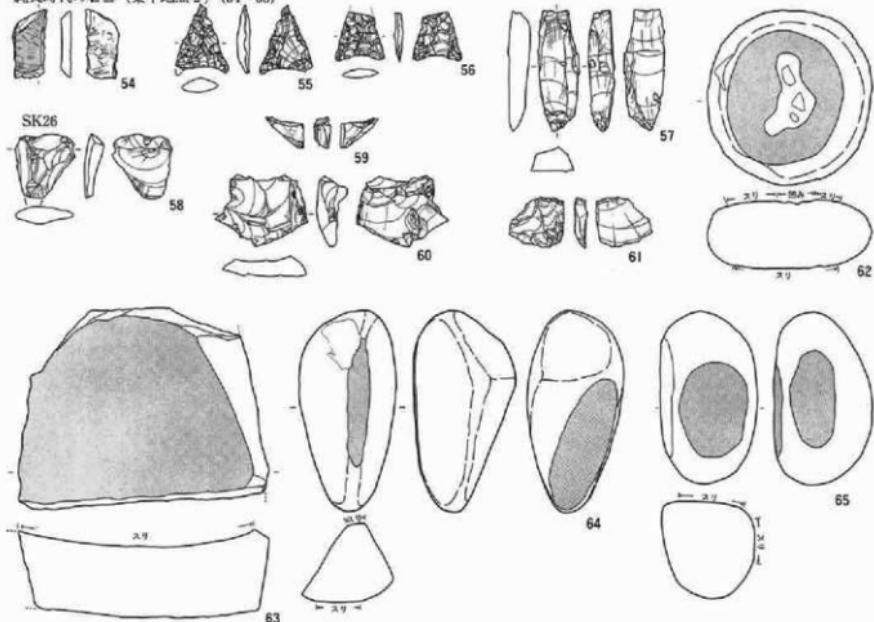




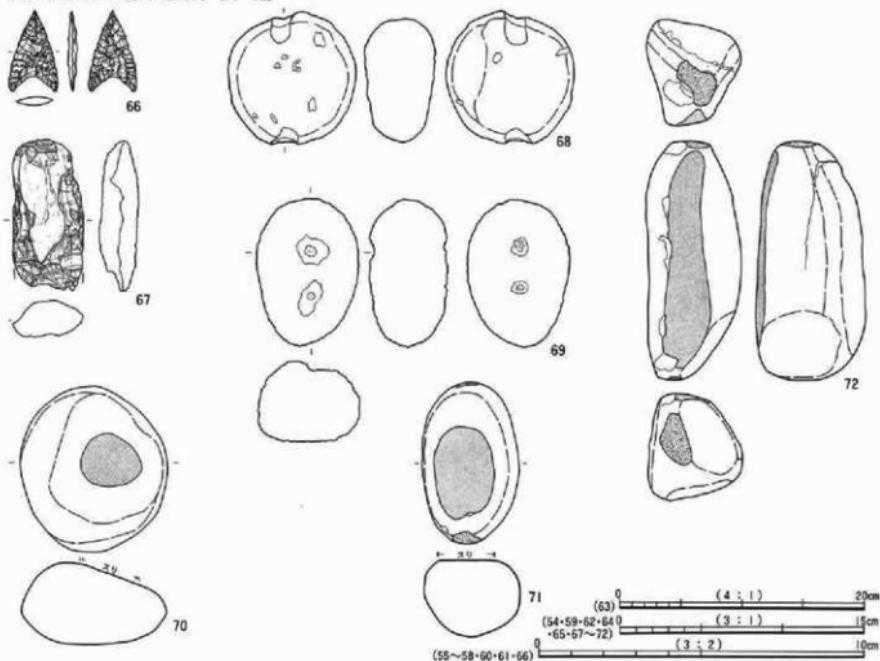


縄文時代の石器（集中地点2・3）
縄文時代の石器（集中地点2）（54～65）

図版21

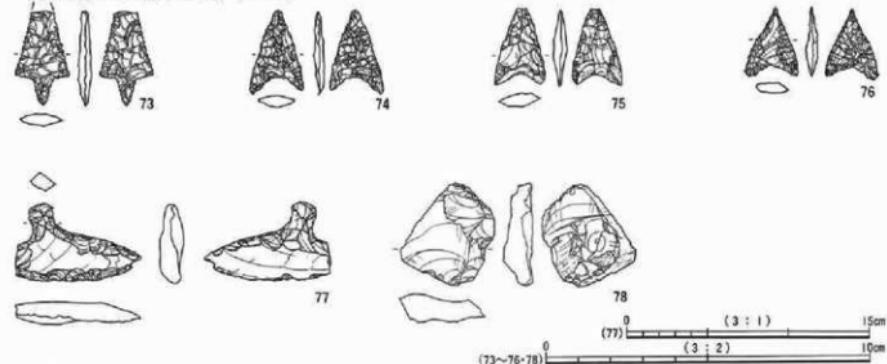


縄文時代の石器（集中地点3）（66～72）

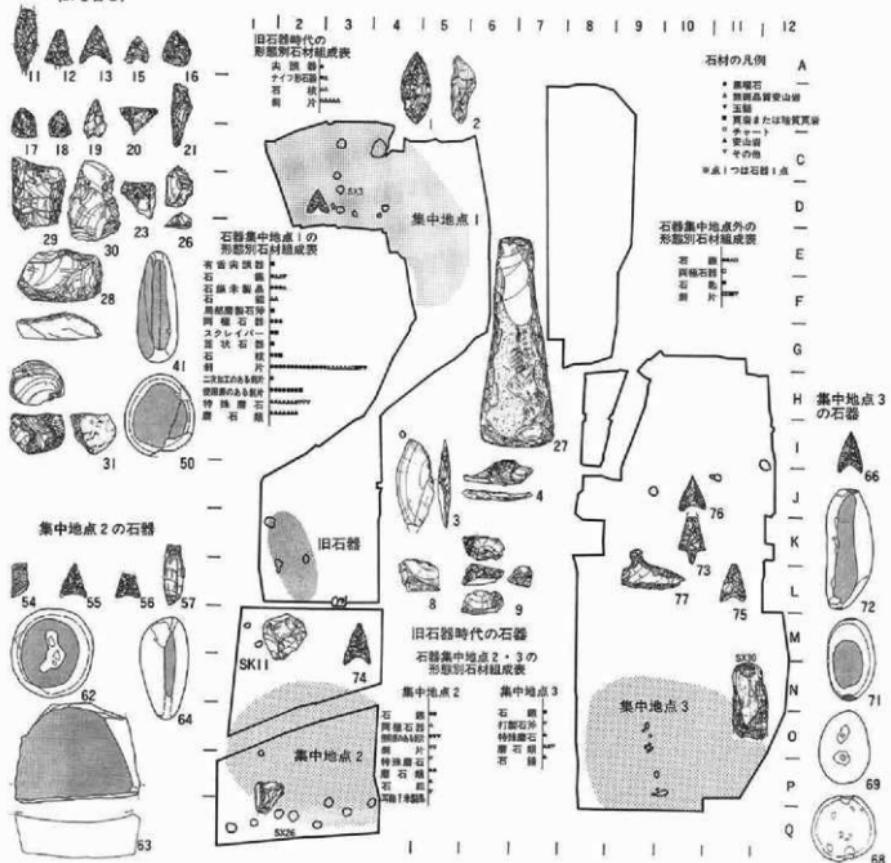


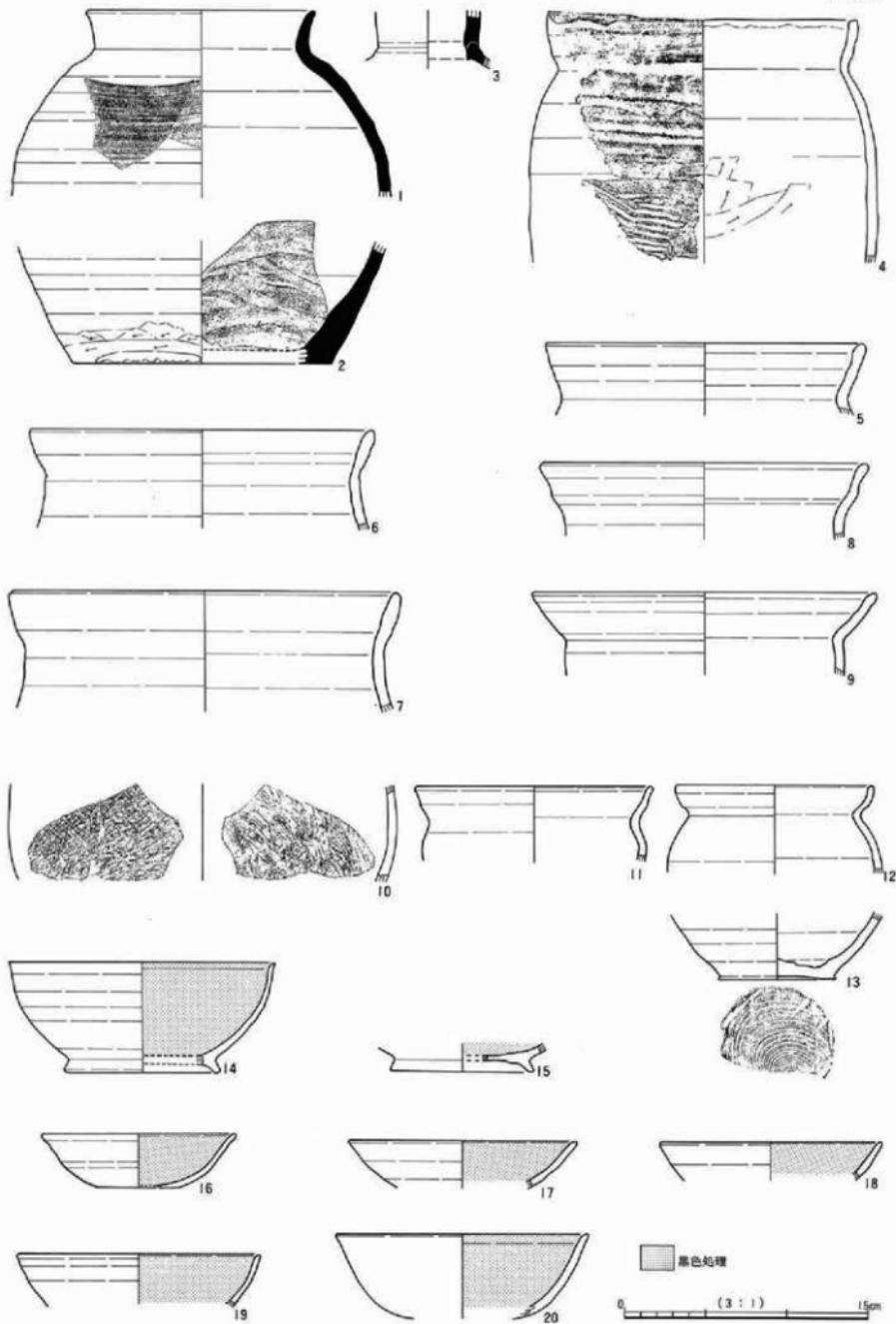
図版22

縄文時代の石器（集中地点外）(73~78)



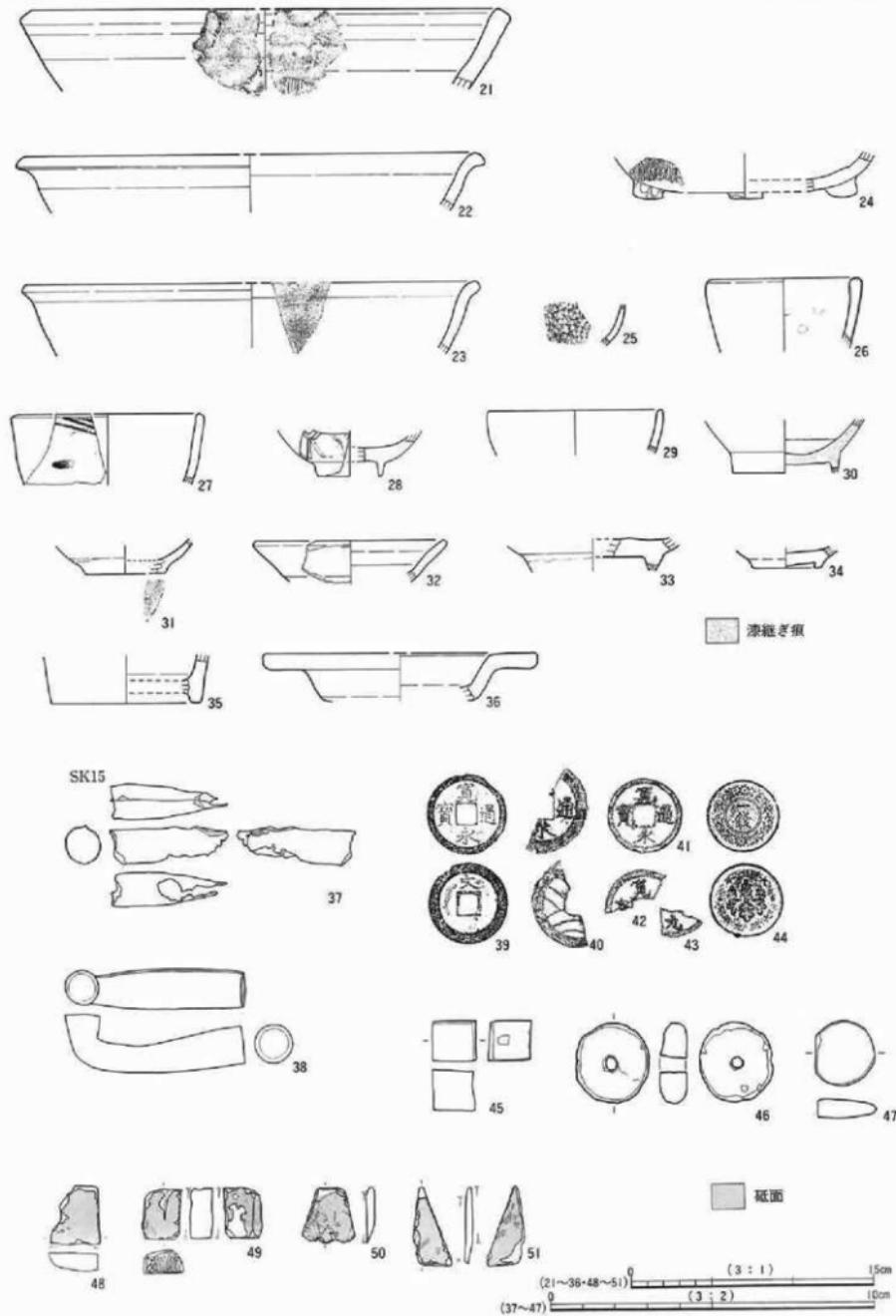
石器出土状況概観図

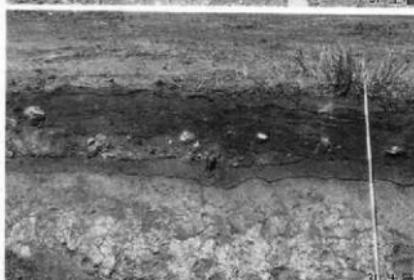
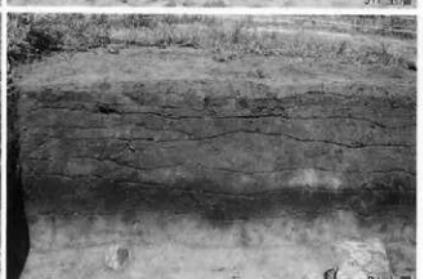
集中地点1の石器
(27を含む)



■ 単色處理

0 (3 : 1) 15cm





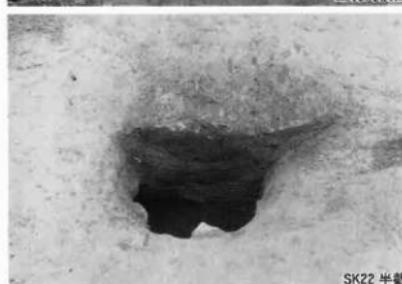
圖版26



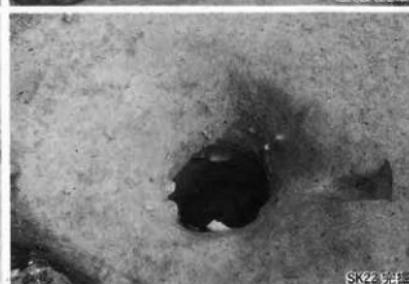
Q 列陷穴狀
土坑發掘出



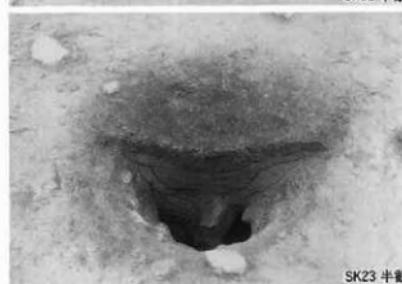
Q 列陷穴狀
土坑發掘出



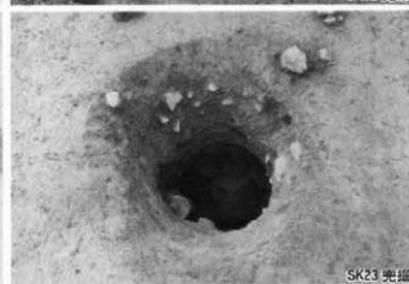
SK22 半截



SK23 完整



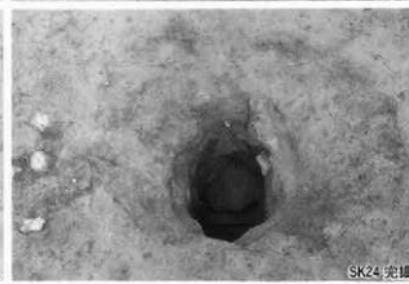
SK23 半截



SK23 完整



SK24 半截



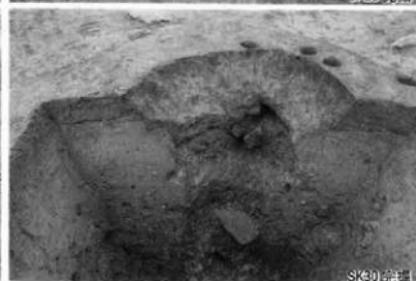
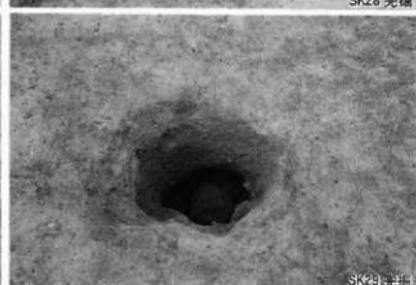
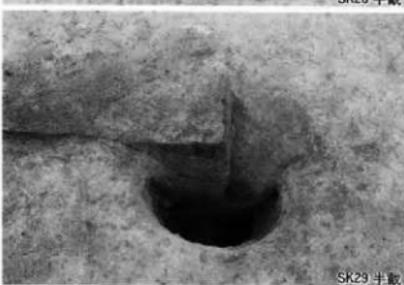
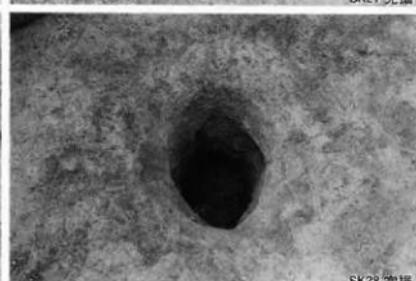
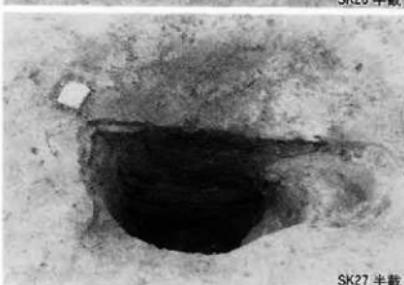
SK24 完整



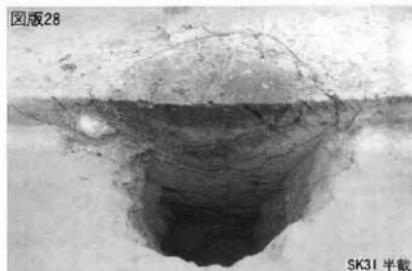
SK25 半截



SK25 完整



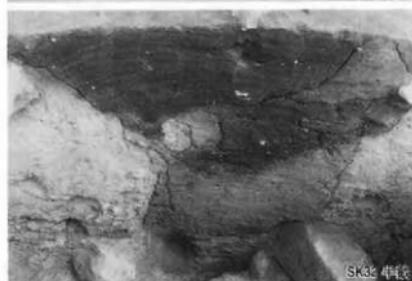
图版28



SK31 半掘



SK31 完掘



SK32 半掘



SK32 完掘



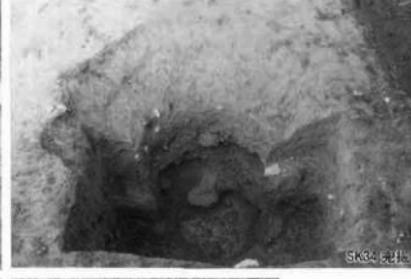
SK33 半掘



SK33 完掘



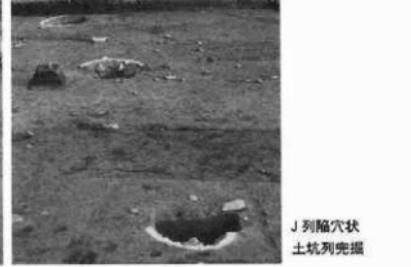
SK34 半掘



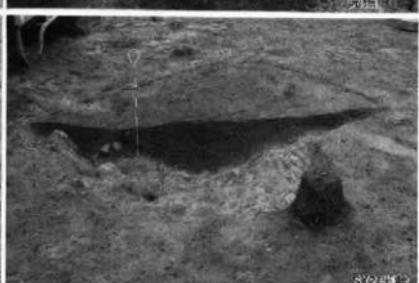
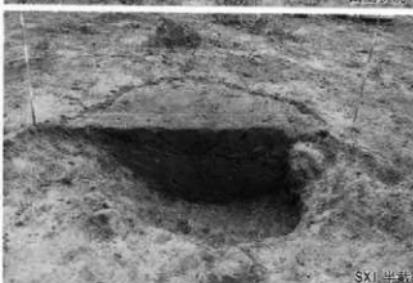
SK34 完掘

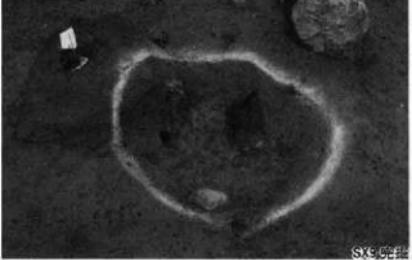
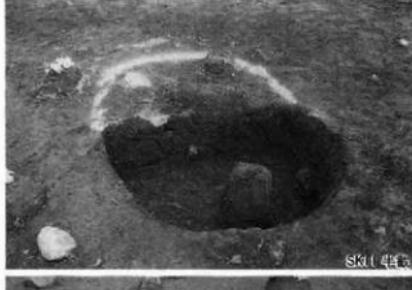
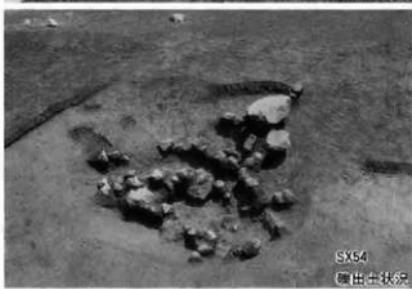


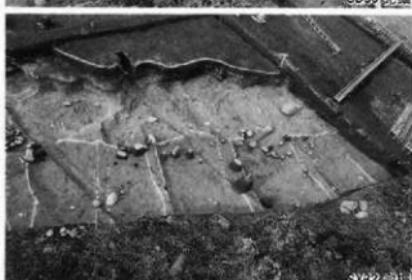
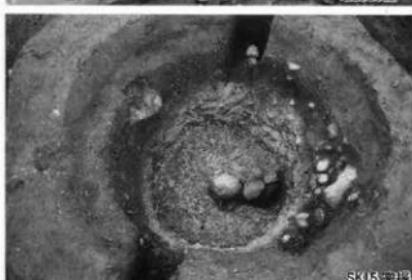
SK35 完掘

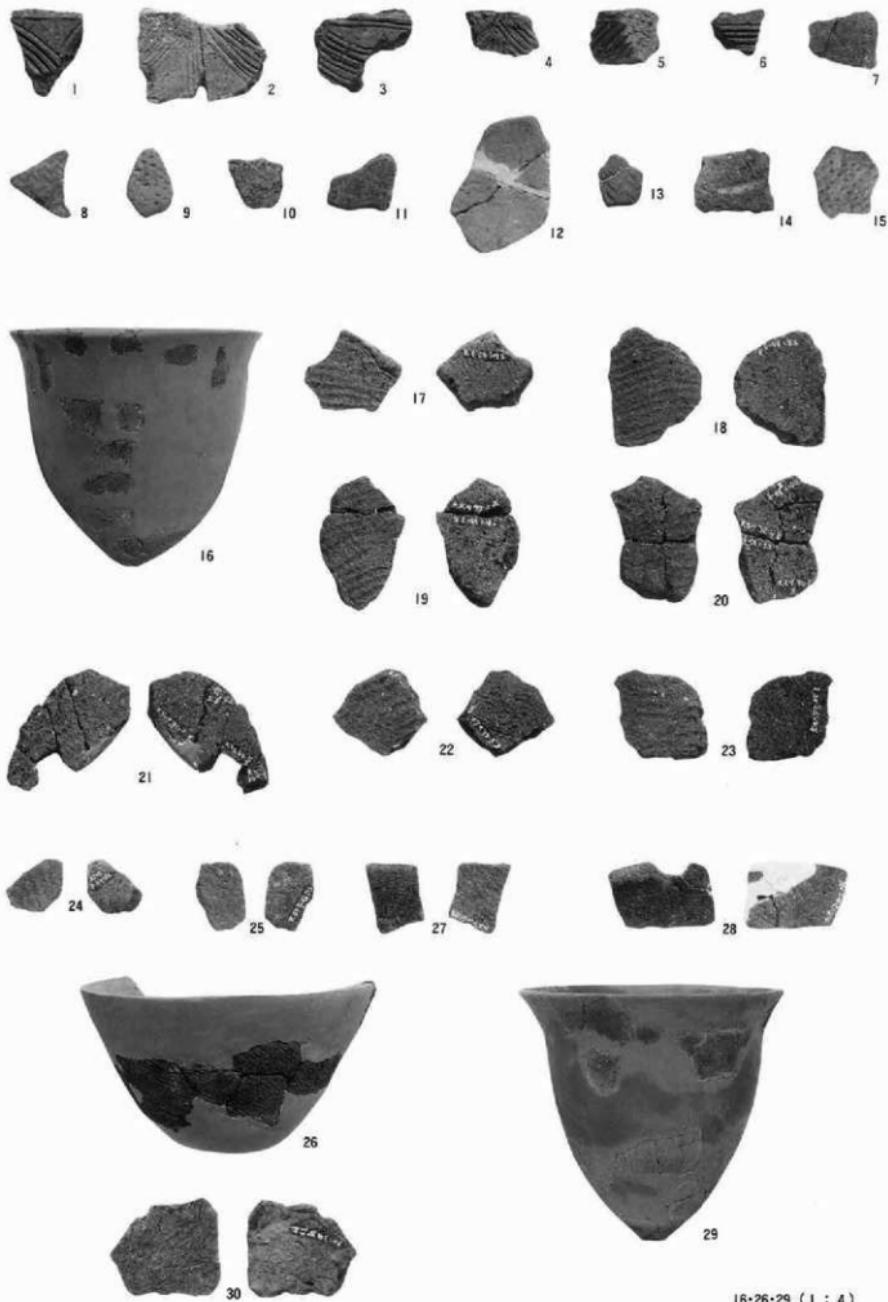


J 列陷穴状
土坑列完掘

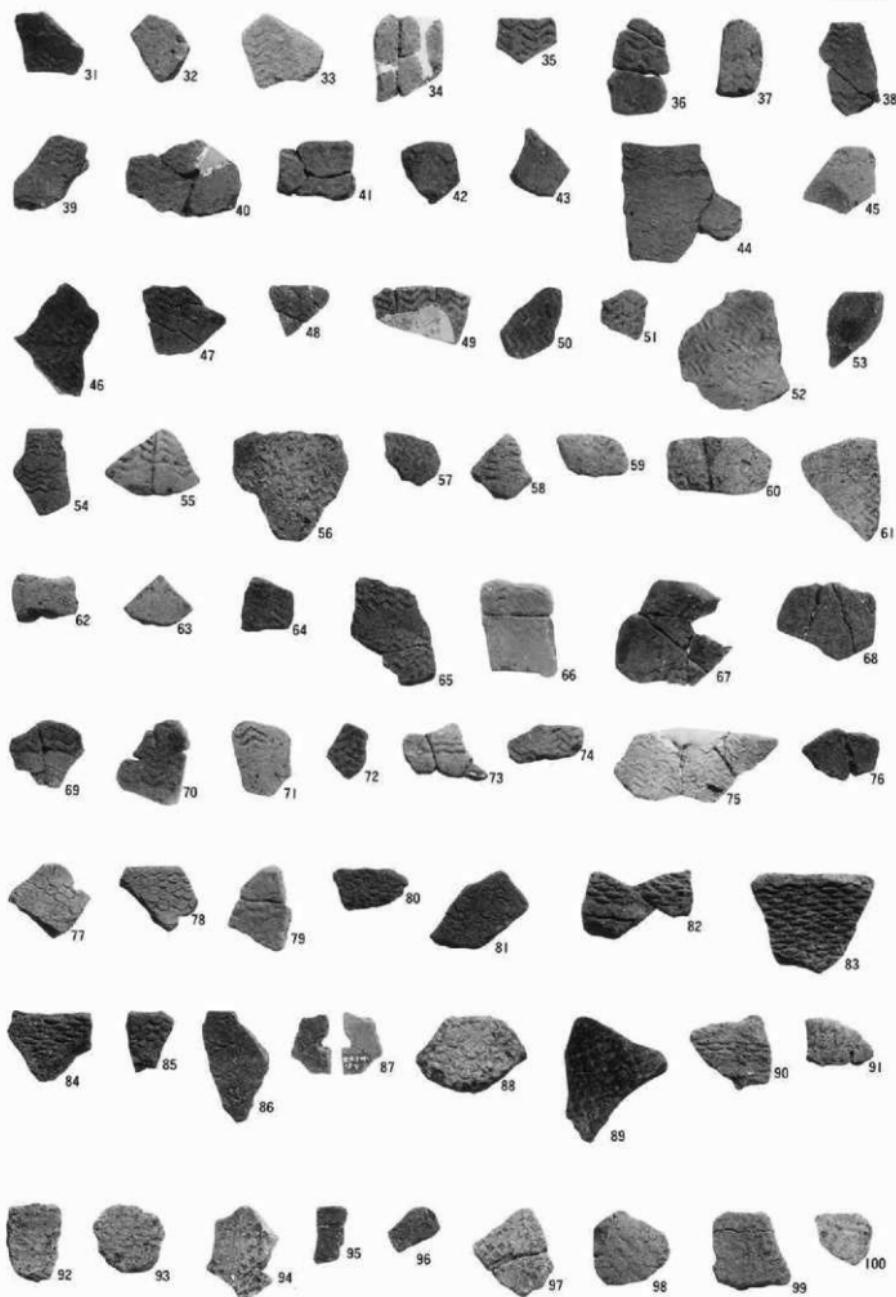




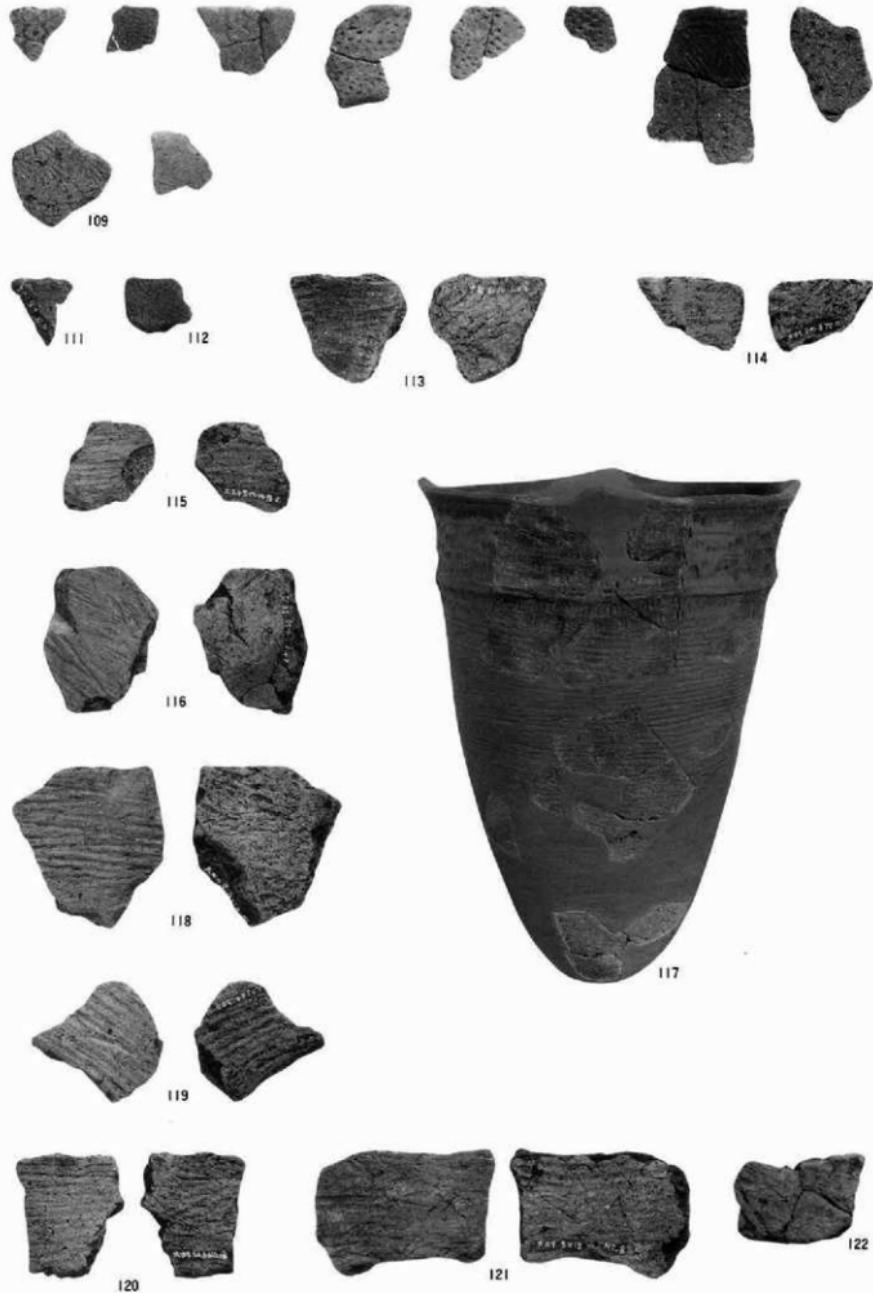


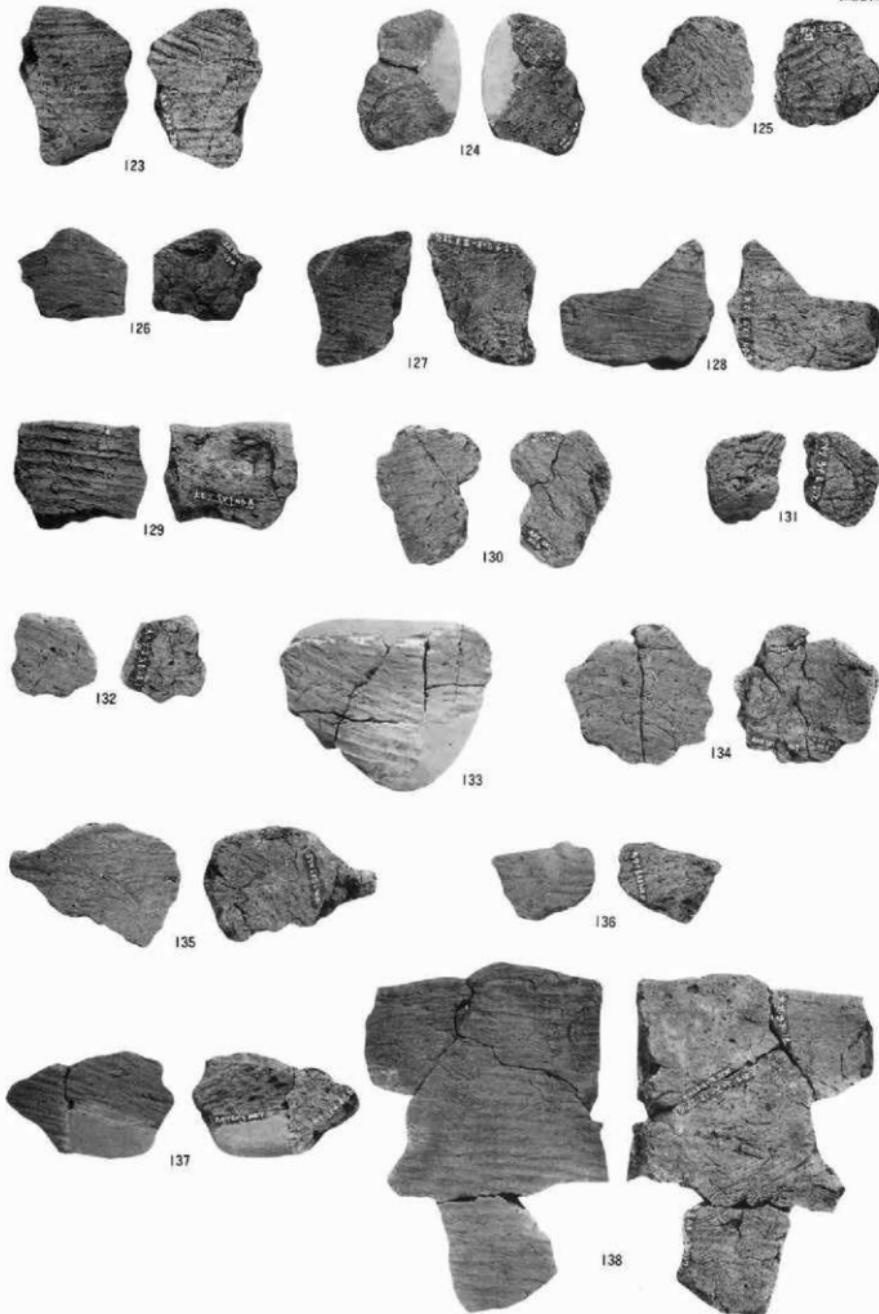


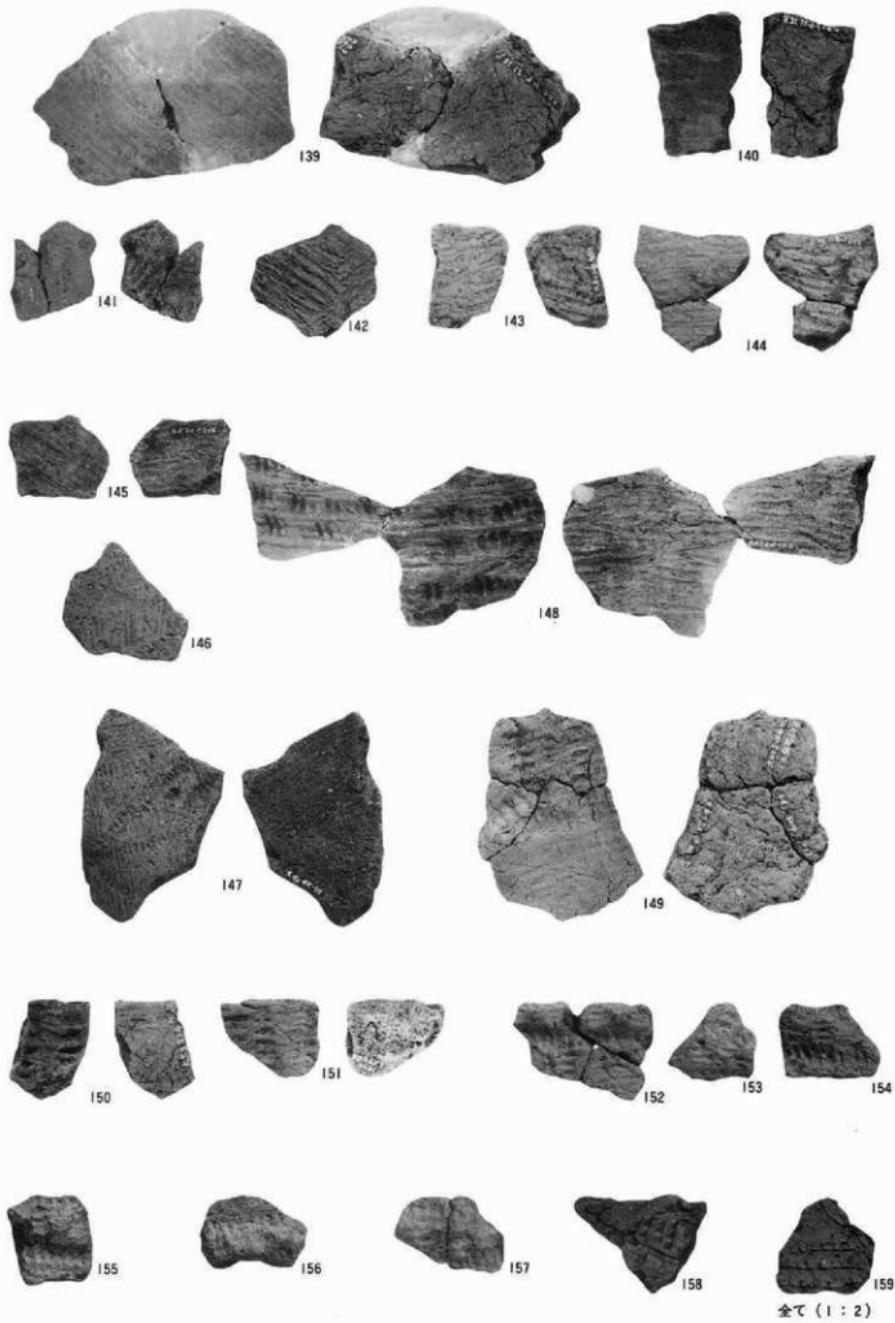
16・26・29 (1 : 4)
ほか (1 : 3)

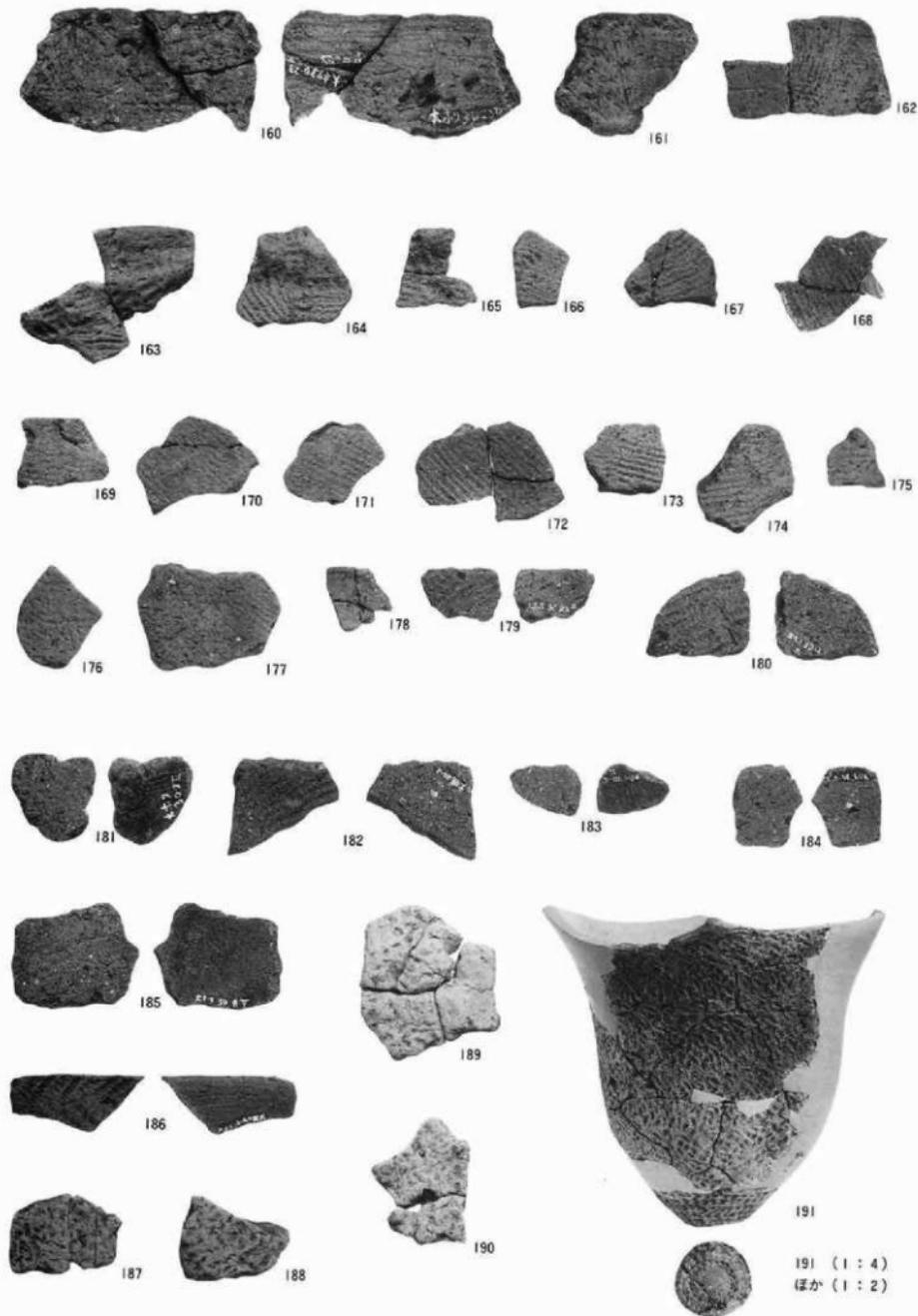


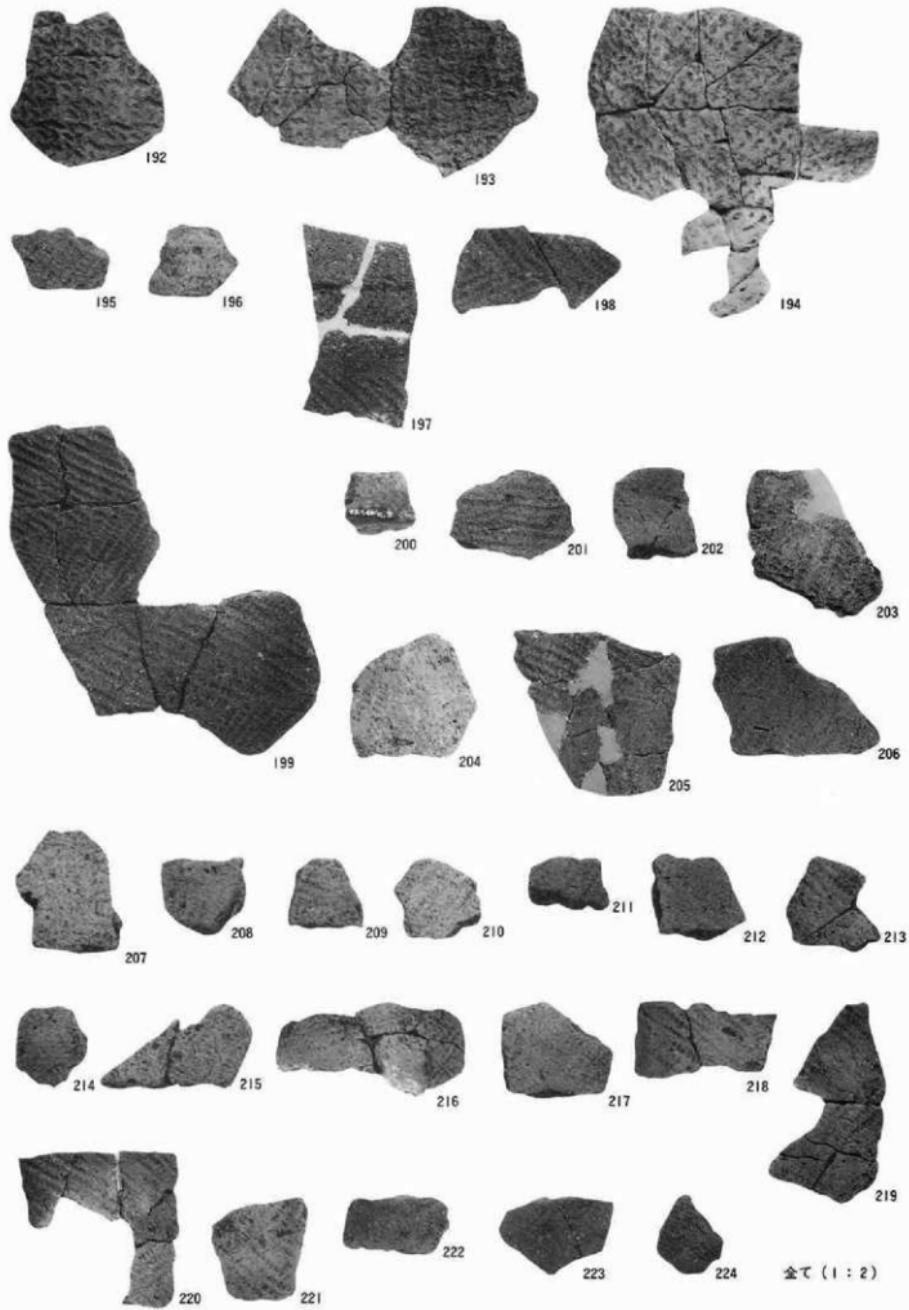
全て (1 : 2)

117 (1 : 4)
ほか (1 : 2)





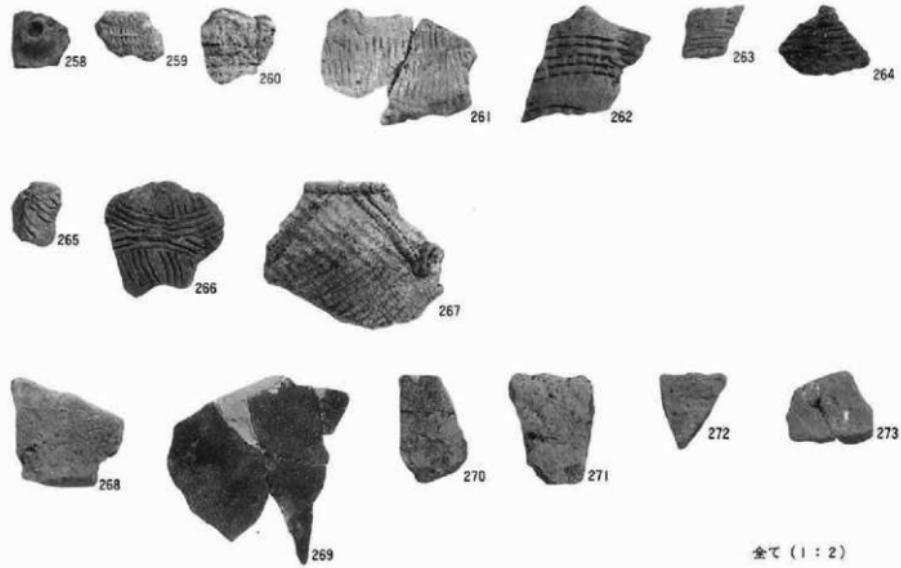




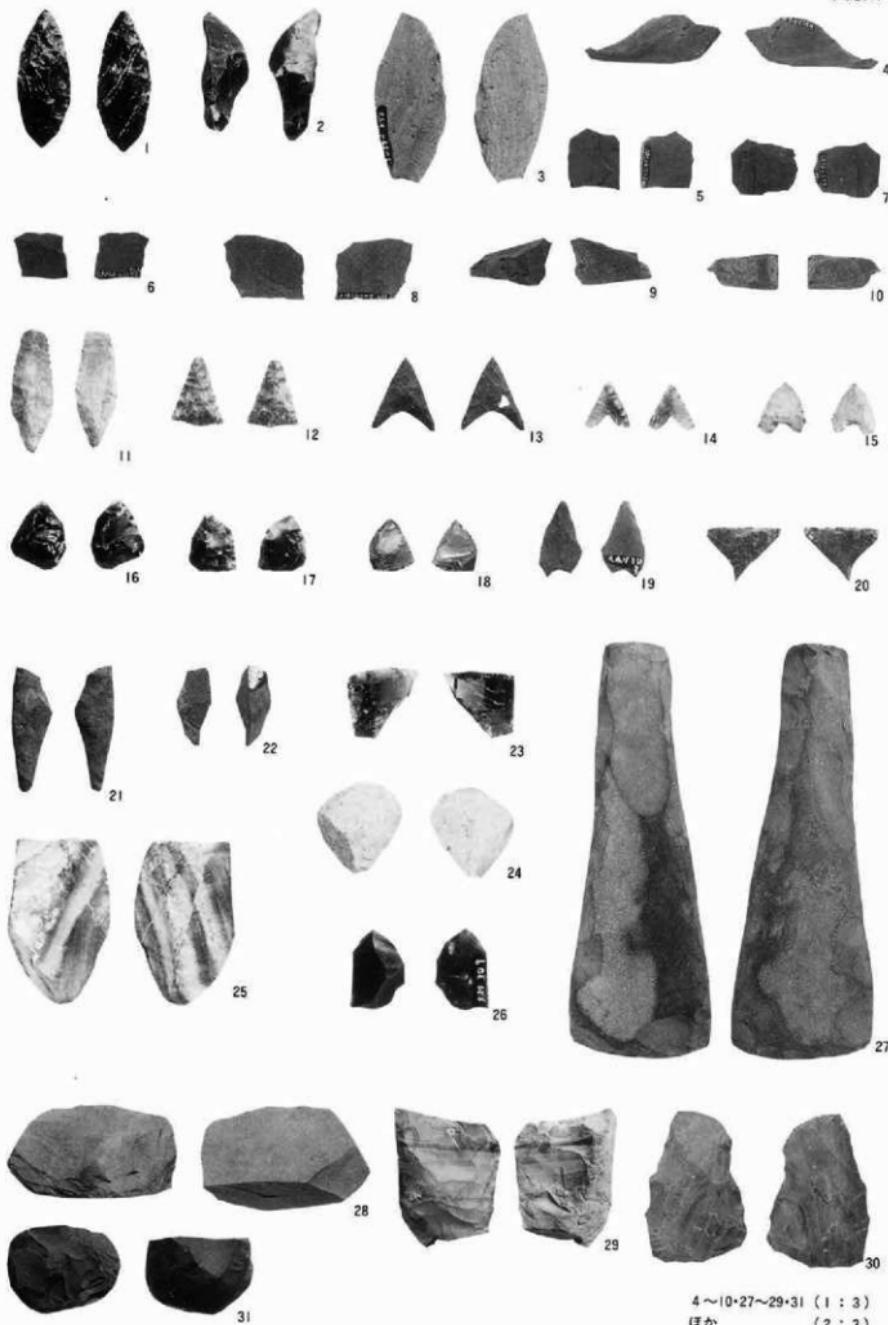
全て (1 : 2)



全て (1 : 2)



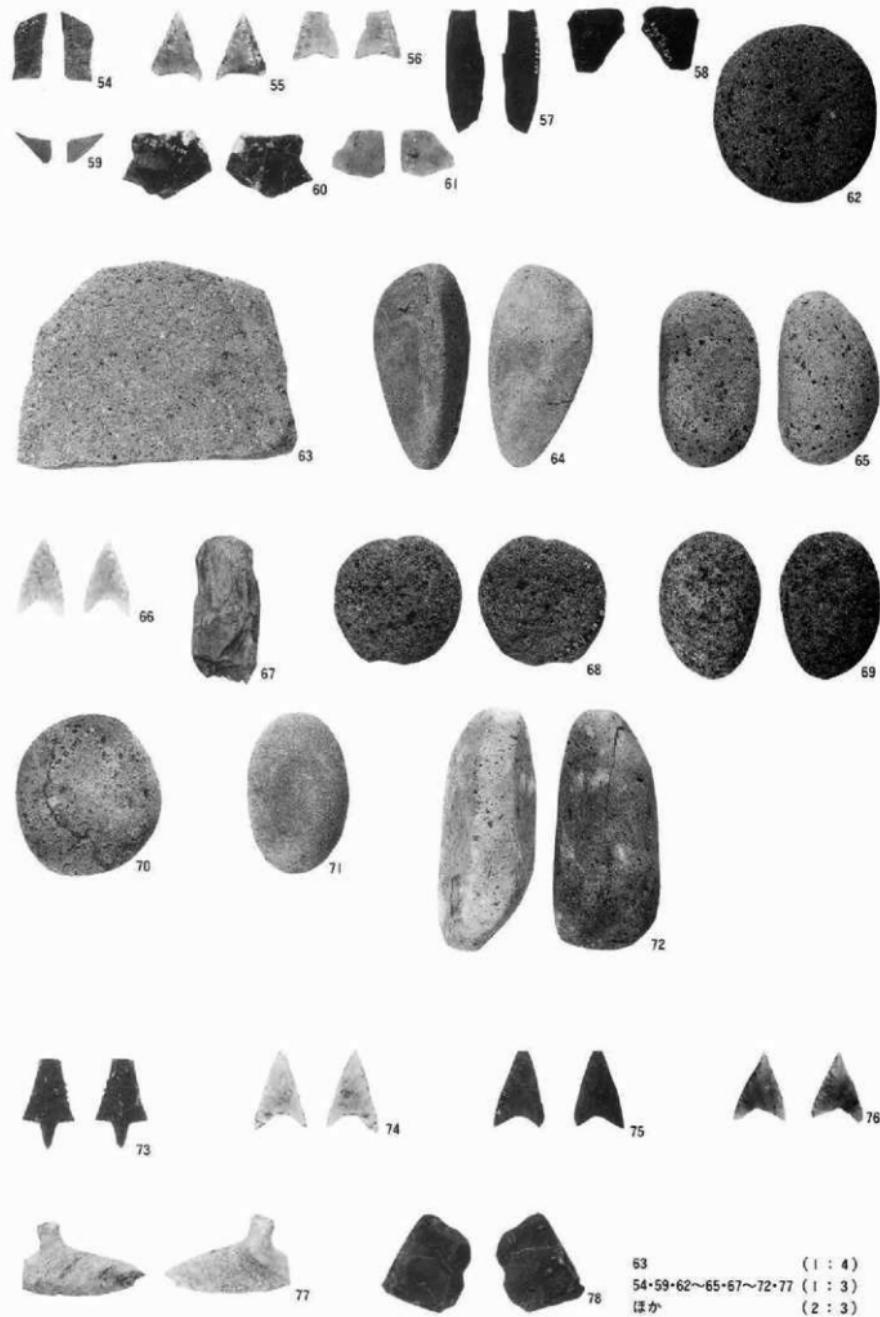
全て (1 : 2)



4~10・27~29・31 (1:3)
ほか (2:3)

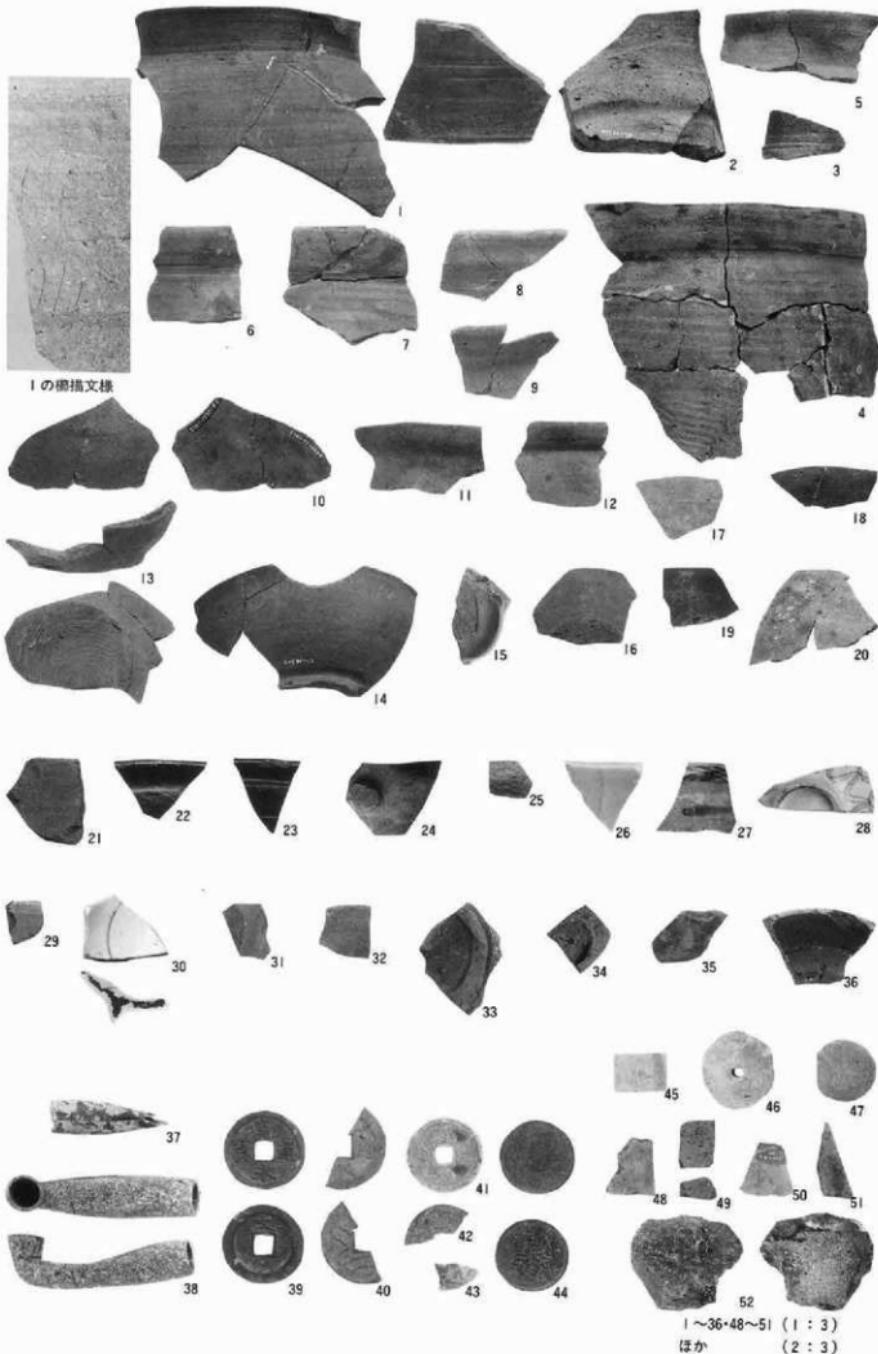


全て (1 : 3)





全て (1 : 3)



報告書抄録

書名	おおほりいせき
副書名	一般国道18号妙高野尻バイパス関係発掘調査報告書
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第75集
編著者名	立木(土橋)由理子・寺崎裕助・和田壽久・三浦泰介・大滝正人・佐藤執二
編集機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒951 新潟県新潟市一番堀通町5923-46
発行年月	1996年3月29日

所取遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大堀遺跡	新潟県中頃城郡 妙高高原町大字 関川字大堀1276 ほか	15-545	51	36度 51分 17秒	138度 11分 49秒	1次調査 19911111～19911122 二次調査 19930515～19931112 19940425～19941130 19950518～19950731	21,800m ²	一般国道18号妙高野尻バイパスの建設に伴う
遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
大堀遺跡	遺物散布地	旧石器・縄文(革新?～前期)・平安・中世・近世		陥穴状土坑13基 (縄文)・土壙墓1基(近世)		ナイフ形石器・ 縄文土器・石器 ・土師器・須恵器 ・珠洲焼・近世陶磁器		

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第75集
一般国道18号妙高野尻バイパス関係発掘調査報告書Ⅰ
大堀遺跡

平成8年3月22日印刷	発行	新潟県教育委員会
平成8年3月29日発行	編集	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
		〒951 新潟市一番堀通町5923-46
		電話 025(223)5642
		FAX 025(228)1762
	印刷	柳北都
		〒950 新潟市笠口1-8
		電話 025(244)8255

正誤表

頁	行	正	誤
18	27	(117・147～157・163～166)	(116・117・163～166)
19	38	(186・197～199・202・219～221・228・233・237～239・241・242・248・253・254)	(186・197～199・202・219～254)
20	8	(195・196・200・201・203～218・222～227・229～232・234～235・240・243～247・249～252)	(195・196・200・201・203～218・222～227・229～232・234～235・240・244・245・247・249～251)
26	5	塊(14～20)	塊(14～19)
36	51	24 両極石器	24 使用痕ある剝片
36	55	25 使用痕ある剝片	26 両極石器